



猫街ろまん

目次

主な登場人物の画像一覧

第一章 猫街より

第二章 春らんまん

第三章 空いろのくれよん

第四章 あしたてんきになあれ(体験版未収録)

第五章 風をあつめて(体験版未収録)

第六章 抱きしめたい(体験版未収録)

第七章 猫街より(体験版未収録)

主な登場人物の画像一覧



おおたき ばんない

大瀧伴内



くろき ちかぜ

黒貴千風



すずき しらたま

鈴木白玉



おおたき

大瀧ミケ



すずき

鈴木ドドンパ



くれない

紅ハジキ



くろがね

鉄ペンチ



さわたり

しなもん

佐渡支那紋



ほその

ちゃとら

細野茶虎

第一章 猫街より

一陣の風が、寂れた街並を吹き抜ける初夏の午後、小学校から帰って来たばかりの、やんちゃ坊主という表現が良く似合う男の子を、臙脂色のエプロン姿の母親が出迎える。

「伴内、あんた宛てに変な手紙が届いてるんだけど……」

そう言いながら、母親は息子にレトロな風合いの封筒を手渡す。

「変な手紙？」

伴内と呼ばれた少年……大瀧伴内は、母親である大瀧千鶴から受け取った封書の手紙を、しげしげと観察する。セピア色の野暮ったい封筒は、古い映画などでしか伴内は目にした事が無いタイポグラフィで、飾られている。

「たしかに、ちょっと変なかんじの手紙だね。ふるくさくて、あやしい……」

本来、切手が貼られている筈の部位には、切手は貼られておらず、魔法陣のような奇妙な文様が描かれている事にも、伴内は気付く。

「切手もはってないよ、これ」

「見た目や切手が貼って無い事も変だけど、一番変なのは差出人なのよ」

「さしだしにん？」

千鶴の言葉を聞いて、伴内は封筒の裏面に記された、差出人の名前を確認する。確認して、伴内は驚きの表情を浮かべる。

記されていた差出人の名前は、伴内にとって、有り得ない筈の名前だったのだ。

「クロキチ？」

封筒の裏面には、「クロキチ」という名前が、差出人の名として記されていた。その名前には、伴内は一つだけしか心当たりが無い。

焦ったように封筒の封を剥がし、伴内は中から一枚の便箋を取り出す。封筒と同じ、セピア色の便箋を。

伴内は早速、便箋に目を通し始める……。

拝啓

伴内の兄貴、お元気ですか？ 俺は元気です。俺が突然、姿を消してしまったせいで、兄貴並びに大瀧家の皆様方には、心配をかけてしまったかも知れないけど、俺は元気ですから、心配しないで下さい。

去年の春に、ねこがみやま 猫神山のねこがみ 猫神の森に遊びに行ったら、兄貴が以前言っていた、ねこがみかく 猫神隠しにあってしまつたらしく、ねこまち 猫街っていう街に迷い込んでしまいました。そのせいで、兄貴の元に……大瀧家に戻る事が出来なくなってしまいました。連絡も取り辛い所なので、連絡が遅れてしまった事、申し訳ないです。

いそまち 滅多に開かないらしい、兄貴達が住んでる磯街市に通じる通路が、いきなり開いたので、急いでこの手紙を書いています。色々兄貴に伝えたい事があった筈なんだけど、突然の事なんで、何を書いたらいいのか分からなくなってしまいました。

兄貴の所に帰りたいんだけど、残念ながら、もう俺は帰る事が出来ません。だから、もし俺の事を兄貴がまだ待っていたり、探したりしているのなら、もう俺の事を待たないで下さい、探さないで下さい。

ずっと面倒見てくれて、遊んでくれて、育ててくれてありがとう、兄貴。大瀧家の皆さんにも、よろしくお伝え下さい。

大好きな兄貴へ、猫街より

「クロキチからの手紙……そんなことって」

呆然と呟く伴内に、千鶴が手紙の内容を尋ねる。伴内は黙って、手紙を千鶴に手渡す。

手紙に目を通した千鶴も、すぐに伴内同様に、驚きの表情を浮かべる。

「やっぱり、誰かの悪戯かしらねえ。クロキチが手紙なんて、書ける筈が無いもの」

千鶴の言葉に、伴内は頷く。

(たしかに、ありえないよな。クロキチが人間の言葉で手紙を書いて、俺に送ってくるなんて……)

伴内も千鶴も、クロキチが手紙を書いて寄越す事など有り得ないと考えた。それ故、送られてきた手紙は誰かの悪戯だと、二人は結論付けようとしていた。

何故、クロキチが人間の言葉で手紙を書いて寄越す事が有り得ないのか？ それは、クロキチは伴内が弟のように可愛がっていた、大瀧家の飼い猫だからである。クロキチは去年の春に行方不明になってしまった、黒い仔猫なのだ。

黒い仔猫だった事から、伴内がクロキチと名付けた……。

(落ちこんでる俺を元気づけるために、家族かトモダチのだれかが、クロキチからの手紙って事にして、俺に出したんだろうな、きっと……)

クロキチが行方知れずとなり、伴内は暫くの間、落胆し続けていた。そんな自分の事を励ます為に仕組んだ、誰かの悪意の無い悪戯なのだろうと、伴内は思った。

手紙の事は、その日の夕食時、家族団らんの話題となった。伴内は誰が手紙を書いたのか探ったのだが、誰が送ったのかは、分らなかった。無論、誰かの悪戯なのだろうという事で、大瀧家の意見は一致したのだが。

結局、誰が書いた手紙なのか分らないまま、その手紙の事は大瀧家で、話題に上がる事も無くなっていった。しかし、その手紙を伴内は、大切に取っておいたのだ……その手紙が、本当にクロキチからの手紙だったらいいなと、子供らしい期待を僅かに抱きながら。弟の様に可愛がっていたクロキチが、行方不明になっているとはいえ、死なずに何処かで無事に生きていてくれる事の、その手紙が証拠の様に、伴内には思えたのである。

そして、時間は過ぎ去り、クロキチの事はともかく、猫街から送られてきたクロキチからの手紙の事は、伴内の記憶の奥底に沈み、中学生になった頃には、思い出す事も殆ど無くなっていた……。

第二章 春らんまん

少し強めの風に煽られ、桜の花びらが舞い散る。二千八年三月三十日の朝、海沿いの地方都市である磯街市の北側にある、標高五百メートル程の低山……猫神山では、桜が咲き誇っている。まさに春爛漫といった感じに。

山腹を薄桃色に染める桜の森……猫神の森が、猫神山には存在する。本来なら、この春真っ盛りの時期、花見客で溢れ返っている程の、見事な桜の森なのだが、猫神の森には花見客は一人もいない。

花見客がないのは、猫神の森がある猫神山は、基本的に人の立ち入りが、禁止されているからである。古来より、この猫神山では猫神隠しと呼ばれる神隠しの一種が多発し、多くの行方不明者を出している。その為、猫神山自体への立ち入りが禁止される仕来りが、磯街にはあるのだ。

もっとも、立ち入り禁止だからといって、誰も立ち入らないという訳では無い。春爛漫の猫神の森には今、少年と少女が立ち入っている。来月から磯街高校に進学する予定の十五歳の少年……大瀧伴内と、伴内の妹であり、四月から磯街中学に進学する事が決まっている、十二歳の少女……大瀧幸の二人が。

「——綺麗だけど、何か妖しげな感じではあるな」

森の中を満たす、強い春の匂いを嗅ぎながら、薄桃色に染まる辺りの景色を見回し、伴内は呟く。色褪せたジーンズに白い長袖のTシャツという、ラフなファッションに身を包んだ伴内は、背は歳相応なのだが顔が童顔なせいもあり、やんちゃ坊主風の小学生時代の面影を、色濃く残したままである。

「兄貴！ 花見に来たんじゃないんだから、ちゃんとミケ探してよ！」

二十メートル程離れた場所にいる、兄同様のファッションに身を包んでいるボーイッシュな幸が、伴内を叱責する。

「分ってるよ！ ちゃんと探してるって！」

伴内は大声で幸に言い返しつつ、辺りを見回して、三毛猫を探す。伴内と幸は、昨夜から行方知れずになっている三毛猫……ミケを探す為に、猫神の森に入っているのだ。

ミケは三ヶ月程前から、大瀧家で飼い始めた仔猫である。幸が三ヶ月前、生後数週間という状態で捨てられてい仔猫を拾ってきてしまい、ミケと名付けて飼い始めたのだった。

その幸が可愛がって面倒を見ているミケが、昨夜から行方知れずになっている。大瀧家の面々はミケを探したのだが、ミケは見付からなかったのだ。ところが今朝、伴内と幸は近所の人から、猫神山の麓で猫神山に入って行くミケらしき仔猫を、昨晚見かけたという目撃談を、耳にしたのである。

ミケらしき仔猫が猫神山に入ったらしいという情報を得た幸は、即座に猫神山に入ってミケを探そうと言い出した。しかし、伴内は猫神山に入ってミケを探す事を躊躇い、幸を止めようとした。

猫神山に入る事が禁じられているから、伴内は躊躇ったのでは無い。ミケが猫神山に入ったという話を聞いた時、伴内の頭の中に、古い記憶が蘇った為、伴内は躊躇ったのだ。

伴内の頭の中に蘇った、古い記憶……。それは、行方知れずになった愛猫クロキチから送られて来た……という事になっている、一通の不思議な手紙の事である。

クロキチからの手紙には、クロキチは猫神山で猫神隠しにあったという内容の事が、書いてあったのだ。無論、その手紙自体は悪戯に決まっているだろうから、書いてある内容に関しても、信憑性など無いに等しいと、伴内自身も考えていたのだが。

手紙自体は悪戯だったのだろうと思っではいるのだが、それでも手紙に書かれていた内容に関する記憶と、ミケが猫神山に入ったという今回の一件が頭の中で繋がり、伴内は嫌な予感がしたのだ。それ故、伴内は猫神山に入る事を躊躇い、幸を止めたのである。

しかし、愛猫の身を案じる幸は、兄の制止を聞かず、一人でも猫神山に入り、ミケを探すと主張した。妹だけを猫神山に入らせる訳には行かないと判断した伴内は、幸と共に猫神山に入り、ミケを探し始めたのだ。

猫神山の麓から猫神の森に入り、既に一時間以上、伴内と幸はミケの事を探し続けていた。ミケの好物である煮干の袋を手にして、ミケの名を連呼しながら。

だが、ミケは二人の前に姿を現さない。普段は温和な幸が伴内を叱責したのは、ミケが見付からな

いせいで、焦っているからだという事を、伴内は察していた。

「ミケ、どこにいるの？ ミケの大好きな煮干だよー！」

幸は声を張り上げながら、桜の木々の間を歩き続ける。すると、何処からか微かな……それでいて訴えかけるような猫の鳴き声を、二人の耳は聞き取った。聞き覚えのある、ミケの泣き声である。

伴内と幸は顔を見合わせて、鳴き声が聞こえてきた方向に目をやる。鳴き声が聞こえてきたのは、二人の間に立っている大きな桜の樹の、枝の上だった。

「ミケ！」

ミケは桜の樹の樹上……高さ七メートル程の辺りにある枝の上で、震えていたのだ。幸は嬉しそうに見上げながら、樹上のミケに声をかける。

「成る程、猫神の森に遊びに来て、桜の樹の上に上ったら降りられなくなったんで、家に帰って来れなくなった訳か」

桜の樹の元に駆けつけた伴内は、幸と共に樹上のミケを見上げる。

「それにしても、仔猫の癖に、あんな高さまで良く上ったな」

伴内は、関心したように呟く。

「見付かったのは嬉しいけど、どうやって助けよう？ 梯子も何も無いし……」

ミケが見付き、安心した幸は、今度はどうやってミケを助けるかという事について、頭を巡らせ始める。

(パチンコで枝を撃って、ミケを驚かせて落っことしてから、受け取るか……)

パチンコが得意であり、常に携帯している伴内は、パチンコで枝を撃ってミケを驚かせて木の枝から落下させ、地上で受け取ろうかと考える。しかし、誤射する事は無いにしても、幸にとっては気分が良くない方法だろうなと思い、伴内は考え直す。

「俺が上って、捕まえて来てやるよ」

「ホント？ ありがとう、兄貴！ でも、大丈夫？」

「何とか枝もあるし、この程度の高さなら余裕で上れるって」

そう言う、身軽さと運動神経には自信がある伴内は、桜の樹の幹を足場として跳躍し、二メートル強の高さにある枝を掴み、ぶら下がる。すると、そのまま猿のような身軽さで、するすると伴内は桜の樹を上って行く。

程なく、伴内はミケの元にまで辿り着いた。

「にゃあ！」

ミケは嬉しそうな鳴き声で、同じ枝に辿り着いた伴内を迎える。

「よしよし、こっちにおいで」

伴内は震えているミケを、優しく左手だけで抱き抱えると、枝に座って下を見る。

(下りる時は片手しか使えないから、慎重にルート確認しないとな)

ミケ同様に伴内にとっても、上りより下りる方が難しいのだ。まして、ミケを抱えている左手は、使えないも同然なのだから。

もともと、多少は難易度が上がるとはいえ、伴内にとって不可能という程の事では無い。足場にしたり手で掴める枝を把握し、下りるルートを確認した伴内は、すぐに自分がミケを連れて、下で待っている妹の元に戻れるだろうと確信する。

「——？」

しかし、実際に下り始めようとする直前、伴内は何らかの形容し難い違和感を感じる。腕の中のミケも違和感を感じたのか、総毛を逆立て、ふーっと唸り声を上げ始める。

「どうした、怖いのか？」

伴内は優しげな目でミケを見ながら、声をかける。

「大丈夫だよ、すぐに幸の所に連れて行ってあげ……え？」

ミケに声をかけながら、伴内は違和感の正体に気付く。違和感の正体……それは、桜の花びらの動きだった。

先程まで、風に舞いながら落下していた無数の桜の花びらが、全て重力に逆らい、樹上に向かって舞い上がっていたのだ。上昇気流に舞い上げられているというよりは、何か上方にある存在に、吸い寄せられているかの如く。

「何だ？」

伴内は桜の花びらの動きの流れを読み、空の一点を見詰める。伴内が上っている桜の樹から、五十メートル程離れた地点の、地上から五十メートル程の高さの空中に、桜の花びらは向かっていた。

桜の花びらは、黒い小さな点に向かっていた。青空に穿たれた穴としか表現のしようが無い黒い点に、辺り一面の桜の樹から離れた、薄桃色の花びらは吸い込まれていたのだ。

穴は急速で拡大し続け、花びらが舞い上がる速度は、穴の大きさに比例するかの様に加速し続けている。伴内の背筋に、悪寒が走る。

得体の知れない空に穿たれた穴が、桜の花びらを吸い込んでいる事と、その吸い込む力が次第に増大している事を察した伴内は、これから先に起こり得るだろう危機を、察したのだ。自分達がいる場所が、古来より猫神隠しという神隠しが多発する猫神山の中だという事も、伴内が察した危機を裏付ける。

「逃げろ、幸！ 猫神隠しだっ！」

伴内は右手で穴を指差しつつ、自分を見上げている幸に、大声で警告を発する。まだ空の穴の存在に気付いていなかった幸も、伴内の警告によって、穴の存在と自分達に襲い掛かろうとしている危機に、気付く。

「あの穴の反対側に向かって、全速力で走れっ！」

「——兄貴は？」

「俺もすぐに下りて逃げるから、安心しろ！ 俺を待ってから逃げようだなんて考えずに、全速力で走って逃げろ！」

強い語調で命じる伴内の言葉に、幸は不安げに頷くと、穴の出現したのとは反対側の方向……山の

麓に向かって、全力で走り始める。

「さて、俺も逃げないと……」

身軽な伴内とはいえ、高さ七メートルからでは、飛び降りる訳には行かない。伴内は先程確認したルート通りに、急いで桜の樹から下り始める。

猫を抱えたままであるにも関わらず、伴内は十秒程度で桜の樹から下りて地面に辿り着くと、幸の後を全速力で追いかけて始めた。

(五十メートルくらいか……すぐに追いつく距離だな)

伴内が推測した通り、本来なら幸より足が速い伴内は、簡単に追いつく事が出来る筈の距離だった。しかし、伴内は幸に追いつく事が、出来なかった。十秒間の遅れと五十メートルの距離の差は、兄妹の運命を別つには、十分過ぎたのだ。

幸の後を追って走り始めた伴内の足が、突如、地面から離れた。まるで地球の重力から切り離されたように、伴内の両足が空しく宙を蹴る。

「——って、何だよ、こりゃあ？」

地球の重力から切り離されたのは、伴内だけではない。辺りの土砂や桜の木々までが、伴内と共に、宙に舞い上がり始めたのだ。伴内がミケを助ける為に、上っていた桜の樹も、宙に舞い上がり、穴に吸い込まれて行く途中だった。

浮き上がった伴内達は、空に穿たれた穴に向かって吸い上げられて行く。

(やっぱり、猫神隠しかっ！)

この段階に至り、自分が遭遇した危機が猫神隠しであるのだと、伴内は確信する。無論、自分が既に猫神隠しから、逃れられないだろう事にも……。

伴内は、穴の方に目をやる。既に直径二十メートル程の大きさに成長した黒い穴は、一気に猫神の森の中にある物を、吸い上げにかかっていた。まるでブラックホールの様に。

穴に向かって吸い上げられながら、伴内は幸が逃げ去った方向に目をやる。幸がいる辺りは、黒い

穴の吸い上げるパワーは届いていないようで、全力で猫神の森から逃げ去って行く幸の後姿が、伴内の目に映る。

「良かった……幸は無事みたいだ」

幸が無事である事に安堵しながら、伴内は腕の中にいるミケに話しかける。

「お前、またご主人様と、離れ離れになっちゃったな」

「にやあ……」

悲しげな声で鳴くミケを、伴内は強く抱き締める。ミケを抱き締めたまま、伴内は桜の樹などと共に、黒い穴に吸い込まれ、この世界から消え失せる。

伴内とミケは、猫神隠しにあったのだ。

雑然とした事務室のドアを、まるで自分の家の部屋であるかの様に気楽に開き、タイトな黒いデニムの上下に身を包んだ、ショートヘアーの女性が、顔を覗かせる。

しらたま

「白玉さん、いる？」

マニッシュではあるが、女性的な魅力にも溢れている、人間でいえば二十歳前後に見える黒いデニムの上下の女性は、事務室の中に入りながら、目当てである相手の姿を探す。

ちかぜ

「千風じゃないか。こんな夜遅くに、どうしたんだい？」

事務室の奥にあるドアが開き、白衣を着込んだ初老の女性が姿を現す。この女性が、マニッシュな女性……黒貴千風が白玉さんと呼びかけた相手……鈴木白玉である。

くるき

すずき

長い白髪を後頭部で大雑把に結っている白玉は、初老とはいっても年齢の割りに若々しく、女性としての艶と魅力がある。

「仕事帰りに市場に寄ったら、竹輪の特売やってたんで、まとめ買いして来たんだ。だから……お裾分け」

千風は白玉に歩み寄りながら、手にした大きな紙袋の中から、竹輪の入った小さな紙袋を取り出し、白玉に手渡す。

とびきち

「飛ビ吉の竹輪かい！ そいつはいい、有り難く貰っておくよ」

水産加工業者である飛ビ吉の商標である、大きなトビウオのマークが印刷された、竹輪が六本入っている紙袋を受け取りながら、白玉は舌なめずりをする。まるで猫の様に。

「それにしても珍しいね、飛ビ吉が特売やるなんて。安売りせんでも、売れるだろうに」

「トビウオが予想以上の大漁で、一時的に価格が暴落してるせいらしいよ」

市場で耳にした飛ビ吉の竹輪特売の理由を、千風は白玉に教える。飛ビ吉の竹輪や蒲鉾、薩摩揚げなどは、トビウオを主原料にしたもので、味も品質も他の水産加工業者に比べ、格段に評判が高い。

主原料であるトビウオの市場価格が暴落した事から、一時的に飛ビ吉はトビウオを主原料とした主力製品の特売を決めたのである。こういった事は、余り無いのだ。

飛ビ吉の特売の話から始まり、他にも色々と雑談を交わした後、千風は白玉の家……というよりは、研究所と自宅が兼用となっている、古臭い屋敷……白玉研究所を後にした。機嫌良さ気に、黒くて長い尻尾を振りながら。

千風の尻尾は、本物である。尻尾が生えているのは千風だけでは無い。白玉も白くて長い尻尾を生やしているし、千風や白玉が住んでいる街に住む住人達の殆どに、尻尾は生えている。

尻尾が生えているという点以外にも、千風達には普通の人間と、外見上異なる点がある。それは耳である。人間なら頭の両サイドにある筈の耳が無く、頭の天辺に二つ、毛に覆われた、猫の耳の様な耳が生えているのだ。

猫の様な耳と尻尾は、千風達が住む街の住民にとって、当たり前のものである。

千風は夜道を、自分の住処に向かって歩いて行く。千風の住居は白玉研究所の隣りに建っている、

古びたアパート……猫神荘である。

アパートといっても、入居しているのは千風だけであり、隣りにあるといっても、白玉研究所からは五十メートル近く離れている。ちなみに、猫神荘のオーナーは白玉なのだ。

猫神荘という名は、猫神荘の前に広がっている森……猫神の森から、名付けられた。猫神の森は、春には桜や梅などの花、秋には銀杏などの紅葉で色づく木々が多い、美しい森なのだが、千風達の住む街の住人達は、殆ど近付こうとはしない。

住民達が近付かない理由は、ごく希にはあるが、猫神隠しと呼ばれる超常現象が、猫神の森では発生するからである。猫神隠しは、噂や都市伝説の類では無い。時空間の扉が開き、別の時空と一時的に通じる穴が出現し、この時空の物を別の時空に飛ばしたり、別の時空から、この時空に物を引き寄せたりしてしまう現象が発生する事は、古来より科学者達の研究によって、明らかになっているのだ。

この時空から別の時空に飛ばされる現象は、猫神隠しと呼ばれ、この時空に別の時空から飛ばされて来る現象は、猫神招きと呼ばれている。千風達が住む街には、猫神招きによって、別の時空から飛ばされて来た者達や、その末裔達も、多くは無いが暮らしている。

千風の住む街の住民達は、猫神隠しを恐れて、街の東外れにある猫神の森近辺には近付かない。猫神隠しが起こらない絶対安全圏であると、街一番の科学者である白玉が保証し、自ら住み着いている、猫神の森に隣接する地区……躊躇い境には、白玉の他には千風しか住み着いていないのだ。

夜風が吹き抜け、千風の身を震わせる。千風の視界で、薄桃色の花びらが踊る。普段通り、凛々しく引き締まっていた千風の表情が、花びらを見て緩む。

「桜か……夜桜見物しながら、竹輪を食べるってのも、乙なもんかな」

猫神荘の前に辿り着いていた千風は、風に舞う桜の花びらを見て、進路を猫神の森に変更する。千風は桜の花が、好物である竹輪と同じ位に大好きなのだ。

猫神の森を研究対象の一つとしている科学者の白玉から、猫神隠しの発生確率や、発生した場合の対処法など、千風はレクチャーを受けているので、他の住民と違って、猫神の森を恐れはしない。風に乗って花びらが流れて来る方向に向かって、千風は心を躍らせながら歩き始める。

千風が猫神の森の中を歩き始めた直後、夜空に轟音が響き渡る。家屋が崩落する際に発生する、木材が落下したり砕け散ったりする音に、その轟音は似ていた。

夜目が利く千風は、総毛を逆立てて警戒しながら、轟音が聞こえて来た方向に目をやる。千風が目線の先……一キロ程先の猫神の森の中では、爆発でも発生したかの様に土煙が舞い、月明かりを浴びて煌めいている。

「猫神招きだよ、かなり大きい！」

研究所から飛び出して来た白玉が、千風に大声で話しかける。白玉研究所には、猫神の森で発生した時空振動を感知するセンサーがあるので、猫神隠しや猫神招きが発生した際は、すぐに分るのだ。

すばる

白玉は研究所の隣りに停車してある、丸みを帯びたフォルムの白い軽自動車……昴百式に乗り込むと、土煙が舞っている方向に向かって走り始める。白玉の目的は、猫神送りで異世界から送られて来た物の調査や、送られて来た者の保護である、

「一緒においで！ 何か面白い物が、招かれてるかもしれないよ！」

猫神招きの発生地点に向かう途中の白玉に誘われた千風は、自分の脇をすり抜けて行こうとする昴百式の屋根に、ひらりと飛び乗る。次第に速度を上げ始めた、昴百式の助手席のドアを開けると、千風は助手席に乗り込む。

「運転、代わろうか？ 白玉さんの運転は、危なっかし過ぎる。普通の道ならともかく、森の中じゃ、事故を起こしかねないもん！」

凸凹がある森の中を、酷く揺れながら走り続ける車の中で、千風は白玉に問いかける。乗り物などを開発するのは得意だが、運転するのは下手な白玉と違い、千風は運転は得意なのだ。

「馬鹿にするでない！　せいぜい一キロ程の、勝手知ったる猫神の森の中で、あたしが事故なんか起こす筈が……ああああああっ！」

話しながら運転している白玉は、いきなり奇声を上げる。突如、フロントガラスの前に、大岩が現れたのだ。このままでは、昴百式は大岩に衝突してしまう。

千風は瞬時にハンドルに手を伸ばすと、強引にハンドルを左に切る。昴百式は左側に急カーブし、何とか大岩との衝突を避ける。

「だから、言わんこっちゃ無い」

呆れた様な口調で呟きながら、千風は長い脚を伸ばして、ブレーキを踏む。昴百式は急停止する。

「運転席、代わって！」

千風の強い口調の言葉に、白玉は渋々と応じ、運転席を明け渡して助手席に移動する。運転手が千風に代わった昴百式は、木々や岩などの障害物が多い森の中を、スムーズに進み続け、すぐに目的地に辿り着く。

「こりゃ、かなり大規模だねえ」

既に猫神招き自体は終息し、別時空との通路は閉じている。猫神招きの発生地点には、大量の土砂や岩、多くの木々の残骸などが散乱していた。その全てが、別時空から送られて来た物である。

車から降りた白玉と千風は、小さな丘のように積みあがった、土砂や木々の残骸などを見上げる。千風は木々の残骸に、桜の樹が混ざっている事に気付く。

「桜って事は、あっちの時空の桜の森……猫神の森から、送られて来たのかな？」

千風同様、土砂から顔を出している桜の樹の残骸に気付いた白玉が、千風に問いかける。

「懐かしい匂いがするから、多分」

土砂の丘を登り、桜の樹の残骸に近付きながら、千風は白玉の問いに答える。その土砂と桜の樹の匂いは、千風にとって懐かしい匂いを漂わせていた。

「——にやあ」

突如、猫の鳴き声が微かに聞こえたような気がした千風は、土砂の丘を登るのを止めて、耳を澄ます。

「にやあ……にやあ……」

「白玉さん、猫が送られて来てるよ！ 多分、仔猫だ」

鳴き声の感じから、仔猫である事を察した千風は、四つん這いになって、土砂を掘り始める。鳴き声は、土砂の中から聞こえて来たからだ。

仔猫は浅い所に埋まっていたので、千風はすぐに、仔猫が埋まっている所まで、掘り進める事が出来た。しかし、掘り進めた所で、千風にとって意外な事態が発生した。

埋まっていたのは、仔猫だけでは無かった。仔猫は、人間の少年に守られるかの様に、抱き締められていたのである。

「に、人間だ！ 人間が送られて来ちゃってる！」

千風は驚きの声を上げながら、埋まっている人間を助けるべく、土砂を掘り進める。白玉も千風の元に駆け寄り、掘るのを手伝い始める。二人がかりの上、埋まっていたのは浅い所だったので、少年と仔猫を掘り出すのに、そんなに時間はかからなかった。

そして、掘り出されて土砂の上に仰向けに寝かせられた少年の顔が、月明かりに照らされて露わになる。その顔を見た千風は、まるで信じられないものでも目にしたかの様に両目を見開くと、少年の身体に鼻を近付け、少年の匂いを嗅ぎ始める。

「どうしたね？」

千風の異変を感じ取った白玉は、千風に問いかける。

「間違い無い！ この匂いは……」

懐かしい少年の匂いを確認してから、あらためて千風は少年の顔に目をやり、見詰める。歓喜に身を震わせている千風は、目から涙を溢れさせ始めている。

千風の様子を見て、白玉は少年が誰なのかを悟る。

「ひょっとして、このはいからさん……あんたが前から言ってた人かい？」

白玉の問いに、千風は頷く。

「——もう二度と会えないと思っていた。風集めで何度も願ったから、風の神様が願いを叶えて、会わせてくれたのかな……」

嬉しげに呟く千風を目線の先で、少年に守られていて無事だった仔猫が、少年に感謝の意を示すかのように、少年の顔を舐める。その三毛の仔猫が赤い首輪をしている事に、千風は気付く。

「俺の後に、猫飼ったんだ……兄貴。しかも、雌を」

少しだけ拗ねたような顔で、千風は呟く。嫉妬の感情が少しだけ、千風の中で湧き上がりはしたものの、再会の喜びに比べれば、それは小さ過ぎる感情であった。

「軽い怪我や打ち身に、意識を失っているだけで、大した事は無いようだね」

少年の容態を調べた白玉の言葉を聞いて、千風は安堵する。

「すぐに意識は回復するだろう。意識が戻ったら早速、再会を喜び合うがいいさ」

白玉の言葉に、千風は頷きかけるが、首を横に振る。

「——それは、止めとく。俺はあくまで、猫街住民の黒貴千風として、接する事にする」

「何故だい？ せっかく再会出来たのに？」

「考えてみれば、兄貴は猫街に来た以上、もう大事な家族や友達と、会えないんだ。兄貴は当然の様に、凄く哀しくて不安な思いをする筈なんだよ、昔の俺みたいに」

千風は仰向けに寝かされている少年の髪を、優しく撫でながら、言葉を続ける。

「そんな兄貴の前で、俺だけ再会した事を喜んで、はしゃげないよ。それに……」

「それに？」

「兄貴が猫神招きされて来たのは、俺のせいかもしれないんだ。俺のせいで、家族と離れ離れになったかもしれないなんて事を、兄貴に知られたら、俺……兄貴に嫌われちゃう」

「——この子が猫神招きされたのは、あんたが風集めで願ったせいだとでも思っているのかい？ だったら、それは考え過ぎってもんだよ」

白玉は、話を続ける。

「あれはあくまで祭りのイベントで、風の神様が願いを叶えてくれるだなんていうのは、根拠の無い言い伝えに過ぎないんだから」

「そうかもしれないけど、やっぱり兄貴には知られたく無いんだ、俺が風祭りで願った、身勝手な願い事を。だから、再会出来た喜びは、俺の心の中にしまっておいて……」

「猫街の住人……探偵の黒貴千風として、この少年に接する訳か。でも、この少年の方が気付きはしないかねえ？」

「気付く訳が無いよ。今の俺を見ても、兄貴は絶対……俺が誰だかなんて事には、気付かない」

「でも、気付いて欲しくはないのかい？」

「さあ……どうだろ」

首を傾げ、千風は口を濁す。

「そう言えば、あんたが自分の事を俺っていうの、その人の影響だったんだってね」

千風は白玉の言葉に、頷く。嬉しそうな、昔を懐かしむような目で、その少年……大瀧伴内の事を見詰めながら。

薄いカーテンが優しく遮った朝日を臉に浴び、伴内は目覚める。おずおずと開いた目に映ったのは、古いハリウッド映画などで目にした事がある、天井からぶら下がるタイプの、大きな扇風機だった。

ゆっくりと回転しながら、部屋の空気を掻き混ぜている扇風機は、仰向けに寝転がっている伴内に、微風を送っている。コーヒーの芳しい香りが混ざった、微風を。

「——コーヒー？」

コーヒー好きの伴内は、部屋を満たす淹れ立てのコーヒーの香りに反応し、呟く。

「飲むなら、淹れるけど？」

アルト気味の声が、伴内の呟きに応える。聞き覚えの無い声が独り言に反応した事に驚き、伴内は上体を起こして声が聞こえて来た方向に、目をやろうとする。

直後、伴内は身体の各所から、耐えられない程では無いが、それなりに強い痛みを感じ、顔を顰めて軽く呻く。

「怪我や打ち身だらけだったからね、いきなり動くと痛いだろ」

先程と同じ女性の声が、伴内を案じるかの様に話しかけて来たので、伴内は声の主がいる方……右斜め前のソファに腰掛けている、二十歳前後の女性に目をやる。黒いデニムの上下という出で立ちの、背の高い女性に。

女性はソファの前にあるテーブルの上に置かれた、サイフォン式の卓上コーヒーメーカーで、コーヒーを淹れている最中だった。女性は手馴れた動作で陶製のコーヒーカップに淹れ立てのコーヒーを注ぐと、角砂糖を一つとスプーン二杯分のクレーミングパウダーを入れ、スプーンで掻き混ぜる。

コーヒーカップを皿に載せると、女性は立ち上がり、伴内に歩み寄って来る。

「どうぞ」

女性は伴内に皿ごと、コーヒーカップを手渡す。

「あ、どうも。頂きます」

軽く頭を下げてから、コーヒーカップを受け取ると、伴内はコーヒーを口に含んで味わってみる。淹れ方を見た時点で、予想がついていた事なのだが、コーヒーの味は伴内好みであった。

(——角砂糖一つに、クレーミングパウダー二杯……俺の好みにピッタリだな)

空腹で喉も渴いていた伴内は、初対面の相手が自分好みのコーヒーを何故淹れる事が出来たのかという事より、美味しいコーヒーを飲める事の方に興味に移り、一気にコーヒーを飲み干してしまう。

コーヒーを飲んだ事により、色々な意味で落ち着いた伴内は、自分がある部屋のあちこちに目をやり、自分が置かれている状況を確認してみる。飾り気は無いが、趣味良く整えられた、良く言えばレ

トロ……悪く言えば古臭い設えの女性の部屋に、身体の各所に包帯を巻き、絆創膏や湿布を貼られた自分がいるのだという事を、伴内は理解する。

そして、自分が寝ていたベッドの右端に腰掛け、自分の様子を楽しげな表情で見詰めている女性に、伴内は目をやる。

(綺麗な人だけど、子供っぽい趣味してるな。猫耳の髪飾りなんて……)

女性の頭髪の上にある、猫のような耳の存在に気付き、伴内は心の中で呟く。

「あ、コーヒーどうも。美味しかったです」

「口に合ったなら、おかわりしても構わないよ」

「いいです。そんな事より、俺は一体……何で此処に？」

そういった質問を伴内がするだろう事は、予測していたのだろう。女性は澀み無く伴内の問いに答え始める。

「昨夜、猫神招きが起こってね、君は君が住んでた時空から、別の時空……俺達が住んでる時空に、飛ばされて来たんだよ」

女性は「猫神招き」という、別の時空から様々な人や物などが来てしまう現象について、伴内に説明する。なるべく分かり易く、丁寧に。

別の時空に飛ばされたなどという女性の話は、本来なら信じ難い話である筈なのだが、猫神隠しという超常現象を、実際に体験してしまった今の伴内は、女性の話を理解し、信用する事が出来た。無論、自分が生まれ育った時空から、別の時空に飛ばされた現実は、出来れば認めたくない、受け入れ難い現実ではあったのだが。

「——それで、猫神の森で土砂に埋まって、気を失っていた君を、俺と白玉さんが掘り出して、助け出したって訳。君の飼い猫と一緒にね」

(自分の事、俺って呼ぶんだな。まるで、男みたいに……)

少し女性歌劇団の男役っぽい雰囲気のある女性には、俺という一人称は似合っているなど、伴内は

思う。そして、女性の話に出てきた飼い猫の存在を思い出した伴内は、慌てて女性に尋ねる。

「そうだ！ ミケは？」

「あの子なら、白玉さんが洗礼を受けさせてる、真っ最中だと思うよ」

「洗礼って？」

「洗礼は、この街で猫が生きて行く為の、通過儀礼みたいなものね。昔からの街の掟で決まってるのよ、あっちの時空の猫が、こっちの時空に迷い込んで来た場合は、洗礼を受けさせなければならないって」

「——俺は洗礼、受けなくていいの？」

「猫だけよ。人間は受けても意味が無い洗礼だから」

「それで、洗礼って一体、どんな事を？」

「説明しても信じられないだろうから、自分の目で見た方がいいと思う。身体が大丈夫なら、白玉さんのところに、見に行ってみる？」

女性の問いに頷きつつ、伴内は自分が自己紹介すらしていなかった事に気付く。

「俺の名前は太瀧伴内、歳は十五歳。助けてくれて有難う。それで……貴女は？」

伴内が名前を名乗るのを聞いて、女性は大きく頷く。何かを完全に、確信した様に。

「俺は黒貴千風、歳は二十歳。この街で探偵をやってるんだ。千風って呼んでくれ」

「俺は……伴内でいいや」

二人は会話を交しながら、部屋の出口に向かって歩き出す。少し前を歩く女性……千風が穿いているジーンズの、腰と尻の間辺りに穴が開いていて、そこから黒くて長い尻尾が伸びている事に、伴内は気付く。

上機嫌な猫の尻尾の様に、黒い尻尾は上にピンと伸びている。

「良く出来てるね、その尻尾の飾り物。あと猫耳のヘッドドレスも」

「これ？ 飾り物でもヘッドドレスでも無いよ、本物」

「本物？ そんな馬鹿な！」

「いや、これが本当に本物なんだよね、信じられないかもしれないけど」

千風の言葉が冗談だろうと思った伴内は、触れば偽物だと分るに違いないと思い、千風の尻尾に右手を伸ばし、むんずと掴んでみる。

「——ひ！」

全身を震わせ、短い悲鳴のような声を上げた千風は、驚いて伴内の方を振り向く。千風は顔を赤面させ、伴内の事を睨み付けている。

（え？ ほ、本物？）

千風の反応速度の速さと、触った尻尾の感触から、まるで本物の猫の尻尾を触ったかの様な錯覚を、伴内は覚える。

「——あ、ごめん！ 触れば本物かどうか分ると思ったんだけど、触ったら駄目なの？」

伴内の言葉に、千風は大きく頷く。

「尻尾は、勝手に触っちゃ駄目。この街では、それは最大のマナー違反なんだからね！」

千風は顔を赤らめたまま、上ずり気味の口調で続ける。

「相手の同意を得ないで……ましてや異性の尻尾を勝手に触る様な真似したら、相手に引っ掻き傷だらけにされても、何も文句言えないんだから！ 分った？」

伴内は千風の勢いに圧され、大きく頷く。

（つまり、同意を得れば触っていい訳か）

もう一度、千風の尻尾を触って、本物かどうかを確認してみたいと思った伴内は、改めて尻尾を触る事の同意を、千風に求めてみる事にする。

「——じゃあ、本物かどうか、もう一度確認してみたいから、尻尾に触っていい？」

「え？ そんな……」

千風は伴内のストレートな申し出が意外だったのか、目を泳がせながら狼狽する。頬を紅潮させた

まま、千風は少女の様な含羞を見せつつ三十秒程躊躇った後、意を決して返答する。

「——じゃあ、本物だって信じて貰う為、特別に触る事を許してやる」

「いいの？ 有難う！」

「でも、神経が一杯通ってる敏感な部分だから、強く触るなよ」

伴内は、千風の言葉に頷く。そんな伴内の手許に、千風の尻尾が伸びて来る。伴内が触り易い様に、千風が尻尾を動かしたのだ。

長くも短くも無い、程好い長さの毛が生えた千風の尻尾に、伴内は優しく両手で触れる。千風がびくっと身を震わせ事による振るえや、尻尾の帯びた体温が、手を通して伴内に伝わって来る。

「——確かに、本物みたいだね」

触り心地の良い黒い尻尾を撫でながら、伴内は呟く。

「分ったのなら、もういいだろ。尻尾だけじゃなくて、耳も本物だよ」

振り返りながら、恥ずかしげに言い放つ千風の言葉に、伴内は頷く。千風は尻尾を動かし、伴内の手許から離す。尻尾が手許を離れた事を、伴内は少し惜しいなと思った。

「何で、本物の尻尾や猫耳が付いてるの？」

当たり前ともいえる疑問を、伴内は千風にぶつける。

「白玉さんの所で説明するよ、その方が伴内にも分り易いと思うから」

「——ところで、さっきから千風の話に出てくる白玉さんって、どんな人？」

「この街の長老格の一人でもある、隣りに住んでる科学者のお婆さん。まあ、お婆さんって感じじゃないけどね」

そう言うと、千風は部屋のドアに向かって歩き出す。

(それにしても、猫神隠しといい、尻尾が付いてる猫耳の女の人といい、非現実的な事ばかりだな。一体、どうなってるんだか)

伴内は千風の後を追いながら、自分がこれまで生きてきた人生の路線が切り替わり、得体の知れな

い路線に迷い込んでしまった事を認識し、嘆息する。

白玉研究所……通称タマ研は、「白玉研究所」という明朝体の看板が掲げられた、古臭くて大きい洋館風の屋敷である。壁の至る所には細かいヒビが走り、蔦が屋敷を囲むように絡み付いてるので、一見、かなり怪しげな建物に見える。

「白玉さん、いる？」

その怪しげな建物のドアを開け、千風は自分の家に入るかの様に、気楽に白玉研究所の中に入って行く。伴内も、千風の後に続く。

「千風かい。はいからさん……人間の方も、その様子なら大事無いようだね」

応接用のソファに座り、新聞を読んでいた白玉が、新聞から千風と伴内に視線を移し、話しかけてくる。

(この人も、猫耳と尻尾がある。一体、どうなってんだ?)

伴内は白玉の頭と腰の辺りに目をやり、猫耳と尻尾の存在を確認する。白玉が、はいからさんと人間である自分の事を表現したのも、少し疑問に思ったのだが、今の伴内にとっては、猫耳と尻尾が実在している事の方が、興味深かった。

「まあ、大した怪我では無かったようだから、お前さんの治療と面倒は、千風に任せておいたんだ。あたしは仔猫の方の洗礼を、行わなければならなかったからね」

白玉の話聞いて、伴内は千風だけで無く、白玉にも助けられたという話を、千風から聞いていた事を思い出し、礼を言わなければなと思う。

「昨日は助けて頂いたそうで……どうも有難うございます」

「礼儀をわきまえている奴は好きだよ。あたしは鈴木白玉、科学者をやってる婆さんさ。ま、白玉さんとでも呼んでくれ」

「俺は大瀧伴内、伴内でいいです。それで、ミケ……俺が連れていた三毛の仔猫を、白玉さんが預かっ

ているというか、洗礼を受けさせてるって、千風に聞いたんですけど……」

「ああ、昨夜から洗礼作業に入ってる。終わるまで、一週間以上はかかるだろうがね」

「——洗礼って、何なんですか？ それと、千風や白玉さんに付いてる、猫みみたいな耳や尻尾は、一体……」

伴内は続け様に、疑問に思っている事を白玉に尋ねる。

「——説明しなかったのかい？」

白玉は千風に、問いかける。

「俺が説明するより、白玉さんが説明した方が説得力あると思うし……」

千風の返答を聞いた白玉は頷き、伴内が疑問に思っている事について、説明を始める。

「まず、洗礼について説明する前に、あたし達に人間達が言う所の猫耳や尻尾が、何故に付いているかという事について、説明した方が良いと思うから、そっちの方を先に説明するよ」

「あ、はい」

「人間である伴内には、信じ難い話になるだろうし、あたし達自身も自分達の由来は、古文書や古来よりの伝承などでしか、知る由も無いんだ。まず、その事を前提として、この先の話聞いてくれ」

白玉の言葉に、伴内は頷く。

「伝承によれば、はるか昔、かつて地球を統べていた万物の霊長たる人類は、神へと至る進化の道程の途中、自滅に近い形で滅んだそうなんだ。多くの生物を巻き添えにしてね」

「遠い昔に、人類が滅んだ？」

伴内は、驚きの声を上げる。

「ああ、随分昔にね」

「だとしたら、ここは俺がいた時空から見て、未来世界って事なんですか？ いや、白玉さんの話が、本当ならだけど」

「その通り。伴内がいた時空から、正確な所は分って無いが、数百年から千数百年程未来という事に

なる。信じられないかもしれないが、本当の話だ」

伴内の問いに答えてから、白玉は話を続ける。

「人類が地球を巻き添えに滅び去った後、地球に神々が姿を現した。荒れ果てた地球の惨状を目にして、憂いた神々は、世界の再生に取り掛かる事にしたそうだ」

ソファの近くにある本棚から、古臭い書籍を取り出し、白玉は開く。

「これは、『再生の書』と呼ばれる古文書の、レプリカさ。この『再生の書』に、神々が世界を再生した経緯が、記されている」

再生の書のページを開いて、白玉は伴内に見せる。SF映画やアニメなどに出て来そうな未来世界が、完膚なきまでに崩壊したディストピア風のリアルなイラストが、開かれたページには掲載されていた。

ディストピア風のイラストには、闇に覆われた空から、光り輝く人型の神々が現れて君臨する光景も、描かれていた。

「地球を再生するにあたって、神々の間では、地球を統べるだけの知能と技術を持ちうる生物は、人類しか無いという意見が多数を占めた。しかし、人類は既に滅び去っていた上に、地球を巻き添えにして自滅した人類に、再び地球を任せる事に、不安を持つ神々もいた」

再生の書に記されている内容を要約し、白玉は伴内に語り続ける。

「そこで神々は様々なプランを立案したが、神々の意見は次第に、二つの意見に収束され、二つの地球再生計画が立案された。一つは過去との時間の通路を開き、人類を過去から連れて来て、再生した地球の主にする計画。もう一つが、現在の地球に生き残っている生物を、人類相当まで強引に進化させて、新たなる地球の主にするという計画だった」

白玉は再生の書のページをめくり、人間と猫のイラストが描かれたページを、伴内に見せる。

「ところが、一つ目の計画の方は、途中で中止に追い込まれる事になったんだ。神々ですら時間を上手く操る事は出来ず、過去の時空に通じる通路を、安定的に維持する事が出来なかったせいでね。だ

から、二つ目の計画が、地球再生計画として採用されたのさ」

「その地球再生計画で、新たなる地球の主にするべく、強引な進化を遂げさせられる生物として選ばれたのが、猫って訳？」

「その通り。神々は猫を強引に進化させる機械を作り出し、猫を人類と同等の存在にまで進化させたんだよ」

再生の書のページをめくり、普通の人間と、猫耳と尻尾を持つ人間の様な生物が描かれているイラストを、白玉は伴内に見せる。

「その地球再生計画で作りに出されたのが、あたし達のような猫人ねこびとという訳さ」

「猫人……」

伴内は白玉の猫耳と尻尾を見ながら、呟く。

「言っておくが、あたしの耳も尻尾も、偽物では無いぞ。あたしも千風も、仮装して他人を騙す程、暇人では無いからな」

「——分ってます。さっき千風に尻尾を触らせて貰って、本物だって確認しましたから」

「千風に尻尾を触らせて貰った？ ふーん、成る程ねえ」

白玉は口元を歪め、意味深な笑みを千風に向ける。千風は気まずそうに視線を白玉から逸らす……少し頬を染めながら。

「つまり、俺が生きていた時空から見たら、遠い未来である、この時空の地球は、猫人の世界になっている訳？ 人類は、俺独り？」

伴内は衝撃を受けながら、白玉に問いかける。過去から人間を輸入するという計画が頓挫し、猫を人類同等に改良する計画によって地球が再生された以上、人類は滅亡したまま、新たに補充されていない事になるからだ。

「いや、そんな事は無い。伴内同様に流されて来た人間や、その末裔がいるからね」

「俺同様に、流されて来た人間……」

「過去から人類を輸入する計画が頓挫した際、実験として開いた過去の時空との通路を、神々は閉鎖したのだが、閉鎖作業が不完全でね。結果として、世界の様々な所に、著しく時空が不安定な空間が発生してしまったんだ」

窓の外に見える猫神の森を指差しながら、白玉は続ける。

「この辺りでいえば、あの猫神の森とかが、時空が不安定な空間の代表例だね。この手の時空が不安定な場所では、突発的に過去の時空との通路が繋がり、こちらの時空のモノが過去に流されたり、こちらの時空に過去のモノが流されて来たりするのさ」

「猫神の森の場合、過去のモノが流されて来るのを猫神招き、こちらの時空のモノが過去に流されるのを、猫神隠しって言うんだよ。伴内の場合は、猫神招きに遭った訳だね……さっき簡単に説明したけど」

千風が、白玉の説明を補足する。

「こっちに飛ばされて来る前の、俺が住んでいた場所には、猫神山って山があったんだ。猫神山では、昔から人が行方不明になる、猫神隠しって怪奇現象があったんだけど……」

「おそらく昔から、この時空の猫神の森と、伴内の暮らしていた時空の猫神山の間で、時空を越える通路が、繋がり易い状態になっているのだろうねえ」

白玉は、猫神の森から伴内に視線を移し、話を続ける。

「どちらの時空でも、自分がいた時空から飛ばされる現象が、猫神隠しと呼ばれている事は、以前に猫神招きされて来た者達からの調査で、明らかにはなっていたのだが」

「俺以外にも人間がいるのは、心強いな」

人間が自分だけで無い事を知り、安堵する伴内に、白玉が話しかける。

「——もっとも、伴内の前に……最後に人間が猫神招きされたのは、十三年前だったくらいに、猫神招きされて来る人間は、少ないのだがね。人間が送られて来る程の大規模な猫神招きは、十数年に一

度しか無いのさ」

「それで、俺の前に猫神招きされた人は？」

期待と不安を抱きながら、伴内は白玉に問いかける。十三年前に送られて来た人間の現状こそが、自分のこれからの運命と重なるだろう事に、伴内は気付いたからだ。

その人間が元の時空に戻っていれば、伴内も戻れる可能性があるのだろうし、その人間が、こちらの時空で現在も暮らしているなら、伴内もそうなる可能性が高いのである。

「今も、こちらの時空で暮らしているよ」

言い難そうな口調で、白玉は続ける。

「猫神の森で、人間が通れる程の大規模な時空の通路が開く事は、滅多に無い上に、何時発生するかは誰にも予測出来ないんだ。だから、こちらの時空に来てしまった人が元の時空に戻るのには、不可能に近い事なんだよ、残念ながら」

「猫神の森以外には、時空の通路は開かないの？」

「——猫神の森以外に、時空の通路が開く場所が、存在しない訳じゃない。時空の通路が開きっ放しの島も存在するくらいだからね」

「だったら、その島から戻ればいいんじゃないか！」

伴内の言葉に、白玉は黙って首を横に振る。

「その時空の通路が開きっ放しの島は、猫神の森に比べて桁違いに時空が不安定でね、島自体が普段は時空の狭間を漂流していて、こちらの時空には滅多に姿を現さないんだ」

「滅多にとって……どれ位の頻度で？」

「二十年に一度、姿を現す場合もあれば、百年間姿を現さない場合もある。平均すれば、三十年に一度くらいかねえ。最後に姿を現したのは十年前だから、当分は姿を現す事は無いだろうさ」

(俺、下手すりゃ元の時空に戻れないのか。家族や友達がいる、磯街市に……。運良く戻れるのだとしても、早くて数年後……)

白玉の答えを聞いた伴内は、肩を落す。元の時空に戻る事が、不可能に近い事を知ってしまったのだから、伴内が落胆するのも当然だろう。

「気を落すなど言っても、無理だろうね」

伴内が落胆している事を察した白玉は、優しげな口調で伴内に話しかける。

「あ……でも、この街の暮らしは、悪く無いと思うよ。こっちの時空に送られて来た連中って、結構幸せに暮らしてたりするから」

千風も伴内に、励ましの言葉をかける。

(あ、俺……気を使わせちゃってるな)

千風と白玉が同情して気を使っている事を、伴内は察する。時空の漂流者となってしまった伴内の現状は、確かに同情されるのが当たり前前の悲惨な状況ではあるのだが、オールドスタイルな男の子である伴内は、女性に同情されてしまう自分自身を、気恥ずかしいと感じてしまうのだ。

それ故、伴内は自分自身で話題を切り替える為に、何か別の話題を振ろうとするが、伴内が口を開く前に、白玉が口を開いた。

「伴内の前に、この世界に来た人間……くわた桑田さんなんかは、可愛い猫人の嫁さん貰って、子供を四人も作って、幸せに暮らしているからねえ」

白玉の話聞いて、伴内は驚きの表情を浮かべ、白玉に尋ねる。

「人間が猫人の嫁さんを貰って、子供まで作ってるって……。人間と猫人って、結婚したり子供作ったり出来るの？」

「出来るとも。自分達の失策により時空が不安定化したせいで、過去から人間が流されて来る事故が発生する事を、神々は予測していたらしいんだ」

伴内の問いに、白玉は答え続ける。伴内にとって、驚くべき答えを。

「自分達の失策のせいで、こちらの時空に送られて来た少数の人間達が、孤独に陥らず、猫人達と共

に幸せに暮らせる様に、神々は猫人を、人間と交配して子孫が残せるようにしたのさ」

「人間と猫が、結婚したり子供作ったり出来るのか」

驚きを隠せないといった風な口調で、伴内は呟く。その呟きに応えるように、千風が頷いたのを見て、伴内は少し、どきりとする。

（千風くらいに綺麗な人なら、猫でも構わないかもな……って、こんな時に何考えてるんだよ、俺って奴は！）

不埒な想像をしてしまった自分を、伴内は心の中で叱責する。

「あたし達に猫耳と尻尾が付いている理由については、理解出来たかい？」

白玉の問いに、伴内は頷く。

「——じゃあ、次は伴内が連れてきた猫が受けている、洗礼について説明しようか」

ソファから立ち上がりながら、白玉は再生の書を本棚に仕舞う。

「洗礼について説明するなら、洗礼室の方がいいだろうね。ついて来なさい」

白玉は事務室の奥に向かって、歩き始める。伴内と千風は、後に続く。

事務室の奥にあるドアを通り抜けた先には、広くて長い廊下がある。廊下には研究室に通じるドアと、二階に上がる為の階段、そして地下に下りる為の階段があった。

伴内と千風を引き連れた白玉は、階段を下りて地下に向かう。一階よりも冷たい空気に満たされた、地下一階の通路には、幾つかのドアがあり、ドアの一つには「洗礼室」と書かれたプレートが掲げられていた。

白玉は洗礼室のドアを開け、中に入る。伴内と千風も後に続く。洗礼室の中は、様々な機械が至る所に設置されていて、床では様々な太さのケーブルやチューブがうねっている。

そして、洗礼室の中央には、直径三メートル程の大きさがある、硝子のような透明な物質で作られた、球形の容器があった。多数のケーブルやチューブにより、様々な機械に接続されている球形の容

器は、仄かに青白く光る液体で満たされている。

白玉は、その球形の容器の前で立ち止まる。伴内と千風も、白玉に倣う。

(——何だ？ 猫人の女の子みたいなのが、入ってるけど……)

球形の容器を目にした伴内は、容器の中に子供のような人影が見える事に気付く。子供には、猫耳と尻尾のようなものが見えるし、裸の胸の辺りは少しだけ膨らんでいるので、伴内は猫人の女の子だろうと思ったのだ。

「これが洗礼槽……同じ物が街には五つ存在する。伴内と一緒に猫神招きされて来た仔猫は、この洗礼槽の中で洗礼を受けている真っ最中だ」

白玉の話聞いた伴内は、訝しげな顔で、問いかける。

「中にいるの……三毛の仔猫じゃなくて、猫人の女の子みたいだけど？」

「その通り、猫人の女の子さ。正確には、まだ猫人に変化している途中の段階というべきだけどね。良く見て御覧、まだ頬とかはヒゲが生えたままだろう？」

(あれ？ 洗礼槽の中にいるのがミケで、あの猫人の女の子は、猫人に変化している途中の段階だって事は……)

洗礼槽の中にいる女の子の頬に、猫ヒゲが生えている事を視認しつつ、伴内は白玉の話を頭の中でまとめ、一つの答えを導き出す。

「——あれは、猫人の女の子に変化している途中の、ミケって事？」

驚きを隠せないといった風に、声を上ずらせながら問いかける伴内に、白玉は頷く。

「それじゃあ、洗礼っていうのは……猫を猫人に変える事で、洗礼槽っていうのは、猫を猫人に変える機械……神々が地球再生計画の為に、作り出した機械の事なのか？」

「その通り、伴内は察しがいいね」

白玉は感心したように頷きながら、呟く。

「ちょっ……何で俺に何の断りも無く、ミケを猫人にしてんの？ ミケはウチの飼い猫なんだぜ？」

勝手な真似をしないでくれよ！」

かってクロキチが伴内を中心にした飼い猫だったように、ミケは幸を中心にした飼い猫なのだが、大瀧家の飼い猫である事には変わり無い。飼い主の一人である自分に何の断りも無く、飼い猫を猫人に変えようとしている白玉に対し、伴内は語気を荒げて抗議する。

「落ち着いてくれ、これは街の掟……いや、この世界の掟だから、仕方が無いんだ。しかも只の掟では無い。神々が定めた掟なのだから」

伴内の反応を予想していたのだろう。白玉は冷静な態度で、伴内をなだめる。

「神々の定めた、世界の掟？」

「——この世界では、普通の猫は生きて行く事が出来ないんだよ。猫を新たなる世界の主とする事を決めた神々は、この世界に生きる全ての猫は、猫人となって世界の主としての役目を果たさなければならぬという、絶対の掟を定めたんだ」

白玉の説明を補足すべく、千風が口を開く。

「だから、猫神招きで送られて来た猫には、神々が遺した、猫を猫人に変える為の神秘の機械……洗礼槽を使って、すぐに洗礼を施さなければならぬと、掟で決まっているの。あの仔猫がこの世界で生きて行く為には、絶対に避けては通れない事だと、理解してくれないかな？」

「でも、猫人の姿になったら、元の世界に戻る時に大変……」

そこまで言いかけて、伴内は口ごもる。元の世界に戻る事自体が不可能に近いという現実を、思い出したのだ。

「——元の世界に戻る時の心配は、する必要無い訳か。戻れない覚悟で、これから生きていかなきゃならない訳だからな」

自分に言い聞かせるかの様な伴内の呟きに、千風と白玉は頷く。

「この世界で生きて行く事を前提に考えるなら、ミケも洗礼を受けて猫人になるしか無いって、考えておいた方が良くないね」

「そう考えて貰えると、有り難い」

伴内が渋々ではあるが、納得する様子を見せた事に、白玉は安堵する。

「——洗礼が終わるまで、一週間以上かかるとか言ってたよな。ミケは、どんな猫人になるんだ？」

「おそらく、十二歳程度の猫人の少女になるだろうね。まだ発情期を迎える前段階の肉体成熟度だと思われる、仔猫だった様だから」

「十二歳か……俺の事とか、猫人になっても覚えてるのかな？」

「覚えているさ。洗礼を受ける者は洗礼の終わり頃に、人間と同等の猫人としての知能と知恵を持った状態で、猫として生きた時の記憶を再体験するからねえ」

「——それって、どういう事？」

「猫として生きていた時の記憶を、猫人として理解し直すというべきかな」

伴内は白玉の話の意味が分らず、首を傾げる。

「猫は人間の言葉の殆どを理解出来ないが、人間社会で生きた多くの情報を記憶として保持している。その猫の時代には理解出来ずに記憶していただだけの情報を、記憶の中から引き出して理解しながら、猫として生きてきた自分の記憶を、もう一度仮想的に体験し直すんだよ」

白玉は洗礼槽を見上げながら、話を続ける。

「だから、猫であった時には知らなかった、自分が暮らしている街の名前なんかも、記憶を再体験している間に知ってしまうんだ。猫だった頃、街の名前を耳にしたり目にしたりして、それが何だか分らぬままに記憶していたのを、洗礼時の再体験によって、自分が住んでいた街の名だと理解する……といった風にね」

千風が白玉の話の補足する為に、口を挟む。

「例えば、この時空と時々繋がってしまう時空にある、伴内が住んでいた街からは、過去にも沢山の猫達が猫神招きされて来たんだけど、そういった猫達は洗礼を受けて記憶の再体験をする際、自分が暮らしていた街の名前が、磯街だったって事を知る……って事なんだけど。分らないかな？」

「——悪いけど、もう少し単純に例え話とかにしてくれないと、俺には理解出来ないっぽいですが、その話」

「例え話か……そうだねえ」

暫しの間考え込んでから、白玉は口を開く。

「伴内が幼児の頃の自分に憑依して、今の知識や知恵……そして意識を持ったまま、幼児の頃の経験を、再体験する様なものかな」

自分に例えた話を聞いて、伴内はようやく、猫として生きた記憶を、猫人として理解し直す事の意味を理解する。

「つまり、ミケは俺や家族のみんなと暮らした時の事を、人間同等の知識と知恵を持った上で、経験し直すのか……」

洗礼槽の中で、猫人と化しつつあるミケを見上げながら、伴内は感慨深げに呟く。

「そういう事さ。だからミケは伴内の事を覚えている。伴内はミケに、どんな感じで接していたんだい？」

「妹みたいな感じに扱ってたというか、接してた……と思う」

「だったら、おそらくはミケも伴内の事を、お兄さんだと認識している可能性が高いね」

伴内はミケを眺める。既に人間同様の状態と化しつつある、裸の身体の部分を見るのは恥ずかしかったので、肩から上の部分を。

「俺に茶髪の妹が出来るとはな……」

真っ黒な髪を持ち主だった、本物の妹である幸を思い出しながら、伴内は呟く。洗礼槽の中で揺らめくミケの髪の色が、伴内には茶色に見えたのだ。

「洗礼を受けて猫人になった者の外見は、猫だった時の色が反映される事が多いんだ。三毛猫だったミケの場合も、三毛猫の色……茶色と黒と白の三色が、身体の何処かに反映される可能性が高いのさ」

「だから、ミケの髪の色は茶色になる訳か」

「そういう事だよ。まだ洗礼の途中だから、変わる可能性もあるんだが……」

白玉の言葉を聞きつつ、ふと千風に目をやった伴内は、思い付いた考えを、何となく口にしてみる。「猫だった時の毛の色が、猫人になった時の髪の色や尻尾の色に反映されるなら、千風が猫だったとしたら、きっと真っ黒な黒猫だったんだらうね」

何気ない、伴内の思い付きの言葉を聞いて、どきっとした様に、千風は身を震わせる。

「黒猫って言えば……俺、小学校の頃までクロキチって黒猫を飼ってたんだ。八年前に、行方知れずになっちゃったんだけどね」

クロキチの事を思い出しながら、懐かしげに感慨に浸る伴内の頭の中に、例の手紙の事が浮かんで来る。

「——そういえば、クロキチが行方知れずになった後、変な手紙が来たんだよな。猫神隠しにあって、猫街っていう変わった街に行って、帰れなくなったとかいう手紙が」

そこまで呟いて、伴内は例の手紙に書かれていた、猫神の森で猫神隠しに遭い、帰れなくなったという部分が、現在の自分の状況と同じである事に気付く。

(あの手紙……誰かの悪戯だとばかり思ってたけど、仮にあの手紙が本物だとすれば、辻褄が合うんじゃないか?)

伴内は、手紙が本物であると仮定して、考えをまとめてみる事にする。

(クロキチが猫神の森に遊びに行って、猫神隠しに遭ったのなら、この時空……この街に来た事になる。この街に来た猫は洗礼を受け、猫人になる。猫人になれば、手紙を書く事も可能だろうから、クロキチが手紙を書いたとしても、おかしくは無い)

しかし、あの手紙を本物だと判断するには、まだ情報が二つ程足りなかった。その一つを、伴内は白玉と千風に尋ねてみる。

「こっちの時空から俺が来た時空に、手紙を送る方法ってある？」

伴内の問いに、白玉が答える。

「——一応、ある事はある。人間が通れる程の大きさの通路が開くのは珍しいが、手紙が通りぬける程度の通路なら、年に数回といった頻度で開くんだ。そのタイミングに出くわした際、自動封筒じどうふうとうを使えばいい」

「自動封筒って？」

「送り先の住所を書けば、勝手に飛んで行って宛先に届くという、人類が残した遺産の一つだよ。滅多に手に入らない貴重品なんだが、通路が開いている時に使えば、過去の時空でさえ、ちゃんと届く優れものさ」

白玉の答えにより、例の手紙が本物だと判断する為に必要な情報は、一つとなった。その一つとは、千風や白玉が暮らしている……これから伴内自身が暮らす街の名である。

街の名が、例の手紙に記されてた、クロキチが行ったまま帰れなくなった街の名と同じ、猫街という名であるのなら、例の手紙は本物だと判断してもいいだろうと、伴内は思う。猫神隠しに遭った者にしか、猫神隠しで送られた先にある街の名前は、知る筈が無いのだから、伴内の考えは理に適っているとと言える。

「ひょっとしたら、この街……千風や白玉さんが暮らしてる街って、猫街っていう名前だったりしない？」

伴内の問いに、白玉が答える。

「そうだよ、ここは猫街……猫街の東外れさ。街の名前、千風に聞いたのかい？」

「いや、昔……行方不明になったクロキチから、手紙が来た事があるんですよ。猫神隠しに遭って、猫街って街に行ったまま帰れなくなったっていう、不思議な手紙が……」

少し興奮気味の口調で、伴内は続ける。

「あの手紙、ずっと誰かの悪戯だとばかり思ってたんだけど、あれは本当に猫神隠しにあって、猫街に行ったまま帰れなくなったクロキチが、自動封筒で送って来た手紙だったのかも！ そうじゃなけ

れば、猫街っていう、猫神隠しで送られた先にある街の名前なんて、知ってる筈が無いし」

「成る程……そのクロキチっていう黒猫は、洗礼を受けて猫街で暮らしている可能性が高そうだね」

「白玉さん、八年くらい前に、黒猫を洗礼した事ない？」

「サイズが小さい分、猫神送りで送られて来る数は、人間より猫が多いもんだからね、八年前となると、どんな猫を洗礼したか覚えて無いんだよ……悪いけど」

白玉は恍けて、伴内の問いをはぐらかす。

「洗礼槽は街に五つあるから、ウチ以外が洗礼した可能性もあるし、何時……何処の洗礼槽で、どんな猫を洗礼して猫人に変えたかなんて記録、何処にも残っていないと思うよ。猫街は大雑把な奴が多いからね、あたしも人の事は言えないが」

「——そうですか」

伴内は気落ちしたように、肩を落す。

「同じ猫街に住んでいるなら、その内出会えるに決まっているさ。気を落さずに、再会出来る時を楽しみにしておきなさい」

白玉の言葉に頷き、伴内はそう考える事にする。伴内は基本的に、前向きな性格なのだ。

「意外と近くにいて……すぐに出会えたりするのもかも知れないよ。そのクロキチって猫、黒猫だったなら、髪や尻尾の色は黒である可能性が高いね」

近くにいる千風に目をやりながら、冗談染みた気楽な口調で、白玉は続ける。

「千風も、髪や尻尾が黒だから……案外、千風が伴内が飼ってた、クロキチだったりしてねえ」

「ちょっと、白玉さんっ！」

戸惑いと焦りの入り混じった様な表情で、千風は白玉に抗議する。

「まさか、そんな訳無いですよ！」

伴内は、白玉の話を中心に冗談として受け取り、一笑に伏す。

「言って無かったけど、クロキチは俺が弟扱いしてた、雄猫なんです。竹輪が大好きで、凄く甘えん

坊だった……」

懐かしげな口調で、伴内は続ける。

「猫人になってたとしても、千風みたいな綺麗な女の猫人じゃなくて、生意気な男の子って感じの猫人になってるんじゃないかな」

伴内の話を聞いて、安堵した様な……それでいて、何処か残念そうな複雑な表情を、千風は浮かべる。そんな千風を見て、白玉は楽しげに、声を出さずに笑う。

太陽が空の頂点に近付き、気だるい空気に満たされつつあった猫街を、穏やかな春風が吹きぬける。猫街の空気を曖昧に混ぜる風には、仄かに潮の匂いが混ざっている。

「風……潮の匂いがするね」

伴内は、傍らを歩く千風に話しかける。

「猫街の南側には、はいから湾っていう海があるから。南風は潮の匂いがするんだよ」

「はいから湾……変わった名前だね。西洋風なのかな？」

千風は、首を横に振る。

「——伴内がいた時空と、こっこの時空では、『はいから』って言葉の意味が違うんだ」

言葉の意味の違いについて、千風は伴内に説明する。

「猫街での『はいから』は、人類が残した遺産って意味なんだよ。伴内がいた時空での、西洋風って意味の古い言葉とは違ってね。だから、猫神招きされて来た人間の事を、はいからさんって呼ぶんだよ……猫街では」

(だから、白玉さんは俺の事、はいからさんって呼んだんだ)

白玉研究所を訪れた際、はいからさんと白玉に呼ばれた時に感じた疑問が、千風の話により、ようやく伴内の中で解決した。

「人類が滅亡する前に残した、様々な遺産が見付かる事から、はいから湾って呼ばれるようになった

んだとき」

（そっか……人類は滅んだんだ。俺の家族も友達も、何時だか分らないくらい遠い昔に、死んでるんだよな……この時空では。何処かに記録とか、残って無いのかな）

猫街の街並を眺めながら、伴内は遠い過去に思いを馳せる。

「——ここは俺が暮らしていた時空の、遠い未来なんだよね。街並とか見ていると、未来っていうよりは、何十年か前の日本っぽいなんだけど。古い映画やドラマとかで、見た事がある感じの……」

猫街には木造建築が多く、高い建築物も多くは無い。そんな暖かみのある落ち着いた色合いの猫街の景色が、猫街に来たばかりの伴内には、古い映画などに出て来る、古き良き日本といった感じに見えた。伴内自身は、そんな街並を現実の光景として、元の時空では見た事が無かったのだが。

「猫街は、人間達の暦でいえば、西暦千九百七十年頃の日本をモデルに、神々が設計して作り上げたんだって。街づくりや生活のレベルから、科学技術水準まで」

「日本の、千九百七十年頃？」

「そう。かつての日本と同じ所にあり、日本に住んでいた猫達が猫人となって、継続して住み続けている事から、猫街は言語なんかの文化的な面に関しては、日本をベースに設計されたらしいんだ。だから……」

「日本をベースにしてるから、日本語が使われていて、日本語が通じるんだ」

「そういう事。それで……その日本が歴史上、一番安定していて輝いていた時代が、その千九百七十年頃だったらしくて……」

「だから神々は、その頃の日本をモデルにしたって訳？」

伴内の言葉に、千風は頷く。

「千風は色々詳しいね、俺が暮らしてた時空での、はいからなんて言葉の意味まで知ってるし」

「——白玉さんに、色々教わってるから」

雑談を交しながら歩き続ける二人の視界に、猫街では珍しい、コンクリート製の大きな建物が姿を

現す。現れた建物は、猫街の行政機関の中心的な存在……猫街役場。

この猫街役場が、白玉研究所を後にした伴内と千風の、目的地だ。猫街の住人として生きる為に必要な、住民登録をする事が、二人の目的である。

「珍しいわね、千風が男連れだなんて」

伴内と千風が役場のロビーに入った直後、役場の職員らしき事務服を着た、千風と似たような年頃に見える女性の猫人が、千風に声をかける。灰色のロングヘアーで目が細く、身体がラムネの壘のような曲線を描いている、色気のある女性である。

「それで、今日は何の用？」

カウンターの中の席に座っている事務員は、千風に尋ねる。

「昨夜、大規模な猫神招きが発生してね、はいからさんと猫を保護したんだ。猫の方は洗礼の最中で、まだ連れて来れないから、はいからさんの方の住民登録だけ、済ませに来たって訳」

「——ホントだ、はいからさんじゃない！」

女性事務員は、灰色の尻尾を揺らしながら、興味深げな顔で伴内の顔を覗き込む。柑橘系の香水の匂いをまとう、色っぽい猫人の顔が近付いて来た事に、伴内は少し照れる。

「ジロジロ見ないでよ、支那紋。見世物じゃないんだから。さっさと書類用意して」

千風は事務員……佐渡支那紋を窘める。

「はいはい、すぐに用意するから、急かさないでよ」

支那紋は立ち上がり、部屋の奥にある書類棚の前に行き、引き出しを開けて、中を引っ掻き回し始める。

「知り合いなの？」

小声で伴内に尋ねられ、千風は頷く。

「仕事柄、役場で調べ物をする事が多いんで、何時の間にか友達になった、佐渡支那紋っていう子。噂好きで、街の情報通でもあるんだよ。デマも多いから、情報の精度という意味じゃ低いんだけど」

千風の返答を聞いて、伴内は千風が探偵だと名乗っていた事を思い出す。

「必要事項を、ここに記入して」

カウンターに戻ってきた支那紋は、書類と筆記用具を伴内に手渡す。

「——住所、どうしよう？」

名前や猫街に来た経緯など、伴内は記入できる欄は全て記入した。しかし、猫街における住所は、現在の伴内には存在しないので、記入出来ないのだ。

住所が記入出来ず困っている伴内の手から、筆記用具と書類を取り上げると、千風はサラサラと、住所や後見人などの欄に書き込んでしまう。

「えーっと、東猫街躊躇い境一丁目二番地猫神荘一号室……これって千風、あんたの家の住所じゃない？」

書類に書き込まれた住所を見て、支那紋は驚きの声をあげる。ちなみに猫神荘の一号室は、黒貴探偵事務所の事務所であり、二号室を千風は住居として利用している。一人で一号室と二号室を、千風は借りているのだ。

「珍しく男連れかと思ってたら、いきなり同棲？」

支那紋は、まくし立てる様な口調で、話し続ける。

「男に免疫が無い女って、男が出来ると、いきなり深みにはまるものだって言うけど……まさか、こんな近くに実例が出て来るとは！ 世の中、広いようで意外と狭いっ！」

「——勘違いするな、バカ！ しばらくうちに、居候させてあげるだけだよ！」

千風は焦った様な表情を浮かべ、少し頬を染めながら、支那紋の勘違いを正す。

「第一、俺が住んでるのは二号室だ！ 一号室は、探偵事務所の住所じゃないか！」

「あ、そういえばそうだったわね」

支那紋は、自分の勘違いに気付く。

「でも、事務所とはいえ、あんたが自分の縄張りに男を泊めるなんて、今まで無かったからねー、やっぱり驚くわよ」

「仕方が無いじゃない、猫街に身寄りが無いんだから、自立出来るようになるまでは、誰かが助けてあげないと」

「——悪いね、世話になっちゃって。なるべく早く仕事とか探して、自立するから」

そう言いながら、伴内は申し訳無さそうに頭を搔く。

「あ、いや……気にするなって！ 伴内は焦らないで、猫街に慣れればいいんだから！」

自分の言葉が、伴内の機嫌を損ねたと思ったのだろう、千風は慌てて言い繕う。

「ふーん」

千風の様子を見て、何かを察した支那紋は、意味有り気な笑みを浮かべるが、特に言葉には出さず、書類に目線に移す。書類の後見人の欄には、千風と白玉の名が記されている。

「それにしても、贅沢な後見人だねえ。猫街四天王の一人……白玉さんに、猫街王子の千風だもんな。君は恵まれてるよ」

「バカ！ 猫街王子とか言うなってば！」

目尻を吊り上げ、千風は支那紋に抗議する。

「猫街四天王に猫街王子？ それって、何の事？」

「猫街四天王は、猫街の顔役というか何というか……この街で色々と影響力が大きい、四人の長老格の住人の事だよ。猫街一の頭脳派である白玉さんは、その一人なんだ」

「——意外だな、偉い人なんだ、白玉さんって。それで、猫街王子って？」

「あー、それはねえ……」

「説明しなくていいから、それ！」

「ここで聞かなくても、この街に住んでいれば、どうせ何時かは耳に入る事なんだから、隠すだけ無駄よお」

支那紋は千風の抗議を、涼しい顔で受け流してしまう。

「千風って、自分の事を俺って言うし、見た目もボーイッシュというかマニッシュというか、男っぽい感じでしょ？」

「あー、それは確かに」

伴内は相槌を打った後、千風の方を見る。千風が少しショックを受けた様な顔をしていたので、伴内は不味かったかなと思う。

「それで、二年前までは猫街ねこまちの女子学園……猫街女子学園じょし がくえんに通ってたんだけど、そこの生徒達に凄い人気があってね、女の子なのに学園の王子様扱いされて、猫街王子って徒名が付いちゃったのよ、千風ってば」

楽しそうに笑いながら、支那紋は話を続ける。

「あたしは千風とは別の、猫又学園ねこまた がくえんに通ってたけど、猫街王子こと黒貴千風が、女の子にモテまくっている的な噂は、聞いた事あったからねえ」

ちなみに、猫街女子学園も猫又学園も中高一貫校であり、猫又学園の方は共学である。一応、どちらの学園にも大学が存在するのだが、猫街の場合、大学は余程の金持ちの子供でも無い限り、一度社会人を経験して、自分で学費を稼いでから通うのが常識である為、学園の高等部を卒業した生徒達は、そのまま就職するのが普通なのだ。

「千風は在学中から私立探偵事務所を開いて、色々と活躍してる、猫街の有名人なんだけど、新聞とかに名前が出る度に、『猫街王子、宝石強盗事件を解決！』みたいな見出しが出たりするのよ、これが！」

「——猫街新聞に学園の先輩がいてね、その人が面白がって、そういう見出し付けるのよ。止めてく

れって頼んでるんだけど……」

千風は、困ったもんだという態度を露わにしながら、嘆息する。

「探偵って仕事柄、顔や名前が知られるのは、余り良い事じゃないんだよ……」

「有名人なんだ、千風って」

「そーなの、この子ってば猫街じゃ有名なのよ！ 顔を知らない人がいない位に！」

「それに、女の子にモテるのか。羨ましいな、それは」

「からかうなよ、伴内まで！ 俺は女なんだから、女の子にモテても、意味は無いんだって！」

「あ、でも……千風は女の子だけじゃなくて、ちゃんと男にもモテてるんだよね」

書類に目を通しながら、支那紋は続ける。

「ただ、昔大好きだったけど、離れ離れになっちゃった人の事が忘れられないからって、男を一切寄せ付けないだけとか、恋愛自体から、自分で退いちゃってるだけの話で」

「——支那紋、それ以上の無駄話は禁止！ あと……これ、白玉さんからの委任状だから、ちゃんと確認して！」

強い口調で支那紋を制止しながら、千風はデニムのジャケットのポケットから、白玉から受け取った委任状を取り出し、支那紋に手渡す。

「はいはい、分りましたよ猫街王子……と」

「猫街王子と呼ぶのも禁止！」

「それは却下です、猫街王子」

軽口で千風の抗議を受け流しつつ、支那紋は白玉からの、伴内の猫街住人登録に関し、後見人となる事と、書類への名前の記入を千風に委任する旨の、委任状の内容を確認する。

「確かに、委任状も住人登録の申請も受領しました。白玉さんと千風が後見人なら、まず問題無く登録は通ると思うけど……」

支那紋は真剣な口調で、伴内に話し続ける。

「君が犯罪とか、何か猫街で問題になる真似をしたら、後見人の二人に迷惑がかかるんだから、犯罪とか起こさないように、肝に銘じておいてね。恩を仇で返しちゃ駄目だよ」

伴内は、こくりと頷いた。

夕陽にオレンジ色に染められつつある、レトロな風合いの街並を、伴内と千風は猫神の森がある方角に向かい、歩いている。陽が傾いているので、昼間に歩いていた時より、二人の影は長い。

「すっかり夕方になっちゃったね。ちょっと色んな店、回りすぎたかな」

千風の言葉に、伴内は頷く。住民登録を終えた後、伴内は千風に連れられて、様々な店が並ぶ猫街市場に行き、衣服などの生活必需品を買い出して来たのだ。

二人は両手に、買出しして来た様々な物が詰まった紙袋を抱えて、歩いている。

「——悪いな、買出しに付き合わせた上に、金まで出してもらっちゃって。これから働いて、絶対に返すから」

申し訳無さそうに、伴内は呟く。買い物が長引いてしまったのは、千風が猫街市場だけでなく、猫街の様々な場所を、伴内に案内して回ったからだった。

これから、見知らぬ猫街で暮らす伴内が、少しでも楽になる様にと配慮した上で、千風がそうした事を、伴内は察していた。

「そんなに遠慮する事無いって。俺も猫街に来たばかりの頃、白玉さんとかに色々世話になったんだ。だから、今度は俺が伴内に、同じ事をしてるだけさ」

「猫街に来たばかりの頃って……千風は元々、猫街の住人だった訳じゃないの？」

伴内に問われ、千風は少し狼狽する。

「いや、その……伴内と違って、猫神招きで来た訳じゃなくて、他所の街から流れ着いたんだ、俺の場合」

「そうなんだ。さっき支那紋が言ってた、千風が昔大好きだったけど、離れ離れになっちゃった人っ

て、その他所の街にいた人……猫人なの？」

「——さあ、どうだろうね」

返事を濁しつつ、大きめの目を伏せて、それ以上は喋らないという意思を、千風は伴内に伝える。
(安易に触っちゃいけない話題なんだろうな、千風にとって)

千風が昔、好きだった相手に、伴内は興味があったのだが、千風の意味を察した伴内は、詮索するのを止め、話題を変える事にする。すると丁度、車道の向こう側を、春休みの部活動帰りらしきセーラー服姿の少女達の一団が、賑やかに喋りながら歩いている姿が、伴内の目に映る。

制服のデザインは似ているが、スカートの丈が、伴内がいた時空の物より長い。

「あれ、猫街女子学園の生徒かな？」

「あれは、近くにある猫又学園の制服。猫街女子学園の制服は、ブレザーなんだ」

「この辺り、もう東猫街だよな？ 猫又学園って、東猫街にあるの？」

「そうだけど……通いたいの？」

「え、いや……その……」

(単に話題を切り替えたかっただけなんだけど、学校に通えるなら、通ってみたい気もするな)

伴内は少し狼狽しながらも、心の中で呟く。

「通いたいのなら、通った方がいいよ。猫街で生きて行く為の知識を、はいからさんである伴内が得るには、うってつけの所だと思うし、友達作りにもいいだろうから」

「でも、俺は働かないと駄目だし、学費とか払う余裕無いし……」

「猫街の場合、学費は高校までは無料だから、学費の心配はしなくていい」

「そうなんだ……。だったら、学校に通いながら働ける仕事とか探せば、何とか通えるかもしれないな」

「ウチの事務所なら、働ける時だけ助手やってくれればいいんだから、別に猫街に慣れるまでなんて言わないで、ずっとウチで働けばいいのに」

今朝、千風や白玉と今後の事を話し合った伴内は、猫街に慣れるまで、千風の探偵事務所や白玉の研究所で、助手として働いて生活費を稼ぐ事を決めたのだ。

「そんなに千風や白玉さんに、面倒かける訳にはいかないって。自分の事は可能な限り、自分でちゃんとしないと。それに……ミケも食わせていかないと駄目なんだし」

ミケは伴内が猫街に慣れ、生活が落ち着くまで、白玉が預かる事になっている。白玉はミケを養女にしてもいいと言ったのだが、飼い主としての責任は果たすべきだと考える伴内は、ミケが大人になるまで面倒を見る事にしたのである。

「——落ち着いたら、学校通ってみるかな」

夕暮れの空を見上げながら、伴内は呟く。空を舞う、やや赤みがかった桃色の花びらが、空を見上げる伴内の目に映る。

「桜の花びら……」

猫街に吹き寄せる風に乗れ、桜の花びらが、雪のように飛来して来ているのだ。

「猫神の森が近いから、風に飛ばされて来てるんだね」

桜の花びらを見上げて目を細め、千風は続ける。

「猫街には風が集まるんだ。森や海……山から、色んな風が吹いてくるんだけど、今は猫神の森の奥にある桜の花びらを、風が運んで来ているみたいだな」

「桜……好きなの？」

嬉しそうに目を細めている千風に、伴内は問いかける。

「好き！ 今……猫神の森の桜が、満開なんだ。良かったら、後で見に行かないか？」

千風の誘いに、伴内は快く応じる。

猫神荘の二号室に戻り、荷物を置いてから、伴内は千風に誘われ、猫神の森の奥に入った。夕陽に照らされた森の中を、風に流されて来る花びらの川を遡るように、二人は進んで行く。

進むにつれて花びらの密度は高まり続け、程無く、二人の目の前が赤みを帯びた桃色に染まる。二人は、桜の元に辿り着いたのだ。

無数の桜の樹が、伴内と千風の前に広がる。ぼたん雪のように風に舞う花びらの中を、二人は歩き続ける。

桜の園に立ち並ぶ一本の樹の前で、千風は立ち止まると、片手に紙袋を持ったまま、猫のような身軽さで桜の樹に上り始め、五メートル程の高さの辺りで幹から別れている太い枝の上に腰掛け、おいでとばかりに伴内を手招きする。

伴内も、千風に負けぬ身軽さで、するすると桜の樹を上り、千風の隣りに腰掛ける。伴内と千風は枝の上で、桜の森を眺める。

夕陽により、本来よりは赤みを増した色合いの桜の木々は、風に煽られて無数の花びらを宙に舞わせている。その幻想的な光景に、樹上の二人は目を奪われる。

暫くの間、桜を眺めていた千風が、手にしていた紙袋を開き、中から竹輪を取り出すと、伴内に差し出す。買出しの途中に千風が購入した、飛ビ吉の竹輪である。

「——腹減ったろ、食べる？」

少し小腹が空いていた伴内は、有り難く竹輪を頂く事にする。

「食べるけど……でも、何で花見で竹輪？」

花見と竹輪に、繋がりを見出せなかった伴内は、竹輪を受け取りつつ、千風に尋ねる。

「竹輪、好きなんだ。特に飛ビ吉の竹輪は。トビウオの魚肉をたっぷり使っていてね、他の店の竹輪とは、旨みが違うんだよ」

舌なめずりすると、千風は竹輪に齧り付く。幸せそうに目を細めながら、もぐもぐと竹輪を咀嚼する。

(意外だな、竹輪をこんなに嬉しそうに食べるなんて。まるで、クロキチみたい)

竹輪を幸せそうに食べる千風を見た伴内は、千風が今だけは、竹輪が好物だったクロキチに似てい

るなと思う。思いながら、竹輪に齧り付き、食べ始める。

咲き乱れる桜の花を眺めながら、伴内は、これから自分の人生がどうなるかという事について、思いを馳せる。思いを馳せていたら、不安感ばかりを感じてしまうので、伴内は思いを馳せるのを止め、ただ美しく咲き乱れる桜を、眺め続ける事にする。

不安を感じていた伴内とは対照的に、隣りで同じ景色を眺めている千風が、ただ喜びと期待感だけに満たされている事を、伴内は知る由も無い。無論、その喜びと期待感の原因となっているのが、伴内自身である事も。

桜が咲き乱れる、春らんまんの四月一日、大瀧伴内の猫街での日々は、こうして始まったのだ。

第三章 空いろのくれよん

それは、四月二日の午前十時ジャスト、伴内が白玉研究所の事務室で、書類の整理をしていた時の事だった。突如、研究所の外にあるガレージの方で、鉄板をハンマーで叩くかのような物音がし始めたのだ。

（白玉さんは研究室の中にいる筈だし、千風は仕事に出掛ける筈……って事は、まさか泥棒か？）

緊張に身を震わせつつ、ジーンズの後ろポケットから愛用のパチンコを取り出して、伴内は左手に握る。更に伴内は右前のポケットから、パチンコの弾用の小石を幾つか取り出して右手で握ると、何時でも小石を撃ち出せる様に、ゴムの中央に小石の一つを装填する。

物音を立てているのが泥棒であった場合、伴内はパチンコで撃退するつもりなのである。伴内のパチンコの腕は、百発百中とあっていい程の精度を誇るので、泥棒を撃退する程度の役目は、パチンコを手にした伴内には、容易に果たせる筈なのだ。

伴内は窓から、外の様子を窺う。背の高さは千風と同等だが、丸々と太った感じの、かなり大柄な猫人が、ガレージのシャッターを、ハンマー……というよりは巨大な木槌のような物で、叩き壊そうとしている光景が、伴内の目に映る。

（こりゃ、どう見ても泥棒だな）

熟したバナナのような色のアロハシャツを着た、灰色の髪のカネヲを、泥棒だと判断した伴内は、物音を立てないようにドアを開けて、研究所の家屋から出る。植木に身を隠しながら、伴内は忍び足でアロハシャツのカネヲに近づいて行く……背後から。

気配を完全に消しながら、背後から近づく伴内に、アロハシャツのカネヲは気付かない。木槌による攻撃が間違っても届かないだろう、十メートル程の間合いを取った上で、伴内はパチンコを構えて、アロハシャツのカネヲに声をかける。

「動くなっ！ 動くと撃つぞ！」

伴内に鋭い声で威嚇され、アロハシャツのカネヲは、びくりと身体を震わせる。

「——ちょっと待った！ オイラは怪しいもんじゃないって！」

アロハシャツの猫人は、慌てふためいたように後ろを振り返り、細い目を見開いて、伴内を凝視する。

「く、熊？」

伴内はアロハシャツの猫人を見て、驚きの声を上げる。伴内が熊と表現したのは、アロハシャツを着た太った猫人は、全身が熊の様に毛だらけだったからである。

「喋る熊がいる訳ねーだろ！ 良く見ろって、オイラは只の先祖返りだってば！ 先祖返りのドドンパ様だよ！」

「先祖返りのドドンパ？ 知らないな、そんな奴」

「猫街の住人の癖に、先祖返りのドドンパ様を知らないとは、どういう了見だ？」

「悪いけど、俺は一昨日の夜に猫街に来たばっかで、実質的には猫街生活は二日目だからさ。知らない事が多くて……お前の事も知らないんだよ」

そう言いながら、伴内はパチンコの狙いを絞る。

「でも、ハンマーだか木槌だかで、他人の家のガレージを破壊しようとする奴が、泥棒だって事くらいは分るぜ」

「いや、オイラは他人じゃねーんだって！」

アロハシャツの猫人……ドドンパは、伴内が構えているのがパチンコである事に、ようやく気付く。

「それ、オモチャのパチンコじゃねーか！ やいやい、この先祖返りのドドンパ様が、そんなオモチャで脅されたくらいで、ビビるとでも思ってんのか、コラァ！」

槌の部分が、猫人の頭二つ分程の大きさがある大きな木槌を振り上げ、ドドンパは伴内を威嚇すべく、身構える。

「この必殺のドドンパハンマーの威力は、そんなオモチャのパチンコなんかとは……」

ドドンパが言い終わらぬ内に、伴内はゴムから手を放し、パチンコで小石の弾を放つ。ひゅん……

と空気を切り裂く音を立てて、小石の弾は木槌の柄の根元を直撃する。

爆竹が破裂する様な音を立てながら、柄の付け根の部分は砕け散り、木槌の槌の部分は柄と分断される。槌はごすんという鈍い音を立てて、地面に落下する。

「——え？」

武器である木槌を、一撃で破壊されてしまった上、オモチャだと思い込んでいたパチンコの強烈な威力と、伴内の正確な狙撃能力を目にして、ドドンパは少しの間呆然としてから、急に怯え始める。

「ちょ……そんな危ないもん、人に向けるんじゃないっての！ 当たったら凄く痛いじゃないかっ！」

ドドンパは抵抗の意思が無い事を示す為に、両手を頭上に上げる。ちなみに、猫街の住民達は、正式な場面では猫人と人を使い分けるのだが、普段は特に使い分けず、全て「人」で済ましてしまう事が多い。

「そりゃ、普通は人にも猫人にも向けないよ。犯罪者だから、向けてるだけで」

「オイラは犯罪者じゃないんだって！ ただの夢追い人だってばー！」

泣き言を言うドドンパに、突如、何時の間にか伴内の背後に現れていた白玉が、厳しい口調で声をかける。

「誰が夢追い人だよ、この馬鹿者が！」

「伯母ちゃん！」

「伯母ちゃんって……それ、どういう事？」

伴内は驚き、白玉に尋ねる。

「こいつはドドンパとってね、あたしの弟の息子なんだ。弟夫婦が行方不明になってからは、あたしが面倒を見ていたんだが……」

大きく嘆息してから、白玉は話を続ける。

「二十歳過ぎだというのに定職にも就かず、遊び呆けては人様に迷惑をかけてる、無職のバカ甥さ。はいから湾の小島に勝手に住み着いて、好き勝手に暮らしてるよ」

「無職って言うなよお！ 夢追い人……もしくは親父達と同じ冒険者と呼んでくれ！」

「冒険者？ 白玉さんの弟さん……冒険者だったの？」

伴内の問いに、白玉は頷く。

「あたしの弟夫婦は、冒険者というか……凄腕のトレジャーハンターだったんだ。世界中を冒険して回り、神々の遺産や人類の遺産など、様々な珍しいお宝を手に入れて金に換えて、結構な金を稼いでいたもんさ。五年前にドドンパをあたしに預けたまま、行方不明になっちまったがね」

「今ではオイラが親父達の後を継いで、猫街一のトレジャーハンターになった訳よ！」

「お前の両親は金を稼いでいた、本物のトレジャーハンターだったが、まともに金を稼げないお前は、無職の怠け者ででしかない！ お前は只の無職だ、無職！」

実際は、色々アルバイトなどをしているので、ドドンパは完全な無職という訳では無い。気楽に遊び回っている事が多い貧乏人なので、無職にしか見えないのだが。

「確かに、今までの冒険は金を稼げなかったけど、今度の冒険は違うんだってば！ 凄いお宝の情報が……^{そら}空いろのくれよんの在り処に関する情報を、手に入れたんだからさ！」

「空いろのくれよんだって？ あれは確かに、手に入れば高額で売れるお宝だろうが、滅多に見付かる代物じゃないよ！」

ドドンパの言葉を聞いて、白玉は驚きの声を上げる。

「このあたしだって、まだ現物は目にした事が無いんだ。空いろのくれよんの在り処に関しては、色々な噂が流れたが、大抵はガセネタだったしねえ」

「——くれよんって、絵を描く道具が、そんなに珍しいの？」

空いろのくれよんが、何を意味するか分らない伴内は、率直な疑問を口にする。

「お前、空いろのくれよんも知らねーのか？ ばっかじゃねーの？」

「シャッターを開けずに、木槌で叩き壊して中に入ろうとする程のバカに、バカって言われても悔し

くもねーや」

「オイラはバカじゃねえもん！ あのシャッターは、伯母ちゃん以外には開けられないようになってるから、木槌で叩き壊して入ろうとしただけだっただけなの！」

子供の様な言い合いをする二人を見て、白玉は溜息をつく。

「——伴内が空いろのくれよんの事を知らないのは、無理は無いんだ。伴内は、はいからさんだからね」

白玉の言葉を聞いたドドンパは、伴内の頭と尻を見て、猫耳と尻尾の不在を確認する。

「ホントだ！ こいつ人間だし、猫街じゃ見た事が無い顔だな」

人間……人類自体は、猫街にも住んでいるのだが、数が少ない。それ故、猫街で顔が知られていない人間は、新しく猫街に現れた、はいからさんだと判断出来る。

「一応、お前にも紹介しておくよ。一昨日の夜、猫神招きで猫街に来た、大瀧伴内だ」

「あー！ 猫街市場で噂になってたの、コイツか？ 猫街に来たばかりのはいからさんが、千風と同棲する事になったって噂の奴」

「いや、同棲なんかしてないから！ 猫街に慣れて金を稼いで一人立ち出来るまで、千風の探偵事務所の方に、住まわせて貰うだけだっただけ！」

伴内は慌てて、ドドンパの言葉を否定する。

「誰なんだよ、そんなデマ流してるのは？」

「出所が支那紋の噂らしいから、相当に支那紋自身の脚色が入ってるとは思ってたが、やっぱ事実じゃねーのか。でもまあ、男に無関心だった千風が、男を事務所とはいえ自分の縄張りに住まわすのは、驚きの事実ではあるが」

「支那紋……あいつがデマ流してるのか」

握り締めた拳を震わせ、伴内は怒りを堪える。

「犯罪とか、何か猫街で問題になる真似をしたら、後見人の二人に迷惑がかかるんだから、犯罪とか

起こさないように、肝に銘じておいてね……とか、俺に言っていた癖に、自分は名誉毀損モノの真似してやがんのかよ！」

「ははは、支那紋か。悪い子じゃ無いんだが、噂話が好きなのが、玉に瑕だよねえ」

白玉は苦笑しつつ、続ける。

「あの子が面白おかしく流す噂が、信じるに足らない嘘だらけの話だなんて事、猫街の住民なら皆知ってるから、伴内も余り気にしないでやってくれ」

「俺はいいけど、こういう噂は女の人……千風の方が……」

「支那紋が出所の噂なら、千風も呆れる事はあっても、気にはしないさ」

(そんなもん……なのか)

支那紋が発生源の噂の信頼度が、猫街でどのように扱われているかという事を、伴内も思い知る。

「——それで、空いろのくれよんってのは、何なの？」

「空いろのくれよんは、人類が残した遺産の一つだよ。特殊な物質を凝固させた塊で、クレヨンにそっくりな上、実際に絵を描いたり色を塗ったり出来る物なんだが……」

「人類の遺産？」

「そう。遺産と呼ばれる貴重なお宝には、神々の遺産と人類の遺産の二種類があるんだけど、空いろのくれよんは、人類が滅亡する前に作り出した、お宝なのさ」

口を挟んだドドンパが、話し終えるのを待ってから、白玉が話を続ける。

「空いろのくれよんと只のクレヨンとの最大の違いは、空いろのくれよんは、色を塗ったり付着させたりした物体を、宙に浮かせたり空に飛ばしたり出来る事なんだ」

「物体を空を飛ばしたり出来るクレヨン？」

伴内の問いに、白玉は大きく頷く。

「色を身体に付着させるだけで、思った通りに、自由に空を飛ぶ事も出来るって代物さ」

「色を付着させるだけで、思った通りに、自由に空を飛べる……」

「あたしにも正確な仕組みは分らんのだが、おそらくは地球の重力から物体を解き放つ重力制御物質を、簡便に塗布する道具として開発されたのだろう。古文書によれば、滅亡する前の人類が、輸送やら遊興やらに使っていたらしい」

「——空いろのくれよんという、ファンタジックな呼び名の割には、随分とハイパーテクノロジー臭の強いガジェットだな」

「神々が恐れる程の技術力を持ち始めていたと伝えられる、人類が残した遺産の中でも、有名な物の一つでね、過去に何度か発見されているんだ。残念ながら、一つも現存してはおらんだけどね……」

「貴重なものなんだろ？ 何で残っていないんだ？」

率直な疑問を、伴内は白玉にぶつけてみる。

「発見した猫人や、発見者から購入した猫人が、空いろのくれよんを自分に塗って、空を飛び回る遊びに使い切ってしまったから、全く残っていないんだよ」

「——貴重な人類の遺産を、遊んで使い切ったあ？」

「そりゃあ、使ってこそ貴重な代物だからねえ。使いもしないで後生大事に取っておいても、仕方が無いだろうさ」

驚き半分、呆れ半分といった感じの伴内に、当たり前だと言わんばかりの口調で、白玉が答える。ドドンパも白玉の意見に、相槌を打つ。

(どうやら、猫人の価値観は、人間と微妙に違うらしいな)

人間なら、幾ら使ってこそ価値がある道具でも、貴重な物なら大事にしまい込んで保存してしまうだろうと、伴内は思うからだ。

ちなみに、空いろのくれよんを文字で表記する場合、空だけが漢字で、他の部分がひらがなで表記される仕来りになっている。だが、何故に「空色のクレヨン」や「空色のくれよん」などと表記しないで、「空いろのくれよん」と表記しなければならないのかは、誰も知らない。

「——それで、その空いろのくれよんの在り処が分ると、何であたしのガレージのシャッターを、お

前が木槌で打ち壊す事になるんだい？」

白玉は空いろのくれよんの解説を終えると、ドドンパを問い詰め始める。

「それは、その……空いろのくれよんの在り処が、空の向こうなもんで、ちょっとバットサンを借りようと思ってさ」

「バットサンを借りる？ 借りるなら、あたしに頼みに来るのが筋だろうに」

「だって……伯母ちゃんに頼んでも、貸してくれねーじゃんか！」

「当たり前だ！ お前、これまでに一体何台、あたしが作った機械をぶっ壊したと思っているんだ？」

「——えーっと、二十台くらいかな？」

「四十八台だ、四十八台！ しかも、あたしの機械を壊すだけならまだしも、前にバットサンを貸したとき、着陸に失敗して、猫又学園の体育館に墜落した事を忘れたのかい？」

語気を荒げ、白玉はドドンパを叱責し続ける。

「怪我人や犠牲者が出なかったから、施設の弁償だけで穏便に片付いたものの、弁償に幾らかかかったと思ってるんだい？ 七千万円だよ、七千万円！」

伴内は、バットサンが何か尋ねたかったのだが、そういう雰囲気では無いと思ったので、尋ねなかった。飛行機のような物であろう事は、会話から伴内には読み取れたし。

ちなみに、猫街の通貨は、かつての日本と同様の円である。猫街にとっての歴史上の人物や建造物が印刷されているのだが、デザインはかつての日本の通貨と似ている。

「伯母ちゃんが貸してくれない事は分ってたからさ、とりあえずシャッター壊してガレージに入り、バットサンを借りて、空いろのくれよんを探しに行こうと思ったんだよ」

「そういうのは借りるって言わないで、壊して盗むって言うんだよ！ ただの犯罪だ！」

「空いろのくれよんを手に入れて売り飛ばせば、一億円は堅いんだってば！」

叱責されたドドンパは、必死の表情で言い繕う。

「一億円を手に入れた後に、シャッターの修理代もバットサンの使用料も、伯母ちゃんにしてる借金

も、全部まとめて払うつもりだったから、犯罪じゃないのさ！」

ドドンパは、苦しい言い訳をする。ちなみに借金とは、体育館修理費など、ドドンパが起こしたトラブルで発生した被害を、白玉が立て替えた金の総額である。既に総額は、一億円に近い額となっている。

「ねー……バットサン貸してくれよ！ 伯母ちゃんだって、空いろのくれよんに興味あるんだろ？ 売り飛ばす前に、研究させてあげるからさー。頼むよ！」

「嫌だね！ 体育館に墜落した時、お前は運良く軽い怪我で済んだけど、下手すれば死んでいたかもしれない事を、お前はもう忘れたのか！」

白玉は断固とした口調で、バットサンを貸す事を拒み続ける。

「あたしの作った機械の事故で、お前を死なせたら、あたしはジルバ達に顔向けが出来ないんだよ！ とにかく、お前にはバットサンは貸さん！」

ジルバとは、鈴木時流破……白玉の弟で、ドドンパの父の事である。ちなみに、時流破の妻でドドンパの母親は、鈴木漫歩まんぽという。

白玉がドドンパにバットサンを貸さないのは、金銭的な被害の為ではなく、むしろドドンパの身を案じているからなのだ。見た目や暮らしぶりこそ金持ちには見えないが、実は白玉は猫街有数の資産家なので、金銭的な被害などは、そんなに気にしていないのである。

バットサンを借りるという目的を果たせなかったドドンパは、肩を落としてトボトボと、白玉研究所から五十メートル程離れた木陰に向かって歩いて行く。木陰に停めてあった、昴百式に良く似た丸っこいフォルムの軽自動車に、ドドンパは乗り込む。

「白玉さんの車に似てるね、あれ」

「昴九十式だよ。猫又学園の卒業記念に、ドドンパに作ってあげた車さ。あいつは車の運転は下手じゃないんだが、どうも飛行機の運転は駄目でねえ……」

会話を交わす二人の視線の先で、昴九十式が走り出し、どんどん白玉研究所から遠ざかって行く。猫街の市街地に向かって走り去る昴九十式を目で追いながら、白玉は大きく溜息をつく。

ドドンパが去った後、伴内の協力を得て、シャッターの修理を終えた白玉は、伴内をガレージの中に誘う。優に学校の体育館程の大きさがある巨大なガレージの中には、トレーラーや船、バイクにジープなどの様々な乗り物に加え、多種類の工作機械が並んでいる。

全体的に、伴内の知る二十一世紀初頭の乗り物や工作機械に比べれば、数十年単位で遅れている感じの外観で、伴内にとっては古臭く見える。しかし、何れも猫街では最先端といえる乗り物や機械である事も、それを自作してしまう白玉の技術力と財力が、猫街の重鎮……四天王の一人に数えられる程に並外れている事は、伴内にも一目で分る。

ガレージの右奥にある黒い乗り物の前に、白玉は伴内を誘う。

「これが、バットサンさ。短い滑走路で離着陸出来る上に、水上での離着陸も出来る、短距離離着陸機……STOLで、尚且つ飛行艇でもあるという多機能軽飛行機なんだ」

白玉が、翼を折り畳んだ巨大な蝙蝠のようなバットサンの黒い機体を、伴内に紹介する。

「バットサンのバットって、ひょっとして蝙蝠の事？」

伴内の問いに、白玉は頷く。

こうもり がた けい ひこうき

「正式名称は、蝙蝠型軽飛行機三式……蝙蝠のバットと数字のサンをくっつけて、バットサンと呼ぶようになったんだ。ちなみに、一式はバットワン……二式はバットツーと呼ばれていた」

全長十メートル程の複座式の軽飛行機であるバットサンは、機体の前部にプロペラが装備されている、いわゆるレシプロ機である。翼の形と機体の形が、蝙蝠を思わせるフォルムになっている。

「三式だけ、英語のスリーでなく日本語でサンなのは、何故？」

「バットスリーよりバットサンの方が、響きが良かったからというだけで、特に意味は無い」

白玉は、伴内が興味深げにバットサンを見上げている事に、気付く。

「興味あるなら、操縦してみるかい？」

「——興味はあるけど、飛行機どころか車の操縦もした事無いから、俺」

「誰でも最初は操縦した事が無いんだから、操縦経験が無い事など気にする必要は無いさ。興味があるなら、何時でも貸してあげるから、千風に頼んで操縦を習うといい」

バットサンの脇にある、操縦席を模した部屋のようなスペースを、白玉は指差す。

「あそこにあるシミュレーターも使うがいい。あれで八十点以上のポイントを出せば、バットサンの操縦には、ほぼ問題は無い」

「でも、ドドンパ……さんに貸せないバットサン、俺になんか貸していいの？」

ドドンパが白玉の甥だと知った伴内は、ドドンパを呼び捨てにせず、さんを付ける。

「ドドンパに関しては、余計な気は使わんでいい。無職で人に迷惑をかけまくってるドドンパに、さんを付ける必要も無ければ、ドドンパが借りれない物を借りられても、遠慮する事は無いんだ」

白玉は、当然だと言わんばかりの口調で、話を続ける。

「猫街の住民が、あいつに物や金を貸さないのは、当たり前前の事なのさ。貸したら最後、まともな形で戻って来る事は、無いんだからな」

「——そうなんですか」

「それに、物は使われてこそ価値がある。バットサンも使われずに、ガレージに置かれたままでは、只の大きな置物でしかないのだから」

伴内は白玉の話聞いて、空いろのくれよんを全て使い切ってしまった事に関する、猫人である白玉の考え方を思い出す。

「だったら、ドドンパにもバットサン、貸してあげても……」

「あいつは、かなりの確率で貸した物を壊す上に、壊す際に他の色んな物まで巻き添えにするから、駄目だ」

白玉は、バットサンのシミュレーターに目をやり、嘆息する。

「シミュレーターで八十点以上出さなければ、乗っては駄目だと言っておいたのに、四十五点しか出せない状態で、バットサンを乗り回していたからな、あいつは……」

必要な技術を身に付けないで、飛行機を乗り回した上、事故を起こしても再び飛行機を乗り回そうとするドドンパに、伴内は呆れながらも、度胸だけは並外れていそうだなと思う。

「操縦が下手な癖に、鍵を壊してエンジン繋いで動かす事だけは、矢鱈に上手いんだよね、あのバカは……」

「そういえば、ドドンパって熊……じゃなくて、巨大な猫みたいに毛や猫ヒゲが生えたままなんだけど、あれは……」

「先祖返りさ。猫人には五パーセント程の確率で、猫人でありながら、体毛や猫ヒゲを持ったまま生まれる、先祖返りというのがあるんだ」

「先祖返りか……自分で言ってたな、そんな事」

「見た目が元の猫に近い、先祖帰りの猫人は、普通の猫人には無い、特殊能力を持っていたりするのさ」

「ドドンパも、何か特殊能力持ってるの？」

「矢鱈に身体が丈夫で、大抵の怪我は放っておいても治る事かねえ」

「——凄い能力じゃない、それ」

「あいつの場合。その能力のせいで、平気で無茶し過ぎる癖がついてしまったから、能力があるのが良かったんだか悪かったんだか」

白玉は、甥の身や今後の生活を案じ、溜息をつく。

車のエンジン音が遠くから響いて来たかと思うと、甲高いブレーキ音が、大きく響き渡り、エンジン音が止む。

(昴の音じゃないな、誰だろう？ お客さんかな？)

エンジン音から、千風や白玉……そしてドドンパが愛用している白玉製作の軽自動車、昴シリーズでは無く、もっと大型の乗用車だろうと判別したので、伴内は自分が見知らぬ来客が、黒貴探偵事務所を尋ねて来た事を、察したのだ。

白玉研究所での手伝いを終えた伴内は、黒貴探偵事務所で店番をしていた。朝から昼過ぎまで、仕事で事務所を留守にする千風から、伴内は黒貴探偵事務所の店番を任されたのである。

店番を始めた直後、尋ねてきた白玉に、事務室の整理を手伝って欲しいと頼まれた伴内は、探偵事務所の方に来客予定も無かった事から、白玉研究所に出向いていたのだ。シャッターの修理の手伝いまで終えて、白玉に礼を兼ねた昼食をご馳走になった後の午後一時頃、伴内は探偵事務所に戻り、昨日買出しして来たばかりの品々を、片付け始めた。

耳慣れぬ車の五月蠅いエンジン音が近付いて来て、猫神荘の前で止まったのは、伴内が片付けを始めた三十分後……午後一時半の事だった。気だるい午後の空気に、猫街全体が包み込まれた、眠気を誘う昼下がりの……。

車のドアを、勢い良く開閉する音が響いた数秒後、事務所のドアを強く叩く音が、続け様に探偵事務所の中に響き渡る。

「黒貴さん、細野ほそのです！ 黒貴さん、いますか？」

焦った様子の男の声が、事務所の中に響いて来る。ドアの外にいる、大型自動車で訪れた男の声である。

「千風……じゃなくて黒貴は、仕事で外出中なんですが……」

千風からは、来客予定者がいる事は聞かされていないし、飛び込みの客なら、細野だと名乗ったり、黒貴さんと呼びかける事も無いだろうと、伴内は思う。

(苗字で呼び合う、特に親しいとは言えない程度の友人もしくは知人が、仕事以外の用件で訪れたっ

てところかな?)

現状、手に入っている情報から、伴内は細野と名乗る来客と千風の間柄を、推理してみる。その推理は、ほぼ的を射ていた事を、伴内は後で知る事になる。

「男の声……って事は、お前が黒貴さんをたぶらかした、はいからさんかっ！」

伴内の声を聞いた細野という男は、語気を荒げて、ドア越しに伴内に食ってかかりながら、鍵の閉まっているドアノブを、ガチャガチャと乱暴に捻る。

「鍵を開けろ！ 貴様のような下衆野郎は、この細野茶虎様が叩き出してくれる！ 黒貴さんの近くから……いや、猫街から叩き出すっ！」

エキサイトしている、ドアの向こうにいる細野茶虎の声を聞いた伴内は、鍵は開けない方がいいだろうという、当然と言える判断をする。

「——仕事の依頼以外の用件でしたら、お引取り下さい」

伴内は、故意に淡々とした口調で、言い放つ。

「ふざけるな！ 仕事よりも遥かに大事な用件だっ！ 色魔のはいからさん風情がっ、この私を誰だと思っている？」

「私用で探偵事務所のドアの前で大騒ぎして、営業妨害してる痛い人だと思ってるけど」

「き、貴様っ！ 誰が営業妨害してる痛い人だっ！ 私は……」

茶虎が話している途中で、ブレーキの甲高い音が響き、軽めのエンジン音が止まる。茶虎との会話のせいで、近付いているエンジン音に、伴内は気付いていなかったのだ。

(昴の音だ……予定より早いけど、千風が戻って来たのかな?)

軽やかなエンジン音から、新たに現れた車が昴シリーズである事を、伴内は察する。しかし、現れたのは同じ昴シリーズでも、千風が白玉から購入した黒い昴九十一式ではなく、黄色に塗られた九十式だった。

「何だ、茶虎じゃねえか！ 学生がこんな時間に何やってんだよ、こんな所で？」

昴九十式の主……ドドンパの野太い声が、ドアの向こうから聞こえてくる。車と声から、伴内は新たに訪れたのが、ドドンパである事を知る。

「黒貴さんに付いている悪い虫を、追い払いに来たに決まっているだろうが！」

「千風に付いてる悪い虫？」

「黒貴さんと……その……同棲を始めた、はいからさんの事だっ！」

「——バカだろ、お前。そんなもん、支那紋が面白半分に流したデマに、決まってるじゃねーか！」

(いや、あんたも最初は、そう思い込んでただろうがよ！)

伴内は心の中で、ドドンパに突っ込みを入れる。

「そりゃ……支那紋が出所の噂だから、話半分どころか百分の一程度だと考えてはいたが、念の為に確かめに来てみたら、事務所に男がいるんだよ！」

「あー、そりゃ伴内だな。さっき伯母ちゃんのところで、会ったばっかだ」

「伴内っていうのか、黒貴さんに付いた悪い虫は！ 害虫は！」

「だから、同棲してるんじゃないくて、猫街に来たばかりで行き場が無い伴内を、とりあえず千風が、探偵事務所の方で預かる事になっただけで、住んでる部屋は別だって話だぜ」

「住んでる部屋が別だろうが、黒貴さんの縄張りに住み着いた悪い虫である事には、変わりはない！ そんな害虫は、この黒貴さんを守る正義の騎士である細野茶虎様が、駆除してくれるっ！」

「守るも何も、お前は千風よりも相当に弱いだろうが」

ドドンパが呆れた様な口調で、続ける。

「それに、お前に駆除出来る程、伴内は生易しい相手じゃねえ感じだぞ」

「——強いのか？」

「強いというより、凶暴なんだ。凄まじい威力のパチンコ乱射して、辺り一面を血に染める、鬼みてーに凶暴な、はいからさんなんだからな」

(いや、そんな事してねえだろ、オイ)

ドアの向こう側にいるドドンパに、伴内は心の中で突っ込む。

「そんな危ない奴なのか？ まるでヤクザもんじゃないか！」

「ああ、ヤクザもんだよ伴内は。伯母ちゃんの家遊びに行った罪の無いオイラを、ケラケラ楽しそうに笑いながら、パチンコで撃ちまくり続けたんだ。俺の血の雨を、辺りに降らせまくったんだよ！」

「何ていう外道だ！ そんな悪魔の様に危険な輩を、黒貴さんの近くになど置いておけるか！ 警察に通報して、逮捕して貰うぞ！」

(あああ、何か凄く面倒くさい事になってきた……)

伴内は頭を抱え、どうすべきか考える。考えた上で、警察沙汰にでもなったら、後見人である千風や白玉に迷惑をかける事になると判断し、鍵とドアを開けて、茶虎の誤解を解く事にする。

恐る恐るドアを開けて顔を出し、伴内は外の様子を窺う。すると、今まで大声で会話していたドドンパと茶虎が、驚いて黙る。特に、ドドンパから凶悪な奴だと伴内に関する説明を受けていた上、威勢の良い事を言い続けていた茶虎の方が、より酷く驚いていた。

伴内は、初対面となる茶虎を、観察してみる。ボタンダウンのワイシャツを着て、ループタイを緩く締め、海老茶のパンツを穿いた茶虎は、猫街で見かけた他の猫人より、かなり気取った出で立ちである。顔立ちは割りと整っているが、少し眠そうな印象がある垂れ目のせいで、二枚目半といったところだろう。

茶虎という名前の通り、いわゆるチャトラの猫の毛同様、茶色の濃淡のついた髪の毛の茶虎は、髪の毛だけでなく、髪の毛と同じ色合いの尻尾を持っている。かなり驚いている事は、表情だけでなく、髪の毛と尻尾の毛が逆立っている事からも分る。

「きよ……きよ……凶悪なはいからさんの、ヤクザもん！ 罪の無い猫人をパチンコで撃ちまくり、血の雨を降らせた……」

驚きと恐れのはっきりとした口調で呟きながら、茶虎は後ずさる。

「いや、俺はそんな事はしてない……」

伴内が否定の言葉を口にしてている最中、甲高いブレーキの音が響き渡ったかと思うと、昴シリーズのエンジン音が止まる。茶虎とドドンパが訪れてからのゴタゴタのせいで、近付いて来るエンジン音に、伴内は気付かなかったのだ。無論、ドドンパと茶虎も。

程無く、停車したばかりの昴シリーズの所有者が、ドアの前に姿を現す。仕事を終えて戻って来た昴九十一式のオーナー、黒いデニムの上下という出で立ちの千風が。

「——ドドンパに細野じゃないか、ウチの事務所の前で何やってるんだよ？」

千風はドアの前で、伴内と対峙しているドドンパと茶虎に問いかける。

「黒貴さん！ この危険かつ凶暴なはいからさんから、貴女をお守りする為に、この細野茶虎は馳せ参じたのですっ！」

先程まで脅えていた茶虎は、千風に情けない姿を見せる訳にはいかないとばかりに虚勢を張り、伴内を指差して怒鳴りつける。

「伴内が、危険かつ凶暴なはいからさん？」

「その通り！ こいつは白玉さんの家に遊びに行った罪無き無職のドドンパを、パチンコで撃ちまくり、辺り一面を血に染めた、凶悪なるはいからさんなのです！」

「オイラは無職じゃねーって！ 冒険者もしくはトレジャーハンターっ！」

「こんな危険なはいからさんに、近付いては駄目です！ 貴女は、この極悪非道の輩に、騙されているんですよ！」

「騙されてるのは、あんたの方だよ、細野」

千風は呆れた様な口調で、話を続ける。

「此処に戻って来る途中で、白玉さんに聞いたんだけど、ドドンパ……お前、白玉さんのガレージのシャッターをハンマーで叩き壊して、バットサンを盗み出そうとしたそうじゃないか」

「え？ いや、あれは……借りようとしたただけだって、無断で……」

ドドンパは気まずそうに呟きながら、そっぽを向く。

「木槌でシャッターを叩き壊していた所を、伴内に見付かって、パチンコで木槌の柄を折られたんだろ？ 白玉さんに聞いて知ってるよ」

千風の言葉を聞いて、茶虎はようやく、ドドンパの話が嘘だった事に気付く。気付くが、今更後に退けるものでも無い。

「いや、しかし……こんな素性の知れない奴を、いくら探偵事務所の方とはいえ、猫街では名の知れた猫人である黒貴さんが、自分の縄張りに寝泊りさせるのは、猫街の風紀という点からも問題が……」

「今回、伴内の身柄を俺が預かる事は、猫街四天王の白玉さんも、俺と一緒に後見人になるという形で、承認してくれている事なんだから、細野……お前が口を出すような問題じゃ無い」

白玉の名前を出された茶虎は、それ以上、抗議を続ける事が出来ない。猫街の名士である白玉が了承している事には、猫街有数の企業……細野商会の子息であるとはいえ、若僧である茶虎には、ケチなど付けようが無いのだ。

そんな茶虎の様子を見て、白玉と千風が後見人となった伴内の事を、恵まれていると評した支那紋の言葉を、伴内は思い出す。思い出し、支那紋の評価は正しかったのだなとも、伴内は思う。

(色々と世話になっちゃってるから、その内二人には、ちゃんとお礼しないとな……)

まずは自立する事が先決ではあるのだが、受けた恩は返すのが、伴内の信条なのだ。

「仕事の依頼じゃないのなら、さっさと帰りな。営業中に仕事と無関係な事で、事務所の前に居座られたら、単なる営業妨害だよ」

千風に、少しきつめの口調で窘められた茶虎は項垂れ、尻尾をだらりと垂らしながら、ドアの前を後にして、自分の車の方に戻って行く。昴シリーズよりも二周り以上大きい、黒塗りの高級セダンに、茶虎は乗り込む。

「相変わらず、茶虎にはキツイなー、千風」

「——期待持たせる様な、曖昧な態度を取る方が、為にならないでしょ」

目の前に垂れた前髪を、右手でかき上げながら、千風は素っ気無く言い放つ。

「そうかしんねーけど、そんな性格してると、何時までも男出来ねーぞ」

「余計なお世話だ」

「いい加減、昔の男に操を立てて生きるなんて、流行らないから止めろって。どうせ、二度と会えない相手なんだから？」

「その話を、安易に口にするんじゃない！」

威圧感のある口調で凄みながら、千風はドドンパを睨み付ける。怒っているのだろう、頭髪と尻尾の毛が逆立っている。

千風の逆鱗に触れた事を察したドドンパは身を竦めて、その話……千風の昔の男に関する話を止める。

(余程、千風にとっては、触れて欲しく無い話題みたいだな)

支那紋との会話などでも、分ってはいたことなのだが、伴内は改めて、昔好きだった相手に関する話は、千風にとってタブーなのだという事を思い知る。だが、隠されれば隠される程、真実を知りたくなるのが、人の性というものである。

伴内の中で、千風が昔好きだった相手に関する興味が、膨らみ始める。

「——それで、ドドンパは何の用で、此处にいるんだ？ 慢性金銭欠乏症のお前に限って、仕事の依頼という用事は有り得ない筈だが」

「その慢性金銭欠乏症を何とかする為に、お前に頼みたい事があるから、来た訳よ。伯母ちゃんは、お前のいう事には、割りと耳を貸すからさ」

「バットサンをお前に貸すように、白玉さんに頼んでくれっていう頼み事なら、お断りだよ」

千風は素っ気無く、ドドンパの頼みを拒絶する。

「白玉さんに、お前がそういう事を頼みに来ても断るように、頼まれてるからな」

「オイラの行動を、先読みしてやがるな、伯母ちゃん……」

舌打ちしながら、そう呟いたドドンパの表情が、何か良いアイデアでも閃いたかの様に、明るくなる。

「じゃあ、千風が伯母ちゃんから、バットサンを借りてくれよ。そしたら、オイラが千風から、バットサン借りるからさ！」

「そんなの、駄目に決まってるだろ！ 白玉さんが、お前にバットサンを貸さないのは、操縦下手なお前がバットサンを乗り回したら、危ないからなんだよ！」

「だったら、千風がオイラの代わりに操縦して、オイラを空いろのくれよんの元まで、運んでくれればいいじゃん。無論、ちゃんと分け前は払うからさ！」

「空いろのくれよんなんて、そんな夢みたいな話に飛びついてないで、ちゃんとした仕事探して働きな！ 白玉さんに、余り心配ばかりかけるんじゃない！」

「今度の話は、夢みたいな話じゃなくて、確かな話なんだって！」

「お前は何時も、確かな話だ信用出来る情報だと言ってる癖に、結局は何も見つけられないじゃないか。今回の情報も、どうせ偽物だって」

「だから、今度こそ本当なのよ！」

「とにかく、白玉さんにも言われてるから、ドドンパの頼みは聞けないよ！」

厳しい口調で言い放つと、千風はドアの前での揉め事を眺めていた伴内を、事務所の中に押し込みつつ、自分も事務所の中に入り、ドアを閉めて鍵をかける。

「ちっくしょー！ オイラは諦めねーからなっ！ 絶対にヒコーキを手に入れて空鯨に辿り着いて、空いろのくれよんを手に入れてやる！」

ドアの前に一人残されたドドンパは、大声で喚き続ける。

「空いろのくれよんを手に入れたオイラが、大金持ちになっても、千風には竹輪一本すら奢ってやん

ねーからなっ！」

捨て台詞を残すと、ドドンパは探偵事務所の前を後にして、自分の車に乗る。車は即座に軽やかなエンジン音を立てながらスタートすると、猫街の市街地に向かって走り去っていった。

「——ちょっとキツイというか、千風はドドンパに厳しすぎない？」

ドドンパが去った後、古い無国籍アクション映画に出て来るような、レトロで味のあるデザインに整えられている探偵事務所の中で、伴内は千風に問いかける。

「伴内は、ドドンパの肩持つの？ アイツが白玉さんのガレージ壊して、バットサン盗もうとしたの、見たんだろ？」

千風は意外そうな顔で、伴内に聞き返す。

「肩を持つ訳じゃなくて、断るにせよ、もう少し言い方がある気がするんだけど」

「伴内はドドンパの事を良く知らないから、そんな事言えるんだってば！ ドドンパに甘い態度を取ると、ろくでもない目に遭うって事は、猫街で暮らすなら、ちゃんと覚えておかないと駄目だよ！」

強い口調で、千風は伴内に訴え続ける。

「白玉さんの飛行機を、禁止されてるのに勝手に乗り回しては、着陸に失敗して壊すなんて事は、日常茶飯事！ 人の物を勝手に借りて使ったりも平気でするし、他人に借りた物は、返さないか壊すかのどちらかなんだ！」

「——千風も、何か勝手に使われて、壊されたりしたの？」

「白玉さんに頼んで作って貰った、仕事で使う俺の水陸両用車、あいつが勝手に乗り回して海に沈没させたんだよ！」

エキサイトしている千風のドドンパに対する文句は、まだ終わらない。文句をぶつけている相手は、ドドンパではなく伴内なのだが。

「結局、サルベージ代から修理代まで、全部白玉さんが出す事になったんだからね！ それに、まだ

必要な部品が手に入らなくて、修理が完全に終わって無いんだから！」

(そりゃ、クルマを壊されたら、千風が厳しく接するのも、当たり前だわな)

伴内は、千風のドドンパへの態度が厳しい理由の一端を、理解する。

「——あ……ごめん。何か伴内に怒ってるみたいになっちゃった、俺……」

ドドンパに対する苛立ちを、ドドンパを擁護した伴内にぶつけてしまった事に気付いた千風は、小声で謝罪の言葉を口にする。

「いや、別に謝らなくてもいいってば」

伴内は、申し訳無さそうに尻尾を垂れている千風を、フォローする。

「ドドンパがいい加減な奴で、色々と迷惑をかけられた千風が、ドドンパに厳しく接するのは、当たり前なんだろうなってのは、何となく分ったから」

二人は顔を見合わせ、苦笑いする。

「でも、空いろのくれよんとかいうのが、本当にあるのなら、どんなもんだか一度くらい見てみたい気もするよな」

伴内は窓の外に見える青空に目をやりながら、話を続ける。

「飛行機に乗って、お宝探しの冒険っていうのも、面白そうだし」

「——ドドンパの言う事なんて、どうせ全部出鱈目だから、お宝……空いろのくれよんなんて、見付かりっこ無いよ。何時もドドンパは、何処からか胡散臭いお宝の情報を仕入れて来ては探しに行くんだけど、一度も見付かった事なんか無いんだから！」

千風は、これまでのドドンパのお宝探しに関する、否定的な話を続ける。

「まして今回は、空鯨なんて冗談みたいな事言ってるし……。まあ、間違い無く今回もガセネタを手に入れて、はしゃいでるだけに決まってるよ」

「そう言えば、ドドンパが空鯨に辿り着いて、空いろのくれよんを手に入れてやるみたいな事言ってたけど、空鯨って何なの？」

「文字通り、空を飛ぶ鯨の事。無論、本物の鯨じゃなくて、遠い昔に人類が作り出した、空を飛び続ける鯨みたいな、得体の知れない物体なんだけど」

事務机の近くにある本棚の前に移動すると、千風は一冊の百科事典風の本を手にする。千風は目当てのページを探して開き、歩み寄って来た伴内に見せる。

「これが、空鯨。世界中の空を飛び回っていて、三十年前には、猫街の近くの空にも飛んで来た事があるんだ」

百科事典には、色褪せた大きな写真が掲載されていた。陸上から海の上空を撮影したと思われる写真には、雲に紛れて空を飛ぶ、白い鯨に似た物体が写っている。

「飛行船みたいだな……大きさがでかすぎるけど」

鯨に似た形状から、伴内は飛行船かもしれないと推測する。更に、周りにある雲や、手前を飛んでいる飛行機の機影との比較から、伴内の知る飛行船とは桁が違う程に、空鯨が大きい事にも、気付く。

伴内の推測を裏付ける、空鯨の大きさに関する記述が、写真の下に記されていた。

「推定全長……五キロメートル？ それ、鯨というよりは島じゃないか！ 空飛ぶ島！」

「確かに、見た目は鯨っぽいけど、サイズは島だよな」

千風は伴内の意見に同意しつつ、空鯨について、伴内に解説する。

「神々が世界を再生する前から、世界中の空を、ゆっくりと飛び回っている事は分っているけど、その経路も行き先も不明で、今現在、空鯨が世界の何処を飛んでいるのかは、分らないんだよね」

「——空鯨が何処の空を飛んでいるのか分らないから、ドドンパが空鯨まで、空いろのくれよんを取りに行くって言った事が、出鱈目だって千風は言うんだ」

「そう。何処を飛んでいるのか分らない空鯨にある空いろのくれよんなんて、幾らバットサンを使った所で、取りに行ける筈が無いもの」

「——でも、猫街に空鯨が近付いているって情報を、ドドンパがつかんだのかもしれないぜ？」

「それは、有り得ないよ」

伴内の意見を、千風は微笑みつつ否定する。

「実は白玉さんも、空鯨には興味があって、若い頃に電波式遠距離観測装置っていう、遠くに何があるかを知る事が出来る機械を作って、空鯨の移動ルートを調べようとしていた事があったんだって」

「電波式遠距離観測装置？ レーダーみたいなもんか」

「でも、電波式遠距離観測装置には全く反応しないまま、三十年前の春……猫街近くの空に、いきなり空鯨が現れたんだ。つまり、白玉さんですら、空鯨が何処を飛んでいるのか、猫街に近付いているかなんて事、分らないんだよ」

「——空鯨、いわゆるステルス機能を備えているみたいだな」

「ステルス機能？」

「レーダー……電波式遠距離観測装置で観測されない機能の事さ。俺がいた時空では、実現してた機能なんだ」

「ふーん。まあ、とにかく空鯨が何時頃、猫街に近付いて来るかなんて事、白玉さんですら知りようが無い事なんだ。猫街一の博学である白玉さんが知らない事を、ドドンパが知ってる訳が無いじゃないか」

そう言われると、伴内には言い返す言葉も無い。猫街住民の事に関しては、自分より千風の方が遥かに詳しい事を、伴内は知っているのだから。

伴内は再び、窓の外の青空に目をやる。色褪せた写真で目にした巨大な白鯨が、青空を飛ぶ光景を、伴内は心に描いてみる。

そんな伴内の表情を見て、千風は何となく、伴内の心の中を察し、戸惑ったような表情を浮かべる。「伴内みたいな男の子が、冒険とかに憧れるのは分るけど、まだこっちの世界にも慣れて無いんだし、無茶したらだめだよ」

猫街における、事実上の伴内の保護者である千風は、諭す様な口調で続ける。

「冒険とかしてみたいなら、その内……俺が連れて行ってあげるから。白玉さんにバットサンとか借

りて」

「誰かに連れて行って貰うなんて、それ……既に冒険じゃないよ、千風。自分の力で行くからこそ、冒険なんだから」

千風の言葉を聞いた伴内は、そう言いながら、苦笑する。

その日の夜、午後十一時を過ぎた頃、夜の闇に包まれた白玉研究所のガレージの前で、一つの影が蠢いていた。黒くて大きい……熊のような影が。

「へっへっへっ！ 賢いオイラは、同じ間違いを繰り返さないのさっ！」

影の正体……忍者のような黒装束に身を包んだドドンパが、上機嫌で呟く。

「今朝の盗み……じゃなくて無許諾で借りるのに失敗した原因は、木槌でシャッターを叩き続けている間に、叩いてる音を聞き付けた伴内とかが、オイラがガレージに入ってバットサンに乗る前に、ここに来ちゃったせいなんだ」

ドドンパは自慢げに、独り言を語り続ける。

「——つまり、シャッターを短時間で破ってガレージの中に入り、バットサンに乗り込んで持ち出しちゃえば、伴内や伯母ちゃん……それに千風とかが駆けつけて来ても、既にバットサンに乗り込んでるオイラを止めるのは、無理って訳よ！」

背負って来た、ばかでかいリュックを引っくり返し、中に入っていた大量の花火を、ドドンパは辺りにぶちまける。そして花火をシャッターの前の一箇所に集めると、花火の中から直径が十センチ程ある筒状の打ち上げ式花火……ぱんつあーふあうすとを手に取り、ドドンパはシャッターの前から二十メートル程離れ、木陰に隠れる。

「人に向けてはいけません……とは書いてあるけど、花火やシャッターに向けてはいけませんとは書いてないね」

ぱんつあーふあうすとの注意書きに、一応は目を通すと、ドドンパは銀色のライターで、導火線に

着火する。炭酸水が泡立つかの様な音を、五秒程立てた後、軽い爆発音を発しながら、ぱんつあーふあうすとは火の玉を五発、立て続けに発射する。

赤に青、黄色に緑……色とりどりの火花を散らしながら、火の玉は爆砕し、花火の山に火を着けてしまう。火が着いた花火は次々と弾け飛び、他の花火に着火する。

直後、落雷が至近距離に落ちたかの如き爆音が響き、稲妻の閃光の様な光が、辺りを照らす。ほんの数秒の間に、大量の花火が連鎖的に弾け飛んだ事により、小さなダイナマイトの爆発と同程度の爆発が、発生したのだ。

大量の花火による爆発は、薄いスチール製のシャッターを吹き飛ばした。辺りには爆発による灰色の煙が漂い、視界を遮っているのだが、スチール製のシャッターに、バットサンが通り抜けられる程の大きさの大穴が穿たれた事が、ドドンパには視認可能だった。

「よっしゃー！」

目論見通り、大量の花火を使った爆発で、シャッターに一瞬で大穴をあけたドドンパは、嬉しそうに尻尾をパタパタと振りながら、ガッツポーズをとる。

リュックを背負ったまま、ドドンパは大穴のあいたシャッターに駆け寄り、ガレージへの侵入を果たす。火の気配を察し、スプリンクラーが雨の様に水を散布する中、ドドンパはバットサンに駆け寄って、機体によじ登ると、コックピットに乗り込む。

コックピットは、操縦席と後部座席に分れている。リュックを後部座席に放り込んでから、ドドンパは操縦席に座る。

バットサンのコックピットを風圧から守る風防は、コックピット全体を覆うタイプでは無く、操縦席の前面にだけあるタイプなので、乗り込むのは楽なのだ。操縦席に座ったドドンパの手には、何時の間にか水色のゴム手袋がはめられている。

ドドンパは即座に、ポケットからペンチを取り出すと、慣れた手付きで鍵穴のついたシリンダーを引き抜き、シリンダーに繋がって顔を覗かせた二本のコードを縛りつけて繋ぐ。軽い火花が散り、車

の物とは比較にならない激しいエンジン音が鳴り響き、機体が震える。

バットサンの先端に装着されたプロペラが、高速で回転し始める。バットサンは、動き始めたのだ。

「な、何だあ？」

突如、闇夜を震わす爆発音を耳にした伴内は、探偵事務所の隅にある簡易ベッドから飛び起きると、窓の外に駆け寄る。窓を開けて音がした方向に伴内が目をやると、白玉研究所の方から煙が立ち昇っている光景が見える。

「ガレージのあった辺りか？」

伴内は千風に買って貰った、寝巻き兼部屋着である黒いジャージの上下のまま、ドアに向かって駆け出す。ドアに向かう途中、棚の上に置いてあったパチンコと、パチンコの弾が詰められた子袋を手に取り、伴内はジャージのポケットにしまう。

爆発がガレージの辺りで起こった事を知った伴内は、ドドンパの事を思い出し、ドドンパが引き起こした爆発なのかどうかはともかく、何者かの襲撃による爆発の可能性を考慮し、武器であるパチンコを手を取ったのだ。

伴内はドアを開け、即座に白玉研究所に向かって走り出した。

「千風！」

外に出た伴内は、千風に出くわした。伴内とお揃いの黒いジャージの上下に身を包んだ千風は、伴内と共に白玉研究所に向かって、疾走する。

程無く、白玉研究所の前に辿り着いた伴内と千風は、消火器を手に、ガレージ周囲の植え込みに着いた火を消火している、白いパジャマ姿の白玉を発見する。

「白玉さん！ これは？」

問いかけながら、白玉の元に駆け寄る千風に、白玉は足元に置いてある消火器を拾い上げ、投げ渡

す。

「その辺りを、消火してくれ！」

千風は白玉の指示に従い、白玉が指差した辺り……研究所に近い植え込みに着いた火を、手渡された消火器で消火する。

「——他に消火器は？」

白玉に尋ねる伴内の声が、プロペラとエンジンの音に掻き消される。伴内は轟音が聞こえて来る方向……ガレージの方に目をやる。

ガレージから姿を現し、翼を大きく広げたバットサンが、伴内の目に映る。黒くて巨大な、蝙蝠の如き姿の軽飛行機、バットサンが。

プロペラを回して前進する力を得ているバットサンは、ゆっくりとガレージの前の広い道路に出る。

「——あのバカ、飛び立つ気だ！ 伴内、ドドンパを止めてくれ！」

白玉の叫び声を耳にした伴内は、操縦者がドドンパである事を確認する為に、操縦席に目をやる。ゴーグルを被ったドドンパの姿を、伴内は視認する。

伴内はバットサンの左側面に素早く移動しながら、取り出したパチンコに小石の弾を込め、操縦席にいる黒装束のドドンパに狙いを定める。

「止まれえ、ドドンパア！ 止まらないとお、撃つぞお！」

エンジンとプロペラの音に掻き消され無い様に、伴内は怒鳴って警告する。

「止まれと言われて止まる馬鹿が、いる訳ねえっての！」

ドドンパは大声で言い返すと、前屈みになって身を隠す。コックピットの中に隠れたドドンパは、伴内のパチンコの射線から、機体側面の鉄板で守られているのだ。

ドドンパが身を隠した状態のまま、バットサンは次第に速度を速め、滑走路としても利用出来る広い道路を、走り続ける。既に伴内は、走ってついて行くのがやっとなのである。

「これじゃ撃てないし、逃げられる！」

伴内はバットサンの翼に飛びつくと、バットサンの上によじ登る。既に風圧を感じる程度に、加速し始めているバットサンの翼の上を、伴内は猫の様に四つん這いになり、コックピットに向かって移動する。

「もうそろそろ、あのパチンコバカも、諦めた頃合だわな！」

人間や猫人が走れる速力を、バットサンは既に超えているので、伴内は追いかけて来るのを諦めただろうと判断し、ドドンパは姿勢を元に戻す。

「——だーれがパチンコバカだって？」

伴内の声を聞いたドドンパは、驚いて右側を向く。大きな身体で、慌て気味に身体を捻ったせいで、ドドンパの右ひじがうっかり、エンジン出力を調整するスロットルレバーに触れてしまう。

スロットルレバーが一気に前に倒れた事により、バットサンの機体はがくんと揺れた後、急激にスピードを増して行く。

「あれ？ 何でスピードが急に？」

何が起こったのか分らず、ドドンパは操縦席でオタオタしてしまう。

「ひ、人が翼に乗ってるのに、突然スピード上げるんじゃないよ！ 危ないだろ！」

急加速に驚いた伴内は、翼にしがみつきながら、ドドンパに文句を言う。

「わざとじゃないってば！ 何か知らないけど、急にスピードが……」

ドドンパが言い訳をしている途中で、ふわりとバットサンが浮き始める。急加速のせいで急激に揚力が増加し、バットサンの機体を浮かせてしまったのだ。

「流石はS T O L、離陸が早い……なんて感心してる場合じゃねえ！」

翼にしがみつきながら、伴内は自分で自分に突っ込みを入れる。

「飛び降りるのは……無理か」

既にバットサンの高度は、十メートル程に達してしまっている。飛び降りるタイミングを、伴内は逸していたのだ。

「バットサン降ろせよ、バカ野郎！ 降りられないだろうが！」

「一回浮いたら、降ろす方が危険だよ！ このまま飛ぶから、飛び降りるなりコックピットに移るなり、どっちかにしろって！」

エンジン音とプロペラ音に負けない大声で怒鳴りながら、ドドンパは操縦桿を引いて機首を上げ、車輪をしまう為のレバーを上げる。バットサンは車輪をしまい、上昇を続ける。

「おいおい、どーすりゃいいのよ、俺？」

伴内は自問しながら、急速に小さくなって行く眼下の光景に目をやる。とりあえず、既に飛び降りる事が不可能なのは確実なので、伴内にはコックピットに移るか、翼にしがみつきの続けるしか、選択肢が無かった。

当然の様に、コックピットに移った方が少しはマシだと、伴内は判断する。伴内は翼につかまりながら、ゆっくりとコックピットに移動すると、後部座席に乗り込んだ。

伴内という予定外の乗客を乗せたバットサンは、猫街の夜空を、はいから湾に向かって飛び去って行った。

「白玉さん、伴内がドドンパと一緒に、飛んで行っちゃった！」

消火作業を続けながら、バットサンが伴内を乗せたまま飛び去った事に気付き、千風は狼狽する。

「——どうしよう？」

「粗方、火は消えたようだから、もう消火の必要は無いだろう、バットツーを貸すから、追いかけてなさい！」

まだ火が燻っている、植木の消火作業を続けながら、白玉は千風の問いに答える。

「了解！ 後は任せます！」

千風はガレージの中に駆け込むと、ガレージの隅にある掃除用工具箱を開けて、掃除用工具箱の天井にある隠し扉を開き、バットツーの鍵を取り出す。この隠し扉の中が、鍵の隠し場所なのだ。

鍵を手に入れた千風は、バットサンより奥に格納されていた、バットサンと良く似たデザインの黒い飛行機……翼を綴じたバットツーに駆け寄り、操縦席に飛び乗る。即座に鍵を鍵穴に挿して捻り、千風はバットツーのエンジンを一発でかけてしまう。

轟音を発しながらプロペラが回り始めたバットツーは、ガレージの外に向かって前進し始める。程無く、ガレージの外に出たバットツーは、翼を開いて広い道路の上に出る。

「バットサンは、はいから湾の方に向かって飛んでいるよ！」

バットツーの操縦席にある無線機のスピーカーから、白玉の声が聞こえて来る。消火作業を終えた白玉は研究室に向かい、レーダーで空の様子を確認し、はいから湾に向かって南方に飛んで行く、飛行機の存在を捉えたのである。

「はいから湾か……すぐに追いかけます！」

千風は風除けのゴーグルを装着すると、スロットルレバーを前に倒し、一気に推力を上げる。飛行艇ではあるがSTOLでは無いバットツーは、バットサンよりも長い距離を滑走して離陸すると、南の空に向かって飛び去って行った。

「さっさと戻れ！ 戻らないと撃つぞ！」

夜空を飛ぶバットサンの後部座席から、操縦席にいるドドンパの後頭部にパチンコで狙いを定めながら、伴内は威嚇する。伴内が装着しているゴーグルは、後部座席に備え付けてあったものだ。

既に高度は五百メートル程に達しているのに、気温はかなり下がっているのだが、コックピット内はヒーターがついているので、寒いという程でも無い。

「へへーんだっ！ もう空に上がっちゃったから、脅したって無駄だねー！」

ドドンパは脅しに怯まず、言い返してくる。

「そのパチンコを撃って、オイラが意識を失ったり怪我したりして、操縦出来なくなったら、バットサン墜落して、オイラ達二人揃って死んでしまうからな！ おめー一人じゃバットサン、操縦出来ない

に決まってるし！」

「——俺がバットサン、操縦出来るかも知れないだろうが」

「操縦出来るなら、もうオイラの事パチンコで撃って気絶させて、操縦席奪って白玉研究所に戻ってるだろ？ まだそうしてないって事自体が、おめーがバットサンを操縦出来ないって根拠なのさ」

伴内はドドンパの話聞いて、思っていたよりはドドンパがバカでは無い事に気付く。しかし、伴内も簡単に引き下がる訳にはいかない。

「だったら、意識を失わず怪我もしない程度に、痛めつけてやろうか？ 痛い目に遭いたくなければ、戻れ！」

本気で撃つという気合を滲ませながら、伴内はドドンパを威圧する。

「——そ、そんな脅しなんか、オイラは屈しないもんね！」

気圧されながらも、ドドンパは言葉通り、伴内の脅しに屈しない。

「今夜を逃したら、空鯨は猫街の近くに、もう何十年も来なくなるんだって！ 今回のチャンスを逃したら、空いろのくれよんを手に入れるチャンスなんて、もう来ないかも知れないんだぜっ！」

必死の口調で、ドドンパは伴内に訴え続ける。

「おめーを降ろしに戻ったり、何処かに下りたりしたら、追っかけて来てるだろう千風に、捕まっちゃうに決まってるんだ！ 頼むから、このままオイラと一緒に、空鯨に行ってくれよ！ 空いろのくれよん手に入れたら、儲けは山分けでいいからさー！」

「千風が言ってたけど、どうせガセネタなんだろ？ 何時も出鱈目な、お宝の情報ばかり手に入れて、空振りばかり続けてるそうじゃないか」

「今回は、本当に本当の情報なんだ！ 何たって、今回の情報の出所は……」

ドドンパの話遮る様に、夜空に突然、続け様に銃声が響き渡る。銃声に続き、上空からオレンジ色に輝く弾丸の雨が、バットサンに向かって降り注いで来る。

闇夜を切り裂く弾丸の雨は、高度五百メートル程の海上を飛行するバットサンの翼を掠め、夜の海

に着弾し、水柱を立てる。バットサンは上空から、銃撃を受けたのである。

「な、何だあ？」

伴内は上空を見上げ、三百メートル程上空を飛んでいる、バットサンより一回り程大きい真紅の飛行艇を、視認する。飛行艇は急速に高度を下げ、バットサンと高度を揃えると、バットサンの左側百メートル程の辺りを、並んで飛び始める。

「やっぱり来やがったか、ドドンパ！ このドロボウ猫がっ！」

真紅の飛行艇の後部座席にいる、柄の悪い青年風の猫人が、ドドンパに向かって怒鳴り散らす。青年は、両手に拳銃を手にしている。先程の銃撃は、この猫人がコックピットから身を乗り出して、下方にいるバットサンを狙って行ったのだ。

「盗賊にドロボウ猫だとか、言われたくねーっての！」

ドドンパも負けずに、怒鳴り返す。

「どういう事なんだよ、ドドンパ？」

べに どくろ だん

「あいつらは紅髑髏団って言う、盗賊団なんだ！」

「盗賊団じゃねー！ 俺達はトレジャーハンターグループだっ！」

二丁拳銃の青年が、ドドンパの言葉に反論する。

「成る程、要するにドドンパの同類か」

「あんな奴等と一緒にするなよ、伴内！ オイラは伯母ちゃんとか親しい人の物を、勝手に借りたり、借りた物をうっかり壊したりはするけど、使ったらちゃんと返すもんね！」

ドドンパは、伴内の言葉に抗議する。

「オイラはあいつらみたいに、武器で脅して他人の物を奪い取って、売り飛ばしたりはしねーんだ！」

「いや、ガレージのシャッターを爆破して、バットサン盗み出したお前は、盗賊団と同類にしか見えないって！」

「ガレージのシャッターは、空いろのくれよんを手に入れて、売り飛ばしてお金に換えたら、これまでの借金と一緒に弁償するから、問題ねーの！ お金が入ったら、ちゃんと伯母ちゃんには、これまでのお礼もするんだもんねー！」

（一応、白玉さんに恩義は感じてる訳か、ドドンパも）

伴内はドドンパの言葉を聞いて、心の中で呟く。無論、ガレージ壊して飛行機盗んで、お宝を手に入れて借金を返そうとするより、ちゃんとカタギの仕事について働いた方が、白玉は喜ぶだろうかと、伴内は思ったのだが。

ちなみに、紅髑髏弾は猫街においては、合法的なトレジャーハンターグループである。紅髑髏弾が盗賊団的な活動を行うのは、猫街の法が及ばない無法地帯においてのみなのだ。現在、バットサンが飛行している辺りは、既に猫街の法が及ばぬ無法地域なのである。

無法地帯で盗賊行為を行おうが、基本的に取り締まる法的根拠も無ければ、取り締まる者もない。それ故、紅髑髏団のメンバー達は紅髑髏団としての活動が無い場合は、普通に猫街の住人として暮らしているし、他の猫街住人達も、猫街で法を犯さない限り、紅髑髏団のメンバー達が猫街で暮らす事を、問題視する事は無い。

「ふざけるんじゃないねえ！ 空いろのくれよんは、お前みたいな馬鹿猫には渡さねえぞ！ あれは俺達、紅髑髏団の獲物なんだ！」

二丁拳銃の青年が、ドドンパに怒鳴り散らす。

「何言ってるんよ、所有者のいないお宝は、手に入れた奴の物だってのが、猫街の掟じゃねーか！ 早い者勝ちだもんねー！」

「俺達紅髑髏団が必死で手に入れた、空いろのくれよんの情報を盗んだくせに！ 都合の良い時だけ、猫街の掟を持ち出すんじゃないよ！」

「——どういう事だよ、それ？」

伴内に問い詰められたドドンパは、しれっとした顔で事情を説明する。

「盗んでなんかいねーもん。昨日の夜、マタタビ岬で釣りをしていたら、マタタビ海岸で騒いでる連中がいたんで、様子見に行ったんだ。そしたら、こいつらが話してるのを聞いちゃっただけなんだからば！」

マタタビ岬は、はいから湾の東端にある岬の一つであり、その近くにマタタビ海岸も存在する。猫街からは離れた場所にあり、まともな猫街の住民は近付かないので、今は紅髑髏団の縄張りとなっている。

ちなみに、ドドンパがアジトとしている小島も、マタタビ岬の近くにあったりする。

「空いろのくれよんが空鯨にあるって事や、空鯨が明日の夜中過ぎに、はいから湾の南東沖……石林いしばやし群島上空を通過するって話をさーっ！」

今夜の夜中、はいから湾の南東五百キロ沖にある、無人島の集まり……石林群島辺りの上空を通過する筈の空鯨を探し出して、飛行艇で乗り込み、空いろのくれよんを獲得する計画を、紅髑髏団は立案し、五機もの飛行艇をマタタビ海岸に揃えて、準備していた。その現場での話し合いを、ドドンパに盗み聞きされてしまったのだ。

基本的に目立つ存在であるドドンパに、紅髑髏団の団員達は気づき、ドドンパの身柄を拘束しようとしたが、ドドンパは見事に逃げおおせたのだ。ちなみに、これまでも自称トレジャーハンターである、限り無く無職に近いドドンパと、トレジャーハンターグループを名乗りながら、盗賊まがいの真似も行っている紅髑髏団は、獲物を取り合ったりなどして、色々と対立してきた。

それ故、紅髑髏団の面々は、空鯨と空いろのくれよんの事をドドンパに知られた以上、ドドンパも空鯨を目指すだろうと、警戒していたのである。

「今回の、空いろのくれよんと空鯨の情報はな、紅髑髏団が結構な額を投資して、仕入れた情報なんだ！ それを盗み聞きして儲けようなんざ、猫人の風上にもおけねえ！ この俺様が退治してやる！」

「いや、ドドンパは最初から、風上にいるタイプじゃないと思うんだが……」

伴内の眩きを耳にしたドドンパは、苦虫を嚙み潰したような顔をする。

「——おめえ、さらりとキツイ事言うな」

「こっち狙ってるぞ、避けるよ！」

紅髑髏団の飛行艇の後部座席にいる青年が、銃口を自分達に向けてきた事に気付いた伴内は、ドドンパの言葉を見無視し、警告を発する。

「任せろ！」

ドドンパは操縦桿を引き、バットサンを急上昇させる。

「伯母ちゃんべにかもめが作ったバットサンの性能は、猫街の飛行機じゃ最高なんだ！ 紅髑髏団の連中が乗ってる紅鷗なんか、簡単に振り切ってやるっての！」

確かに、バットサンの機動性は、紅髑髏団の飛行艇……紅鷗を圧倒していた。バットサンは呆気なく紅鷗を振り切ってしまふ。しかし、紅鷗を振り切った先に、また別の紅鷗が現れ、バットサンに銃撃して来る。

弾丸の幾つかがバットサンの本体側面を掠め、火花を散らしながら傷つける。ドドンパは操縦桿とラダーペダルを器用に操作し、バットサンを蛇行させて追撃を振り切ろうとするが、今度の紅鷗は、簡単には振り切れない。

性能差を、パイロットの技量が埋めているのだ。今度の紅鷗のパイロットは、確実にドドンパよりも操縦が上手なのである。

「やばい！ 振り切れねえ！」

悲痛な声を上げるドドンパに、伴内は後部座席の周囲を見回しながら、問いかける。

「こっちには拳銃とか、積んで無いの？」

追撃を振り切れないなら、武器を使って反撃するしか無いと、伴内は考えたのだ。銃撃してくる相手への反撃なのだから、伴内も武器で敵を攻撃する事に、余り躊躇いは無い。

「銃器は所持が禁止されてるから、積んでねえんだ！ その辺の法律は、ちゃんとオイラは守る、常識的な猫人なんだってば！」

「常識的じゃねえだろ、お前は！」

「非合法的な爆弾じゃなくて、合法的に手に入る花火でシャッター吹っ飛ばした辺りが、常識的じゃねーの！」

「常識的な奴は、そもそもシャッターを吹っ飛ばさないんだよっ！」

銃器などが無い以上、伴内は愛用の武器に頼るしか無い。銃器に比べれば非力であり、鉄板で覆われた機体には通用しないだろうが、硝子かプラスチック製だろう風防を狙えば、追撃を妨害出来るかもしれないと考え、伴内はポケットからパチンコと小石を取り出す。

五十メートル程の距離を取り、追撃してくる紅鷗から、オレンジ色の光弾が飛来し、伴内の脇を掠める。伴内の全身の肌が粟立ち、背筋が震える。

(落ち着け！ このでかい的……バットサンにも、殆ど当たらない程の下手糞の射撃なんだ！ 俺に当たる可能性は、かなり低い！)

伴内はパチンコに弾である小石を装填して、ゴムを引っ張る。大雑把に弾道を計算しながら、紅鷗の風防を狙い、伴内はパチンコを撃つ。小石は緩い弾道を描いて、紅鷗の上を通り過ぎる。

普段の伴内なら外す距離では無いのだが、高速で移動している飛行機間の狙撃は、普段とは勝手が違うのだ。伴内は即座に通常の狙撃とのズレを計算に入れた上で、弾をパチンコに再装填して狙いを定め、撃つ。

再び緩い弾道を描いて小石は飛ぶが、今度は見事に風防を直撃する。風防は砕けこそしないが、白い網目の様なひびが全体に走り、パイロットの視界を奪う。

紅鷗の方から、悲鳴が上がる。紅鷗は混乱しているかの様に、機首を揺らす。

「敵機の風防をパチンコで潰した！ 逃げるなら今だ！」

「おー！ 流石は凶悪なパチンコ魔っ！ やるじゃねーか！」

ドドンパは操縦桿を引いて機首を持ち上げ、バットサンを急上昇させて、上空にある雲の塊に突入させる。

「誰が凶悪なパチンコ魔だっつーの」

伴内が呟いた直後、バットサンは雲を突き抜けて雲海の上に出る。満月に近い月の光に照らされた雲海の表面は、風を受けて海面のように波打っている。

月光に照らされる雲海を目にして、伴内は神秘的な美しさに息を呑む。飛行機に乗った事が無い訳では無かったのだが、雲海の表面スレスレを、冷たい大気の流れを肌で感じながら飛びつつ、目にする夜の雲海は、目にした事が無い程に美しい光景であり、伴内はしばしの間、見惚れてしまう。

バットサンが飛ぶ背後には、モーターボートが水面に残す様な、波状の軌跡が描かれていく。機体後方を眺め、雲海にバットサンが描くラインを眺める伴内の目に、突如、雲海の中から飛び出して来る、二機の紅い飛行艇が映る。

水面から飛び出す海豚や鯨の様に、紅鷗が雲海から飛び出して来たのだ。無論、バットサンを追撃しに来たのである。どちらも風防が無事である為、伴内が風防を撃った機体とは別機体だという事が分る。

「紅鷗が二機、追って来てるぞ！」

伴内がドドンパに警告の言葉を発した直後、二機の紅鷗の後部座席から、身を乗り出している猫人達が、手にした拳銃で銃撃してくる。オレンジ色の銃弾は、バットサンの脇を掠めて、雲海に沈む。

「さっきみたいに、パチンコで風防潰しちゃってくれよ！」

「まだ距離が遠すぎる！ 少しスピード落として、距離を五十メートル程にしてくれないと、流石に当たらないって。拳銃より射程距離短いんだ、パチンコは」

「距離を詰めればいいんだな？ ただスピード落すだけだと狙われ難いから、バレルロールしながら、間合い詰めるぜ！」

「良く分らんが、任せる！」

バレルロールという言葉の意味が分らなかったが、一応はドドンパの方が飛行機には詳しいのだから、伴内はドドンパに任せてみる事にする。

「任せてくれっての！」

ドドンパは操縦桿を引いて機首を上げると、続けて操縦桿を右斜め下に倒す。すると、バットサンは右側に回転しながら飛び始める。

バレル（樽）の内側で、螺旋を描くかのようにロール（回転運動）しながら飛行する、マニューバ（飛行機の空中機動）が、バレルロールである。ミサイルや後方からの攻撃などをかわすのに、有効なマニューバだと言われている。

「うわあああああっ！」

いきなりバットサンが回転し始めた事に、伴内は驚きの声を上げる。

「この程度の回転で、何で驚いてるんだ？」

「いきなり回転すれば、誰だって驚くだろうがよ！」

「いきなり？　ちゃんとバレルロールやるって言ったじゃん！」

「——あ、これがバレルロールな訳ね。とにかく、こんな回転してたら狙えないから、ちょっと回転止めてくれ！」

「りょうかーい！」

ドドンパはバレルロールを止め、バットサンの飛行を通常に戻す。

「距離は縮まったのか？」

伴内は背もたれに身体を隠しながら、即座に後方を確認し、二機の紅鷗との距離を目測する。紅鷗との距離は、ほぼ五十メートル程に詰まっていた。

「いい間合いだっ！」

向かって左側の紅鷗の風防を狙い、即座に伴内はパチンコを撃つ。

「正当防衛だ！　恨むなよっ！」

小石は緩い弾道を描いて、左側の紅鷗の風防を直撃する。風防に蜘蛛の巣の様なヒビが入り、猫人の悲鳴が響き渡る。パイロットがパニックを起こしたのだろう、紅鷗は安定を失い、雲海に沈んで行く。

続けて、伴内は右側の紅鷗を狙い、パチンコを撃つ。右側の紅鷗も風防をヒビだらけにされ、機体の安定を失い、雲海へ沈む。

「——死んだりはしてないよな。視界が一時的に悪くなるにせよ、風防外しちまえば、操縦は可能な筈だし」

雲海に沈んだ紅鷗に乗っていた猫人達の身を、伴内は少し案じる。

「優しいっつーか、甘い奴だな、おめーは！ 銃撃して来た盗賊団になんか同情してたら、命が幾つあっても足りねーぞ」

ドドンパの言う通りで、自分の命を狙って来た相手に反撃しただけなのだから、気に病む必要は無いと、伴内も理屈では考えている。それでも殺人……いや殺猫人というのは、余り気分がいいものではないと、伴内は思う。

「風防にヒビが入って視界が悪くなったただけなら、風防をハンマーで完全に砕けば、操縦し難いけど飛ぶ事は出来る」

操縦席の備品であるハンマーを手に取り、伴内に見せながら、ドドンパは続ける。

「何かの間違いで墜落したとしても、まともな飛行機なら、座席の下とかにパラシュートが常備されてるから、それで脱出すればいいだけの話だ」

伴内は座席の下を見て、パラシュートらしきリュック状の包みがある事に、気付く。

「風防潰されたくらいで死ぬ程、紅髑髏団の連中はヤワじゃねーって。だから余計な事、気にしなくていいっての！」

ドドンパの話聞き、伴内は気が楽になる。

「それにしても、おめーのパチンコの腕、凶悪なまでにスゲーな！」

「お前の操縦も、中々じゃないか。きっちり五十メートルくらいの間合いに、詰まってるぜ」
伴内は、意外そうな口調で続ける。

「白玉さんや千風は、お前の操縦が凄く下手だって言ってたんだけど、下手じゃ無さそうだな」

「そうなんだよ！ オイラは操縦するの、本当は上手いんだぜ！ 伯母ちゃんや千風は、その辺の事が分って無いんだってば！」

「これまで何度も、白玉さんの飛行機を壊したみたいな話、してたんだけど……」

「あー……それは本当。オイラ飛ぶのは得意なんだけど、着陸は苦手なんだってば。今まで何回か着陸に失敗して、飛行機や建物を壊したりはしてるんだよね」

「——前言撤回、お前はやっぱり、操縦下手だって！ 着陸とか出来るようになってから、飛行機操縦しろよ！」

ドドンパの言葉を聞いた伴内は、呆れ果てた様に言い放つ。

「そろそろ石林群島上空に入ったから、空鯨を探し始めるとすっか」

「空鯨か……。盗賊団の連中とかも、空鯨を探してるなら、空鯨が石林群島に来るって話、ひよっとしたら本当なのかも知れないな」

何機もの飛行艇を動員してまで、空鯨を探している紅鬍髯団が入手した情報が、ドドンパの情報の元だったという事実が、伴内の中で、空鯨が石林群島に出現するという話の信憑性を高めていた。

「だから、本当だって言ってるじゃんか！ 伴内も一緒に空鯨に乗り込んで、空いろのくれよん手に入れて、金持ちになろうぜっ！ おめーだって、何時までも千風の世話になる訳には、いかないんだろ？」

(何時までも千風の世話になる訳には、いかない……か。確かに、金は稼がないとな)

ドドンパの話を聞いて、伴内は少しの間考え、答えを出す。

「毒を食らわば皿までって奴か……。仕方が無いから付き合ってるよ、空鯨まで」

「それでこそ男だ、伴内！ 男はそうじゃなくっちゃいけねえ！」

嬉しそうな口調で、ドドンパは続ける。

「空鯨みたいな謎の珍しい飛行物体や、空いろのくれよんっていうお宝を目の前にして、そのまま家に帰っちゃうような人生なんて、糞食らえだ！ 冒険無き人生なんざ、死んでいるのと同じだぜい！」

ドドンパの大声が響き渡る雲海の上を、バットサンは飛び続ける。

「二号機に続き、四号機と五番機がドドンパのバットサンの攻撃を受け、風防を破損！」

夜空を飛ぶ、機体に漢字の「一」が黒字で記されている、紅鷗の一号機のパイロットが、無線機から受けた通信内容を、後部座席にいる猫人に報告する。操縦席のパイロットも、後部座席にいる両手に大きな拳銃を手をしている猫人も、女性である。

「風防を破損した三機は、風防を取り除いたものの、長距離飛行は既に不可能と判断し、マタタビ湾に帰還しました！」

「——三機もやられたのか！ どうやらドドンパは、凄腕のガンマンを雇ったらしいね」

後部座席に座っている、二十代後半に見える猫人は、忌々しげに呟く。肌の露出度が多くなるように改造された、真紅のスーツに身を包んだ後部座席の猫人は、赤いショートヘアーをラフに整えている。赤毛の猫人などは存在しないので、髪の毛も尻尾も、赤く染めているのだ。

「ハジキの姐さん、どうします？」

赤いスーツの猫人よりも五歳程若く見える、赤いつなぎを着た猫人が、真紅のスーツの猫人……^{くれない}紅ハジキに、問いかける。一号機に乗る二人の猫人の中で、姐さん扱いされるハジキこそ、紅髑髏団の頭領なのである。

「どうもこうもあるかい！ 二機で空鯨を探すしか無いだろうが！ 今回の情報を買うのに、結構な大金を投資してるんだからね！」

「二機じゃありません、一機です！ 三号機も風防をやられ、帰還しました！」

部下であるパイロットの猫人の報告を受け、ハジキの右眉毛がピクリと震える。
「ペンチ！ 三号機は、どの辺りを飛んでいたんだい？」

赤いツナギを着た猫人……鉄ペンチが、地図とジャイロを見比べながら、バットサンによる攻撃を受けた旨の、三号機からの通信を受けたポイントなどを参考に、大雑把に三号機が攻撃を受けた空域を計算してみる。

「大体、三キロ程北西だと思われませう」

「近いねえ……近いって事は、空鯨を見つけるタイミングも、そんなに違いは無いですか」
ハジキは拳銃を持ったまま、右手の小指を伸ばして、舐める。考え事をする際、右手の小指を舐める癖が、ハジキにはあるのだ。

「白玉婆アの作った最新型の飛行艇……バットサンに、凄腕のガンマンが乗ってる以上、空中戦をやるのは、こっちが不利だ」

「だったら、どうします？」

「空鯨で、ドドンパと凄腕のガンマンを仕留めるよ！」

「でも、空鯨の移動速度と方向にもよりますが、空鯨で活動出来る時間には制限があるんですよ。空鯨が石林群島から離れすぎると、マタタビ湾まで戻れなくなるんですから」

猫街の飛行機の航続距離は、おおよそ千キロメートル強。石林群島は猫街から五百キロ程離れているので、帰りの事を計算に入れば、石林群島から空鯨が離れて、猫街から遠ざかって行くと、ハジキ達は空鯨に辿り着いたとしても、猫街やマタタビ海岸まで戻れなくなってしまうのである。

「空鯨の移動速度は、確か時速五十キロ以下で、速くは無いらしいからね。空いろのくれよんを探しながら、ドドンパ達を仕留める時間くらい、あるだろうよ」

「——だったらいいんですけど」

「とにかく、さっさと空鯨を見つけないと、始まらないって事さ」

「了解！ そろそろ石林群島の上空に入ります！」

ジャイロと地凶……そして眼下に広がる海を見比べながら、ペンチはハジキに紅鷗が目的の空域に辿り着いた事を告げる。ハジキとペンチは辺りを見回して、古い写真でしか姿を見た事が無い、空鯨の姿を探す。

「ハジキの姐さん！ 月って……一つしか無い筈ですよ？」

「当たり前だろ、そんなの！」

呆けた様に、空を見上げながら問いかけるペンチに、ハジキは言い放つ。

「でも、二つあるんですけど……」

ペンチの言葉を聞いて、ハジキも空を見上げる。すると、ハジキの視界に、二つの月の様なものが、飛び込んで来る。

「いや、そんなバカな！ 月が二つある筈が無い、本物は一つだけだ！」

ハジキは目を凝らして、二つの月の様な物を、見比べる。片方は殆ど円形に近い、満月に近い感じであり、もう片方……西の空の雲間に見える方は、半月に近い半円であった。

「月齢は満月に近い筈だから、今夜の月は、ほぼ円形の筈……という事は！」

どちらが本物の月であるのか気付いたハジキは、本物の月では無い、半月の様なものの方を観察する。その半月の様なものが、月光を片面だけに浴びて、片面だけを半月のように輝かせた、巨大な鯨の様な物体である事に、ハジキは気付く。

「——空鯨……空鯨だっ！」

ハジキは、目にした物体の名を呼ぶ。ペンチとハジキが月だと見間違えたのは、空鯨だったのだ。

「半月っぽい……西の方にある奴を目指して飛べ！ あれが空鯨だ！」

「了解！」

空鯨は、低空を飛行していた紅鷗よりも、かなり上空を飛んでいる。ペンチは操縦桿を引き、空鷗を急上昇させる。

雲間に浮かぶ半月の様な空鯨に向かって、紅鷗は急上昇して行く。

雲海の上を滑る様に飛び続けるバットサンの後部座席で、伴内は辺りを見回し、あと一機残されている筈の紅鷗と、空鯨の姿を探す。そして、西側に目をやった伴内の目が、雲海が途切れた、雲の無い西側の夜空に、半月の様に輝いている何かを捉える。

「あれ？ 今夜は満月に近い筈だけど……」

先程、雲海に飛び出た直後、雲海を照らす満月に近い月を、伴内は視認していた。しかし、西側の空で輝いている月の様なものは、半円だったのだ。

伴内は目を凝らして、半月の様に輝いている何かの正体を探る。そして、その正体が、片面だけを月明かりに照らされ、半月の様に輝いて見えている、鯨の様な形状の物体である事を、伴内は見抜く。

無論、その鯨の様な形状の物体が、何であるかという事にも、伴内は気付く。

「——空鯨だっ！ 西の空を見ろ！」

伴内の言葉を聞いたドドンパは、驚いて西の空を見る。百科事典の写真と同じ、空を飛ぶ鯨のような、巨大な飛行物体の姿を、ドドンパは目にする。

「ヒャッホイ！ 空鯨はっけーん！」

ドドンパは操縦桿を操作し、バットサンを右側に急旋回させる。そのまま、バットサンは空鯨に向かって、一直線に飛び始める。

「——でけえ」

数百メートル程まで近付いて、空鯨を目にした伴内は、率直な感想を漏らす。全長五キロを越す飛行物体など、伴内は目にする事自体が初めてだった。

なだらかな曲線を描く、鯨の様なフォルムの白い巨体の上面には、用途不明の様々な人工物が並んでいる。まるで小さな街が、白鯨の上に載っているみたいだなど、伴内は思う。

「前に伯母ちゃんが言ってたんだけど、空鯨は人類が空に作った街なんだってさ」

空鯨上の街並を見下ろしながら、ドドンパは着陸に利用出来そうな、広い道を探す。STOLであるバットサンなら、十分に滑走路として利用出来そうな道や広場らしき場所が、空鯨の上には沢山あった。

「良くもまあ、こんな馬鹿でかいもんが空を飛んでるな。どういう仕組みで飛んでるんだろう？」

「そりゃ、おめえ……空いろのくれよんで飛んでるんだよ」

「空いろのくれよんで、空鯨が飛んでる？」

驚きの声を上げる伴内に、ドドンパは頷く。

「紅鬮団の連中の話だと、空いろのくれよんは、人類が昔……空を飛ぶ為に使ってた道具だか燃料だったから、人類が作った巨大な飛行物体の空鯨なら、中にはきっと、沢山の空いろのくれよんが、あるに違いないんだってさ」

ドドンパの話聞いて、伴内は白玉の話思い出す。空いろのくれよんが、おそらくは地球の重力から物体を解き放つ重力制御物質を、簡便に塗布する道具として開発されたのだろうという、白玉の話。

「重力を制御して飛んでるのか……SFみたいだな」

今現在、伴内が存在する時空にとっては遠い過去であり、生まれ育った時空にとっては遠い未来である、人類が超科学を駆使していただろう時代に、伴内は思いを馳せる。

「あそこがいい！ 降りるよ！」

空鯨の街の、鯨で言えば頭に相当する辺りにある、広場らしき場所を滑走路として利用する事にしたドドンパは、林が隣接している広場に向け、バットサンを降下させて行く。

「着陸……大丈夫なんだろうな、おい？」

ドドンパの着陸技術が未熟であった事を思い出し、伴内は不安げにドドンパに問いかける。

「大丈夫だって！ たまにしか失敗しねーからよっ！」

「たまにでも、俺が乗ってる時に失敗して貰っちゃ困るんだよ！俺はお前みたいに丈夫じゃねえんだから！」

余裕を持った笑顔と口調のまま、ドドンパは着陸作業に入る。バットサンを減速させつつ、操縦桿とラダーを操作して着陸コースに入り、ランディングギア（着陸装置）を作動させて車輪を出し……といった感じで。

バットサンは、スムーズに空鯨の広場にタッチダウン（接地）すると、二度程軽くバウンドした後、広場を減速しつつ滑走し始め、木々を薙ぎ倒しながら、広場に隣接している林の中に突っ込む。ドドンパは、着陸に失敗したのだ。

バットサンのエンジンが、着陸失敗時のショックで破損し、火を吹く。翼が折れ曲がりながら、木々をクッションとして、バットサンは何とか停止する。

エンジンから吹き出た火が、燃料や周囲の木々に燃え広がり、火事になる事を伴内は恐れたが、そうはならなかった。地面から伸びてきた筒状の機械から、白い泡状の消化剤がバットサンとその周囲に散布され、あっという間に火を消してしまったのだ。

「——自動消火システムみたいなもんか？」

火を消し終えて、地面の中に戻って行った筒状の機械を見て、伴内は呟く。バットサンは着地に失敗したのだが、伴内は数箇所打ち身を負っただけで、無事だったのである。

「おー、無事だったみてえだな、伴内！」

気楽な口調で、操縦席にいるドドンパが後ろを振り向き、伴内に声をかけてくる。

「——俺はな。問題なのは……バットサンの方だ」

伴内は折れた翼を指差ししながら、嘆息する。翼が折れ、エンジンが破損しているバットサンは、誰がどう見ても、既に飛行には耐えられない状態だった。

「こりゃ、流石に飛べないわな」

「ドドンパ、お前……一応は白玉さんと血が繋がってるんだから、飛行機とか直せないのか？」

「バカ言うなっつての！ 飛行機を自分で直せるなら、今まで壊した時も自分で直してたっつてば！ 直せないから、修理代を伯母ちゃんに立て替えてもらって、借金が増えまくっちゃったんじゃないか！」

「俺も飛行機の修理なんざ、やり方の見当もつかん」

二人は顔を見合わせ、溜息をつく。

「俺達、ひよっとしたら帰れないんじゃないか？」

冷や汗をかきながら、ドドンパは伴内に問いかける。

「ひよっとしなくても、帰れない。バットサンが無ければ、俺達は飛べないんだから」

「ど、ど、どーしよう？ 猫街に帰れねーよお！」

慌てふためき、操縦席で両手をバタバタと振り回すドドンパを眺めながら、伴内は思考を巡らす。どうすれば猫街に戻れるのかという事について。すると、何とか帰れるかもしれない可能性が、二つ程浮かんで来る。

「——戻れる方法が、二つある」

「ど、どういう方法だ？」

「バットサンには、無線機くらい積んでるよな？」

「一応、積んではいるんだけど……」

「それで、救難信号を出し続けるんだ。そうすれば、ひよっとしたら助けが来るかも知れない」

「それは……無理」

ドドンパは気落ちしたような口調で、呟く。

「無線機、着地の衝撃で壊れちゃったから」

操縦席の左脇にある、何処と無くラジオに似た黒い小箱……無線機はひしゃげてしまい、ケーブルやトランジスタらしきものが、露出してしまっている。ドドンパは無線機のスイッチを弄ってみるが、何の反応も無い。

「——それなら、もう一つの方法に賭けるしか無いか」

「その……もう一つの方法って？」

「空いろのくれよんを探し出して、空いろのくれよんを使って空を飛んで、猫街まで戻るって方法」

「成る程、空いろのくれよんを使えば空を飛べるから、猫街に帰れるって訳か！ 伴内、おめえ頭いいじゃん！」

興奮したような口調で、ドドンパは続ける。

「確か空いろのくれよん一本で、百キロ程の距離を飛べるらしいから、二人分って事で十本以上、空いろのくれよんを探し出せばいいって訳か！」

猫街から空鯨が飛んでいる石林群島までの距離は、ほぼ五百キロ。一人当たり五本の空いろのくれよんが、必要だという計算になる。

「一本で百キロも飛べるんだ……」

「伯母ちゃんが、そんな事を言ってたんだよ。最高速度も時速百キロくらいだって」

(その話が本当なら、一本で一時間かけて百キロメートルしか移動出来ないんだな。必要な分量の空いろのくれよんを手に入れても、猫街まで辿り着くのは大変だ、こりゃ……)

伴内は心の中で呟きながら、嘆息する。

「まあ、ここに本当に空いろのくれよんがあって、俺達がそれを見つけられたらって話なんだけどな」

「あるに決まってるってーの！ そんなじゃ、さっさと空いろのくれよんを、探しに行こうぜ！」

ドドンパは身を乗り出し、伴内の足元にあるリュックを拾い上げて背負う。そして勢い良くコックピットを飛び出すと、空鯨の林に降り立つ。

伴内も、ドドンパの後に続く。空鯨の林の土を踏んだ伴内は、目にしたばかりの巨大飛行物体に自分が立っている事に、少し感動してしまう。

「——それで、空いろのくれよんは空鯨の何処にあるって、紅鬍髯団の連中は言ってたんだ？」

「それはオイラも知らねーんだ！ 紅鬍髯団の連中も、空いろのくれよんが空鯨にあるって事までしか、知らないみたいだったぜ！」

「このバカでかい空鯨の中から、ヒントも無しに探し出さなきゃならないのかよ！」

これから自分がやらなければならない事が、相当に困難である事に気付き、伴内は頭を抱えながら林を後にして、ドドンパと共に近くにある道に出る。無論、空いろのくれよんを探す為に。

「——ドドンパ達も、空鯨に降りたらしいですね」

空鯨の街中……尻尾の辺りを駆け回っていたペンチは、バットサンが空鯨の頭の方に降りて行った光景を見て、ハジキに話しかける。紅鷗一号機は、バットサンの五分ほど前に空鯨に辿り着き、尻尾に近い場所にあった広くて長い道を滑走路として、着陸したのである。

「奴等より先に、お宝を手に入れるよ！」

猫街とは風情が異なる白い街並を見回しながら、ハジキはペンチに命ずる。

「手に入れるといっても、何処にあるんですかねえ？ 空いろのくれよん……」

空鯨に降りたハジキとペンチは、空鯨の街に足を踏み入れ、様々な建築物の中を探し続けていたのだが、空いろのくれよんは見付かる気配すら無かったのだ。

「ドドンパの奴が、情報を掴んでるかもしれないな」

ハジキは少し考えた後、そう呟いた。

「ドドンパが？ あたしらが知らないのに、ドドンパが知ってる訳が無いじゃないですか、姐さん！」

「いや、白玉婆あのバットサンを持ち出してるとして事は、アタシらの情報を盗んだ後、ドドンパは白玉婆あと接触した可能性が高い。つまり……」

「ドドンパは白玉さんから、空いろのくれよんの在り処について、何らかの助言を得ている可能性があるって事ですか？」

ペンチの問いに、ハジキは頷く。ちなみに、ペンチはハジキとは違って、猫街の重鎮である白玉を、「婆あ」呼ばわりは出来ない。

「——とりあえず、ドドンパ達の動きを探るよ！ 凄腕のガンマンの顔も、拝んでみたいしねえ……」

そう言うと、ハジキは空鯨の頭の方に向かって駆け出す。ペンチも慌てて、ハジキの後を追って走り始める。

「何処にいるのーっ！ オイラの空いろのくれよんちゃん！」

大声で空いろのくれよんに呼びかけつつ、空鯨の街に立ち並ぶ建物の間を歩き回りながら、ドドンパは空いろのくれよんを探す。

「呼びかけて返事してくれるのなら、楽だよな」

ドドンパの声を聞きながら、伴内は呟く。二人は既に十分ほど、空鯨の街中を探し回っていたのだが、空いろのくれよんらしき物を、探し出す事は出来ずにいた。

「ぜんぜん見付かんねーよ！ どうしよう、伴内？」

「——闇雲に探し回っても、見付かるもんじゃないな。とりあえず、空鯨に関する情報事態が少なすぎる。空鯨の内部構造図や地図なんかがあれば、その中から、どの辺りに空いろのくれよんがあるか、見当をつける事も出来るんだが……」

「そんな事言っても、空鯨の内部構造図や上にある街の地図なんか、オイラも紅鬚髑団の連中も知らねーよ」

白いブロック状のカプセルを積み重ねたり、並べたりした様な、奇妙な外観の街並を見回しながら、伴内は考え込む。そんな伴内の視界に、街の中央部にある、他の建物の倍ほどの大きさがある建物が映る。明確に他の建物と区別されている、その大きな建物が、空鯨の街で中心的な役割を果たしていた建物なのでは無いかと、伴内は思い始める。

「あそこに行けば、空鯨の構造とかが、何か分るかも知れないな」

「——何でだ？」

「他の建物より明確に大きいし、街の中心部にあるだろ。ひょっとしたら、街の中心的役割……役場みたいな位置付けの建物だったかも知れないじゃないか」

大きな建物に向かって走り始めながら、伴内はドドンパの問いに答える。

「成る程、役場になら地図くらいあるよな」

ドドンパは納得して頷き、伴内の後に続く。

「あれが凄腕のガンマン……人間じゃないのさ！」

物陰に隠れて、伴内とドドンパの様子を窺っていたハジキの言葉に、ペンチは頷く。

「猫街では見ない顔ですね」

「——何か目星でも、ついたらしいな……」

街の中央部に向かって走り出した伴内とドドンパを見て、ハジキは続ける。

「後を追うよ！」

ハジキは伴内達に気付かれぬように、足音を忍ばせながら、伴内達の後を追って走り始める。ペンチを後に引き連れて。

「近くで見ると、でっかいなあ。猫街には無いぜ、こんな高いビル」

目的の建物の元に辿り着いたドドンパは、高さ二百メートル、直径百メートル程の円筒状の白い建物を見上げ、驚きの声を上げる。伴内にとっては驚く程の高さや大きさでは無いのだが、猫街には無い大きさの建物なのである。

「古臭いのか未来っぽいのか、分らないデザインだな……」

高さや大きさに驚くドドンパとは違い、伴内は建物のデザインに感嘆する。古いSF映画に出て来る、何処かロケットに似たフォルムの建物から、古い時代が夢見た未来の様な印象を、伴内は受けたのだ。

「入り口は、あそこか？」

建物の一部に、透明な素材で出来たドアがある事に、伴内は気付く。高さ三メートル、幅十メー

ル程の大きさがある、長方形のドアが。

伴内とドドンパは、ドアの前に駆けつける。すると、ドアは中央の部分から左右に割れ、開き始める。自動ドアが、伴内とドドンパを迎え入れる為に、開いたのだ。

(自動消火システムも生きてたし、自動ドアも開く……。空鯨は基本的に、システムが生きてるんだな)

単に浮遊する為のシステムが生きていて、浮遊しているだけではなく、空鯨のシステム全体が生きているらしいなど、伴内は思う。

「空鯨自体のシステムが生きてるなら、情報システムとかも生きてるだろうから、情報端末とか見つければ、情報が集められるかもしれない」

そう呟いた後、伴内は建物の中に駆け込む。ドドンパも、後に続く。

建物の中は外観同様に、白で統一されていた。まるで最新機器で埋め尽くされた、清潔な病院みたいだなと思いながら、伴内は目的の物……。情報端末を探す。

伴内の目的の物は、すぐに見付かった。広いエントランスホール奥にあるカウンターの上に、白いモニターとキーボードで構成される、洒落たノートパソコンの様な外見の、情報端末だと思えない物を、伴内は発見したのである。

カウンターに駆け寄った伴内は、早速、その情報端末らしき物のキーボードを弄ってみる。すると、ブラックアウト状態だったモニターが輝き始め、文字や画像が表示され始めたのだ。

「やった、生きてる！」

端末のキーボードやタッチペン風の入力デバイスを操作して、伴内は操作方法を確認してみる。情報端末の操作法が、二十一世紀初頭のG U I方式のパソコンと、殆ど変わりが無く、同様の感覚で操作が出来る事に、伴内は安堵する。

「何だ、これ？ 伯母ちゃんの研究所にある機械に、似てるけど……」

ドドンパが情報端末を覗き込みながら、尋ねる。

「コンピューターだよ。白玉さんの研究所にも、凄く旧式の奴があるけど、あれが物凄く高性能になった奴さ」

白玉の研究所には、数台のコンピューターがある。人類の遺産を発掘して修理し、白玉は利用しているのだ。幾ら天才である白玉であっても、コンピューターを完全に自作する事は出来ないのである。

「日本語環境は存在しないみたいだな、残念ながら」

かつての空鯨では、英語しか使われていなかったらしく、情報端末には英語環境しか用意されていないらしかった。英語は得意では無かったのだが、伴内は頑張って、英語環境の情報端末から、必要な情報の入手を試みしてみる。

取り合えず、空いろのくれよんと関係がありそうな英単語で、色々と検索してみるが、それらしい情報は、一切検索されない。筆記用具や空などに関する、無関係な情報ばかりが、検索結果としてリストアップされていく。

(空いろのくれよん関連の単語で検索しても、見付きそうにないな。他に検索の糸口は無いか?)

伴内は自問しつつ、モニターを睨みつける。モニターにドドンパの顔が映っている事に気付いた伴内の頭に、ドドンパが少し前に話していた内容が、蘇って来る。

「紅髑髏団の連中の話だと、空いろのくれよんは、人類が昔……空を飛ぶ為に使ってた道具だか燃料だったから、人類が作った巨大な飛行物体の空鯨なら、中にはきっと、沢山の空いろのくれよんがあるに違いないんだってさ」

(あの話が本当なら、この空鯨における空いろのくれよんの位置付けは、燃料って事になるんじゃないのか?)

そう考えた伴内は、燃料を意味する FUEL という英単語を中心に、検索をかけてみる事にする。すると、検索結果の中には、伴内の興味を引く情報がリストアップされ始める。

「——ラズワルド・リアクター (LAZWARD REACTOR) ……。ラズワルドの意味は分ら

ないけど、リアクターは確か反応炉とかいう意味の筈だから、それっぽい感じじゃないの！」

画面に表示された、空鯨を飛行させているシステムっぽい響きの、ラズワールド・リアクターという言葉、伴内はクリックしてみる。ハイパーテキスト形式になっているので、画面がラズワールド・リアクターに関する情報で、埋め尽くされる。

情報の中には、ラズワールド・リアクターと、その燃料庫に関する情報も、含まれていた。ラズワールド・リアクターと燃料庫の位置情報を記憶した上で、伴内は地図を意味するMAPなどの検索語から、空鯨全体の内部構造図や、地図に関する情報を呼び出す。

「俺達がいる場所は、このセントラルタワーの入り口ロビーか。ここからラズワールド・リアクターがある、ラズワールド・リアクター・ルームに行く為には……」

情報端末を操作して、現在地からラズワールド・リアクターと燃料庫に行くルート調べ、伴内は記憶する。ラズワールド・リアクター・ルームや燃料庫は、伴内達の現在地の真下に当たる、空鯨内部の中央にあるのだ。

「行くぞ、ドドンパ！」

「空いろのくれよんが何処にあるのか、分ったのか？」

「いや、あるかも知れない場所が二箇所、見付かっただけだ。とりあえず、そこに向かってみようぜ！」

「りょーかいっ！」

空鯨の内部構造図に載っていた、セントラルタワーから空鯨の内部に直通しているエレベーターに向かって、伴内達は走り出す。そのエレベーターは伴内達がいるロビーの中にあっただけで、すぐに伴内とドドンパは、エレベーターに乗り込む事が出来た。

透明なパイプ状のエレベーターは、空鯨の情報システムや自動消火システム同様に、現在でも生きている事が、伴内にはすぐに分った。エレベーター室内のドアの右脇にある、タッチパネル式のモニターが、エレベーターを中心とした空鯨の全体図を、表示していたからである。

伴内はタッチパネルに手で触れ、行き先として、先程覚えたラズワールド・リアクター・ルームのある階層を指定する。するとドアは閉まり、二人を乗せたエレベーターは、下降を始めた。空鯨の内部に向かって……。

「ハジキの姐さん、どうします？」

ペンチはうろたえたように、ロビーのエレベーターの前を、行ったり来たりする。ペンチはハジキと共に、伴内とドドンパの後を尾行し、様子を窺い続けていた。

すると、伴内とドドンパがエレベーターに乗って、下に下りていってしまったので、ペンチは伴内達を見失ってしまったのだ。それ故、ペンチはうろたえているのである。

「うろたえるんじゃない、見苦しい！ エレベーターなんだから、あいつらが降りた階は、ちゃんとアレを見れば分るんだよ！」

ハジキはペンチを窘めつつ、エレベーターの右側にあるモニターを指差す。モニターにはエレベーターを中心とした空鯨のマップが表示されていて、エレベーターが何処にいるかを示す、オレンジ色の光点が、下に下がり続けている。

猫街にも一応は、エレベーターがあるビルが存在し、エレベーターの扉の上や左右などには、エレベーターが何階にいるのかを示すゲージがある。ハジキはエレベーターの隣りで、下に向かって移動する光点を見て、その光点が、エレベーターが何階を移動しているかを示す、ゲージと同種のものである事を察したのだ。

モニターの中で、光点が停止する。ハジキは伴内とドドンパが、そこで降りたのだろう事に気付き、その降りた階層を記憶する。無論、自分達がエレベーターに乗って、伴内とドドンパを追いかけ、出し抜く為に。

二百階程を一気に下り、エレベーターは目的の階層に辿り着いた。空鯨の中央辺りに位置する、ラ

ズワルド・リアクター・ルームがある階層に。

エレベーターから降りた伴内は、白い壁に覆われた通路を、記憶を頼りにラズワルド・リアクター・ルームに向かって走り出す。ドドンパも、伴内の後に続く。

目的地はエレベーターの出口から、余り離れていない所にあっただので、伴内とドドンパは、数分で目的地の前まで辿り着く事が出来た。巨大タンカーが格納出来そうな程に広い空間である、ラズワルド・リアクター・ルームの前に。

デパートのショーウィンドウのような、通路の硝子越しに、伴内とドドンパはラズワルド・リアクター・ルームの中を覗き込む。多数のチューブやケーブルが接続された、直径二百メートルを超える、巨大な透明の球体が、伴内とドドンパの目に映る。

球体の中には、青みを帯びた光の粒子が無数に存在し、時計回りに回転しながら、明滅している。情報端末のモニターで、ラズワルド・リアクターの画像情報を目にしていた伴内は、青い光の粒子に満ちた球体が、何であるかをドドンパに教える。

「あれが、ラズワルド・リアクター……空鯨を飛ばしている機械だ」

「——綺麗じゃないか、でっかいびー玉みたいで」

ドドンパが表現した通り、ラズワルド・リアクターは空鯨を飛ばす飛行システムというよりは、綺麗な前衛アートのオブジェのように、伴内にも見えた。伴内は、ラズワルド・リアクターを暫くの間、眺めていたいという誘惑に駆られたが、そんな暇は無いのだと思い直し、目的の物を探し始める。

目的の物……それは、ラズワルド・リアクターの中で反応させられている燃料を貯蔵してある、燃料庫である。情報端末から伴内が得た情報によれば、燃料庫はラズワルド・リアクター・ルームに隣接している筈なのだ。

「確か燃料貯蔵庫は、青い物体で埋め尽くされた、透明な壁に囲まれている巨大なホールって感じだったんだが……」

ラズワルド・リアクター・ルームの周囲に目をやった伴内は、すぐに隣接している燃料貯蔵庫らし

き存在を見つけ出す。ラズワールド・リアクターに接続しているチューブの中でも一際太い、透明なチューブが接続している、球体の右側に見える壁一面が、真っ青だったのだ。伴内達からラズワールド・リアクター・ルームを見て、右側にある壁が。

「あそこだっ！」

伴内は、ラズワールド・リアクター・ルームの右隣にある部屋に向かって、通路を駆け出す。伴内とドドンパは程無く、おそらくはラズワールド・リアクター・ルームの数倍の広さがありそうな広い空間である、燃料貯蔵庫の前に辿り着く。

燃料貯蔵庫の出入り口らしきドアを見つけ出した伴内は、ドアに駆け寄る。ドアには、「L A Z W A R D S T O R E H O U S E」と記されていた。

「ラズワールドの貯蔵庫か……ここが燃料庫で、間違いは無いみたいだな」

伴内は呟きながら、ドアを開けようとする。しかし、ドアには鍵がかかかっていて、押しても引いても、何をやっても伴内には開ける事が出来ない。かなり嚴重な形で、燃料貯蔵庫は許可を受けぬ者の侵入を、防いでいるのだ。

「——やっぱり燃料貯蔵庫とかは、簡単に入れる様には出来てないか」

「空いろのくれよんだ！ 伴内、空いろのくれよんだよ！」

突如、伴内の呟きを遮り、ドドンパが興奮して大声を上げる。ドドンパは透明な壁に貼り付いて、貯蔵庫の中を覗き込んでいたのである。

「見てみろ、伴内！ この中にある青いの、ぜーんぶ空いろのくれよんなんだぜっ！」

ドドンパの言葉を聞いた伴内は、ドドンパ同様に透明な壁に貼り付いて、貯蔵庫の中を覗き込む。貯蔵庫の中には、無数の透明なコンテナが積み重ねられているのだが、壁から五メートル程の所にある、最寄のコンテナの中に、びっちり小さな青い棒状の物が詰め込まれている事に、伴内は気付く。

(確かに、くれよんみたいな形してるな……空色だし)

冷静に視認し続ける伴内の背中を、ドドンパはぼんぼんと叩く。

「おめえ、凄いな！　ほんとにバカ広い空鯨の中から、空いろのくれよんの在り処を、探し出しちまうなんて！　しかも、こんなに沢山！　これでオイラ達、大金持ちだぜ！」

空鯨を飛ばしている飛行システム……ラズワルド・リアクターの隣りにある燃料貯蔵庫には、莫大な量の空いろのくれよんが貯蔵されていた。伴内の推測は、当たっていたのだ。

「喜ぶのは早いって。この燃料庫、かなり嚴重に保護されてるみたいで、ドアが開かないんだ。中に入れなきゃ、幾ら空いろのくれよんが見付かっても、仕方が無いだろ」

「ドアが開かない？　そんなの関係無い！　開かないんだったら、こいつで壊しちまえばいいんだいっ！」

興奮気味の口調で、そう言いながら、ドドンパは背負っているリュックの中から、槌の部分の大きさが枕程の大きさがある、餅つきにでも使えそうな、金属製のハンマーを取り出した。

「うらあああああああっ！」

ドドンパはハンマーを持ち上げてドアに駆け寄ると、ハンマーでドアを叩き始めた。鈍く乾いた衝突音が、ドドンパがハンマーをドアに振り下ろすたびに、通路に響き渡るのだが、ドアは壊れるどころか、傷一つ付く様子さえ無い。

「——ど、ドアを壊せないなら、壁を壊せばいいのさっ！」

ドアが自分にとって、難攻不落であると気付いたドドンパは、少し左側に移動して、透明な硝子にしか見えない壁を、ハンマーで叩き始めた。

「うらうらうらうらっ！　うらああああああああっ！」

ドドンパは必死の形相で壁を叩き続けるが、ドア同様、鈍く乾いた音を響かせるだけで、壁には傷一つ付ける事は出来ない。ドドンパは諦めずに壁を叩き続けるが、流石に五分ほど過ぎた時点で疲れに負け、叩くのを止める。

「な、何で……どうして割れないんだ？　ガラスなのに……」

肩で息をしながら、ドドンパは納得が行かなそうな顔で、呟く。ガラスにしか見えない壁が、ハン

マーで叩き続けても割れない事が、信じられないのである。

「燃料庫やエンジンルームは、誰かが勝手に入ってトラブル起こしたりすると、墜落の原因になったりして危ないから、嚴重にガードされてるんだよ、多分」

「そんなぁ……せっかく空いろのくれよんを見つけたのに、手に入れられないのかよ」

ドドンパは疲れと失意の余り、その場にへたり込んでしまう。

「確かに、参ったな。空いろのくれよんを手に入れないと、帰れないってのに……」

伴内もドドンパの隣りに座り込み、どうすればいいのかと、考え込む。

「——らずわると……か。らずわるとって、どういう意味なんだろうな？」

壁に寄りかかりながら、物欲しげな顔で燃料貯蔵庫の中を覗き込んでいたドドンパは、分らない言葉の意味を、伴内に尋ねてみる。

「何だよ、いきなり？」

「いや、空いろのくれよんに、らずわるとって言葉が書いてあるから、どういう意味なんだろうと思っ
てさ」

ドドンパの話聞いた伴内は、貯蔵庫の中の空いろのくれよんを凝視してみる。ドドンパの言う通り、「LAZWARD」という単語が空いろのくれよんの側面にプリントされている事に、伴内は気付く。

「——おそらくラズワルドは、空いろのくれよんって呼ばれてる物の、正式な名前なんだと思う」

空いろのくれよんを眺めながら、伴内は続ける。

「空いろのくれよんを保存してある場所の名前が、ラズワルド貯蔵庫……空いろのくれよんを燃料としてる反応炉みたいなのが、ラズワルド反応炉な訳だからさ」

「ナルホド……らずわるとは、空いろのくれよんの正式名称なのか」

「まあ、あくまで推測だけどね。さっきの情報端末とかで調べたら、ラズワルドに関する解説とか出て来るのかな？」

自問する伴内の頭に、ある考えが閃く。その考えを、伴内は口にしてみる。

「ひょっとしたら、空いろのくれよん……手に入るかも知れないぞ」

「——本当か？ どうやって壁壊すんだ？」

「いや、ここの壁を壊して、空いろのくれよんを手に入れるんじゃない。空鯨にある、他の空いろのくれよんを探すんだよ」

「そりゃ、空鯨はバカみたいに広いから、他の場所にも空いろのくれよんはあるかもしれないけど、どうやって探せばいいんだよ？」

「さっきの情報端末を使って、空いろのくれよんの正式名称……ラズワールドで検索してみればいいんだよ。そうすれば、空鯨の他の場所にあるラズワールド……空いろのくれよんの在り処が、分るかもしれないし……」

「他の空いろのくれよんの中には、此処の奴と違って、手に入れられる奴があるかも知れないって訳か！」

「そういう事！ さっきの場所に戻るぞ！」

「りょーかいっ！」

先程までの沈滞した空気は、既に二人の間には無い。伴内とドドンパは勢い良く立ち上がると、来た道を全力疾走で戻り始めた。

二十分後……伴内とドドンパは、空鯨の中央層右側面辺りにある、大型格納庫の中にいた。ラズワールド貯蔵庫からエレベーターに戻る途中、ロビーにあったのと同じタイプの情報端末が、通路脇に設えてある事に気付いた伴内は、その情報端末を使ってラズワールドの在り処を、即座に調べた。

すると、ラズワールド・リアクターとラズワールド貯蔵庫以外にも一箇所だけ、多数のラズワールド……空いろのくれよんが存在する事が判明したのだ。その判明した場所こそが、ラズワールド・リアクターに近い階層の右側面にある、大型格納庫だった。

「大型格納庫の中には、飛行機が格納されてるらしいんだ。多分、そのメカも空いろのくれよんを使って、飛んでるんだよ」

そう考えた伴内はドドンパと共に、即座に大型格納庫に駆けつけたのである。

「こんなのが飛行機なのか？ 翼が無いじゃないか！」

サッカー場が五面程取れる広さと、百メートル程の高さがある、オートメーション化が進みすぎた機械工場の様な感じの大型格納庫の中で、空鯨が搭載しているメカを目にしたドドンパは、驚きの声を上げる。

「多分、空いろのくれよんを使って空を飛ぶから、翼がいらないんだよ」

飛行機というよりは、古いSF映画に出て来る、直径二十メートル程の大きさがある。円盤型のUFOのような外観をしているメカを見て、伴内も驚いたように続ける。

「いわゆるアダムスキー型って奴か、こりゃ。まあ、空飛ぶ機械だから、どんな形してようが飛行機だって事には、違いないんだろうけどさ」

空鯨が積んでいる飛行機のデザインに、驚いている場合では無い。伴内とドドンパは手分けして、大型格納庫の中にある、十機程の飛行機を調べ始める。

格納庫内にあった情報端末のお陰で、飛行機の燃料タンクが何処にあるかは、すぐに分った。それ故、二人は全ての飛行機の燃料タンクを、短時間で調べる事が出来た。

しかし、調べた結果は、二人を失望させるものだった。全ての飛行機を調べたのだが、空いろのくれよんを電池的な感覚で差し込む、電池入れ感覚の燃料タンクには、燃料である空いろのくれよんは、残されていなかったのである。

「誰かが昔、開いて持ち出したみたいな感じだな……」

伴内が、そういう感想を抱いたのは、飛行機の燃料タンクのカバーが、全て開いていたり、飛行機の周りに何かを探し回ったかの様に、飛行機のパイロット達が着ていたらしい、ウエットスーツ風の白いパイロットスーツや、様々な飛行機の内装部品などが、乱雑に散らばっていたからである。そん

な飛行機の周りの光景が、テレビドラマなどで、泥棒が荒らしまわった後の部屋の様に、伴内には見えたのだ。

「オイラ、飛行機の中を探してみる！」

ドドンパはタラップを上ると、開け放されたままになっている、一機の飛行機のドアから、飛行機の中に侵入する。無論、空いろのくれよんを探すのが第一の目的なのだが、飛行機好きのドドンパは、人類の遺産の飛行機にも興味があったのだ。

伴内も空飛ぶ円盤型の飛行機に興味があったので、ドドンパの後を追って、飛行機の中に乗り込む。直径七メートル程の広さがあるコックピットの中は、ドアから差し込む光以外に光源が無いので、暗い。

突如、コックピットの中が中が明るくなる。ドドンパがリュックの中から懐中電灯を取り出し、コックピットの中を照らし始めたせいである。

「うわ……何か飛行機の操縦する部屋っていうよりは、伯母ちゃんの研究室を凄くした感じじゃん！操縦桿とか無いのに、どうやって操縦すんのかな？」

モニターや計器、キーボードなどの入力デバイスに埋め尽くされたコックピットの中を見て、ドドンパは率直な感想を口にする。

「そんなの、俺にも分らないよ。俺がいた時空には、こんな空飛ぶ円盤みたいな飛行機、存在しないし」

ドドンパは空いろのくれよんを探しながらも、とりあえず飛行機の中にある四つの座席の中の一つに、座ってみる。そして、座席の下や周囲などを確認してから、ドドンパは不思議そうに首をかしげる。

「どうかしたのか？」

「いや、パラシュートが見当たらないんだよ。普通はシート付近にある筈なんだけど」

「座席ごと脱出させる緊急脱出システムとか、積んでるんじゃないの？ 座席ごとパイロットを空に

射出するから、パラシュートは座席に収納されてるんだよ」

「座席にパラシュートが収納されてる？」

そう言いながらドドンパは、白くて飾り気の無い座席の感触を確かめる。

「こんな柔らかいソファみたいな座席に、パラシュートが収納されてるとは思えないんだけど。畳んで小さくしたパラシュートは、結構堅いんだぜ」

「現在の猫街よりも、空鯨とかを使っていた頃の人類の方が、技術水準は圧倒的に高いから、畳んでもソファみたいに柔らかいパラシュートだって、作れた……ん？」

ふと、伴内の頭に、ある考えが閃く。

(そうだ、猫街や俺がいた時空より、空鯨で使われてる技術水準は遥かに高いんだ。そもそも、空いろのくれよんみたいな、空鯨を飛ばしたり、塗るだけで空を飛ぶ事が出来る物質を作り、使っていたんだから……)

空鯨や円盤型飛行機の燃料としてだけでなく、空いろのくれよんは身体に塗るだけで空を飛べる事を、伴内は思い出す。そして、塗るだけで空を飛べる空いろのくれよんを使えば、パラシュートなど必要無いだろう事に、思い至る。

「そうか！ パラシュートなんていらないんだ！ 空いろのくれよんがあれば！」

伴内は手近な座席に駆け寄ると、しゃがみ込んで座席を調べ始める。座席のシート部分から土台の部分に至るまで、念を入れて。

「——何やってんだ、伴内？」

「パラシュートの代わりに空いろのくれよんが、座席に装備されてると思ったんだけど、空いろのくれよんを装備してそうな部分が、見当たらないんだよな」

パラシュートの代わりに空いろのくれよんを脱出時の飛行や降下に使用していたのかもしれないと考えた伴内は、座席の何処かに空いろのくれよんが装備されているだろうと考えたのだ。しかし、座席からは空いろのくれよんの実物どころか、空いろのくれよんが装備されていたらしき形跡すら、見

付けられなかった。

(座席じゃないのか。だったら……)

座席に装備されていないなら、他に考えられる可能性は、伴内には一つしか思い浮かばなかった。「パイロットスーツだ！　パイロット達はパイロットスーツのポケットとかに入れて、常時携帯しておいたんだよ、空いろのくれよんを！」

「パイロットスーツって、格納庫の床に何着か落ちてた、白いウエットスーツみたいな奴か？」

ドドンパの問いに、伴内は頷く。

「ドアから脱出しようが座席ごと射出されようが、パイロットスーツに装備して携帯しておけば、自分で空いろのくれよんを自分に塗って飛べばいいんだから、安全に脱出出来るんだ！」

伴内は飛行機の外に飛び出して、先程目にした格納庫の床に落ちていたパイロットスーツの元に駆け寄り、拾い上げると、調べ始める。すると、パイロットスーツの左胸のポケットに、ちょうど空いろのくれよんが二本収納できる、「PORTABLE LAZWARD」と記された透明なケースが入っていた。ケース自体は空だったのだが。

「携帯用ラズワルド……空いろのくれよんのケース！　やっぱり、パイロットスーツに装備してあったんだ、空いろのくれよんは！」

空いろのくれよん自体は発見出来なかったが、次に探し回るべき物が、伴内達にとって明確になった。

「ドドンパ！　格納庫の中にあるパイロットスーツを、片っ端から掻き集めるぞ！」

「りょーかいっ！」

伴内とドドンパは、格納庫の各所に散り、パイロットスーツを探して一箇所に集め始める。格納庫の床に落ちていたものから、格納庫の各所にある倉庫の中や、飛行機のコックピット内にあるロッカーの中からまで、三十分程の時間をかけて、トータルで二百着を超えるパイロットスーツを、伴内達は掻き集める事が出来た。

「多分、格納庫にあるパイロットスーツは、これで全部だと思うぜ」

息を切らしながら、ドドンパは傍らにいる伴内に話しかける。

「——次は、集めたパイロットスーツの全てのポケットを、念入りに調べまくるんだ」

左胸のポケットに仕舞うのが基本だったのだろうが、パイロットによっては他のポケットに仕舞う癖があったかも知れない……。そう考えた伴内は、左胸以外の他のポケットまで含めて、念入りに調べてみる事にしたのである。

早速、伴内とドドンパは、白い山のように積まれたパイロットスーツを調べ始める。一着ずつ、念入りに。

しかし、パイロットスーツからは、空いろのくれよんの空ケースは見付かるのだが、空いろのくれよん自体は、全然見付からない。調べ終わったパイロットスーツが、十着……二十着と山積みになれ、十分ほどの時間が、沈黙のまま過ぎ去る。

次第に、伴内とドドンパの間に、重苦しい空気が漂い始めた時、突然、ドドンパが驚いた猫の様な叫び声を上げた。

「にゃあーっ！」

「な、何だよ、いきなり？」

いきなりの奇声に驚いて尋ねる伴内より、尋ねられたドドンパの方が驚いた顔をしていた。ドドンパは驚きの余り、普通の言葉が出てこないで、猫の鳴き声のような声を発したのだ。これは猫人特有の習性の一つなのだが、特にドドンパのような先祖帰りの猫人に、強く現れる場合が多い。

「にゃっ！ にゃれ……じゃなくって、これを見ろよ、伴内！」

驚き慌てているドドンパの左手にはパイロットスーツが、そして右手には、青い二本の空いろのくれよんが収納された、透明なケースが握られていた。

「パイロットスーツの、お尻のポケットに入ってたんだ！ 空いろのくれよんだよ！」

二人の間に漂っていた重苦しい空気が、一気に吹き飛んでしまう。とうとう二人は、本物の空いろ

のくれよんを手にする事に、成功したのだ。

「まだパイロットスーツは一杯残ってる！　きっとまだ沢山、空いろのくれよんがある筈だっ！」

気合を入れなおした伴内は、猛然とパイロットスーツを調べ始める。

「うっひゃあー！　これでオイラ達、大金持ちだぜい！」

ドドンパは嬉しそうに、空いろのくれよんのケースを持ったまま小躍りし始める。

「おいおい、金持ちになれる事より、猫街に帰れるかもしれない事を喜べよ！　手に入った分量の空いろのくれよんで、何処まで飛べるか分らないんだからさ！」

「あ、そうだった……。確か一本で二十キロくらいは飛べる筈だから、一人当たり五本から六本は無いと、猫街にすら帰れないや」

小躍りするのを止め、ドドンパはガックリと肩を落す。だが、空いろのくれよんの現物を手にしているドドンパの落ち込みは、長くは続かない。ドドンパは即座に元気を取り戻し、猛然とパイロットスーツを調べる作業を再開する。

その後、二十分程かけて全てのパイロットスーツを調べ上げた二人は、七ケース……合計十四本もの空いろのくれよんを、入手する事に成功した。左胸のポケットだけでなく、他のポケットまで念入りに調べるべきだという伴内の狙いは、的を射ていた。見付かった空いろのくれよんのケースは全て、左胸以外のポケットから見付かったのだ。

左胸のポケットからは、多数のケースが見付かったのだが、全て中身は空っぽだった。その事から、伴内は誰かが既に、パイロットスーツから空いろのくれよんを漁ったのだが、その漁った者は、左胸のポケット以外を調べなかったのだろうと推測する。

「これだけ空いろのくれよんがあれば、幾らなんでも大丈夫だぜ！　猫街まで飛んで帰っても、一人当たり最低でも一本は余るっ！」

おおはしゃぎしながら、ドドンパは空いろのくれよんのケースを、リュックの中に放り込む。

「これでオイラ達は、大金持ちになれるんだぜっ！」

「そう上手くは行かないよ、馬鹿猫のドドンパっ！」

突如、アルト気味の鋭い声が、格納庫中に響き渡る。聞き覚えの無い声を耳にした伴内は、声が聞こえて来た方向に目をやる。

伴内達から五十メートル程離れた所にある円盤状の飛行機の上に、声の主はいた。肌を多く露出させた、真紅のスーツに身を包んだ猫人……ハジキである。

両手に持った自動拳銃の銃口をドドンパに向け、ハジキは威嚇している。

「大金持ちになるのはお前達じゃなくて、アタシ達紅鬍髯団さ！」

そう言い放つハジキの隣りでは、右手にリボルバー式の拳銃を持ち、何故か左手にペンチを持っている赤いツナギの猫人……ペンチが、ハジキの言葉に頷いている。ペンチの拳銃の銃口は、正確に伴内を狙っていた。

拳銃で狙われている事に気付き、伴内の全身の肌が粟立つ。

「ハジキにペンチ！ 何でおめーらが、こんなところにいるんだよ？」

驚きの表情を浮かべながら、ハジキに問いかけるドドンパの言葉を聞いた伴内は、ペンチを持っている方がペンチであり、持っていない方……おそらくはリーダー風の猫人の方が、ハジキである事を、何となく察する。

「空いろのくれよんを手に入れる為に、決まっているじゃないか！」

ハジキは勝ち誇った様な口調で、続ける。

「こんなだっ広い空鯨の何処に、空いろのくれよんがあるか、皆目見当がつかなかったんでね！ お前達が探し出した奴を、奪い取る事にしたのさ！」

「オイラ達の後を、つけていたのか！」

「そうだよ。最初はドドンパ……お前が、白玉婆あから何か情報を得ているかも知れないと思ったんでね、お前達の方が先に、空いろのくれよんを探し出すんじゃないかと思って、お前達の後をつけたんだが……違ったみたいだね」

そう言いながら、ハジキは視線をドドンパから伴内に移す。

「——そっちにいるガンマンの人間の方が中心になって、空いろのくれよんを探し出していた感じに見えたからな」

「ガンマンって、俺の事か？ いや、俺はガンマンなんかじゃないんだけど……」

「風防を撃ち抜いて、ウチの紅鷗を四機、マタタビ海岸に戻さなきゃならない羽目にさせたのは、アンタだろう？」

ハジキは左手に持った拳銃の銃口を伴内に向けつつ、伴内が銃を手にしていない事を視認する。

「ドドンパよりも厄介な相手みたいだが、銃を持っていないなら、どうって事は無いけどねえ！」

「俺が使った武器が銃だと、勘違いしてるのか……」

誰にも聞こえない程の小声で、伴内が呟いた直後、銃声が格納庫の中に響き渡る。ハジキが引金を引き、拳銃をぶっ放したのだ。銃弾は伴内の右脇を掠め、伴内の背後にある、清涼飲料水の自動販売機に似た機械に着弾する。

その機械には、格納庫の何かを操作する為のものらしいコントロールパネルが付いていて、弾丸はコントロールパネルを直撃したのだ。

「危ねえな！ 当たったら死んじゃうだろうが！」

伴内は恐怖心を振り払うかのように、努めて威勢の良い声を出す。しかし、威勢の良いのは声だけであり、身体の方は恐怖心で、小刻みに震えている。

その震えを、ハジキは見逃さない。強がっていても、銃撃による脅しが伴内には有効である事に、ハジキは確信を持ったのだ。

もっとも、威嚇であれ実際に銃を撃たれ、弾丸が身体を掠めたのだから、恐怖心を感じるのは、当たり前前の事でしか無いのだが。

「さあ、鉛弾をブチ込まれたくないんだったら、空いろのくれよんが入ったリュックを、こっちに渡しな！」

煽るような口調で脅しの台詞を口にしながら、ハジキは続け様に引金を引く。銃弾が次々と伴内を掠めて、伴内の背後にあるコントロールパネルを直撃する。

ハジキが合計六発の弾丸を、コントロールパネルに撃ち込んだ直後、異変が発生する。突如、稲妻の如きスパークが走ったかと思うと、コントロールパネルが、小型の爆弾が炸裂するかのような音を立てて、爆発したのだ。

伴内は悲鳴を上げながら、爆風で吹っ飛ばされ、リュックの上に倒れ込む。

「伴内！」

ドドンパは伴内の元に駆け寄ろうと、パイロットスーツの山を登り始める。ドドンパは調べ終えたパイロットスーツの山を挟んで、伴内の反対側にいたのだ。

「動くな、ドドンパ！」

ハジキは警告を発しつつ、ドドンパに向けていた右手の拳銃の引金を引く。銃声が響き、オレンジ色の銃弾が、ドドンパの足元にあるパイロットスーツの山に着弾する。

ドドンパはパイロットスーツの山の上で、急停止する。怯えと焦りが混ざり合った、複雑な表情を浮かべながら。

そんなドドンパの姿を見て、ハジキは勝ち誇り、高笑いする。

「いいざまじゃないか、ドドンパ！ アタシ達が大枚払って手に入れた、お宝の情報を盗んで、せっかく空鯨まで来たのに、無駄だったね……え？」

ハジキが話している途中、更なる異変が発生する。コントロールパネルが爆発した事により、新たな異変が発生したのだ。

いきなり、伴内やドドンパの背後にある大型格納庫の壁が、観音開きの戸の様に、勢い良く開き始めたのだ。開き始めた格納庫の壁は、空鯨の右側面……右舷の壁を兼ねた、格納庫のハッチだったのである。

先程、ハジキが撃ちまくった弾丸が着弾したのは、格納庫のハッチを操作する為のコントロールパ

ネルだった。コントロールパネルは銃撃を受けて、異常動作を始めてしまい、格納庫のハッチが開き始めてしまったのである。

開いたハッチの向こう側は、現在……高度二千メートル程の夜空。そして、本来は気圧が低い高高度の空中でハッチを開く場合は、格納庫内を減圧してから開くのだが、今回はコントロールパネルが銃撃を受けた事により、減圧処理無しにハッチを開いてしまったので、格納庫内の気圧は外の空よりも、高かった。

気圧に差がある別々の空間が繋がった場合、空気は高い方から低い方に勢い良く流れる。つまり、格納庫内から夜空に向かって、突風の如く強い空気の流れが、発生する事になったのだ。

不安定な足場である飛行機の上に立っていた上、拳銃やペンチを持っていたせいで両手が塞がっていて、何かにつかまる事が出来なかったハジキとペンチは、呆気なく突風に吹き飛ばされてしまう。ハジキとパンチは悲鳴を上げながら、格納庫の床の上を転がり、ほんの数秒で全開に近い状態になったハッチの方に、吹っ飛ばされて行く。

無論、ハジキとペンチだけでなく、格納庫内の様々な物が、吹き飛ばされてしまっている。山積みになっていたパイロットスーツなどは、既にハッチの外に飛ばされて、夜空を花びらのように舞っている。

「わわわ！ こっちくんなってーの！」

自分の方に吹っ飛ばされてくるペンチを見て、ドドンパは慌てふためく。身体が大きく体重が重いドドンパは、突風で五メートル程押し流されたものの、何とか足を踏ん張り、踏み止まっていたのだ。

そこに、ペンチが勢い良く転がって来たのである。ドドンパは避けようとしたが間に合わず、大柄なペンチの体当たりを食らって吹っ飛ばされ、ペンチと共に悲鳴を上げながら、床を転がり始めてしまう……大きく口を開けた、ハッチに向かって。

「ドドンパ！」

床に伏せていたせいで、突風の影響を余り受けずに済んだ伴内は、ペンチの巻き添えとなって吹っ

飛ばされたドドンパの姿を目にして、叫ぶ。伴内の左手には、倒れた際に掴んだリュックがある。

「ペンチ！」

今度は、ハジキが子分の名を叫ぶ。ハジキはペンチと共に吹っ飛ばされたものの、拳銃を手放した上で、何とか床を這っていた一本のケーブルにしがみ付く事に成功し、開いたハッチの三十メートル程手前で、何とか踏み止まる事に成功したのである。

しかし、踏み止まれなかったパンチと、パンチの巻き添えを食らったドドンパは、あっと言う間にハッチの外に吹っ飛ばされ、夜空の向こうに消えてしまった。

「ペーんチッ！」

ハジキの悲痛な叫び声が、格納庫だけでく夜空にまで響き渡る。この高さから夜空に放り出されてしまえば、猫人に待っているのは確実な死である。身体が他の猫人に比べて桁違いに頑丈なドドンパですら、それは変わらない。

自分を慕う子分の命の危機を目の当たりにしながら、ハジキは何も出来ない。そんな自分に対し、ハジキは悔しさと情けなさの余り、歯噛みする。

同じ瞬間、伴内は必死で頭を巡らせていた。落ちた二人の猫人を、助ける方法が無いかという事について。

伴内は意外な事に、助ける方法を即座に思い付いた。自分が手にしている、十数億円分のお宝を投入すれば、ドドンパとパンチの命を助けられるかもしれないアイデアが、伴内の頭に閃いたのだ。

(ただ、これが本当は空いろのくれよんじゃなかったり、空いろのくれよんが、塗るだけで空を飛べるアイテムじゃなかった場合、助けるどころか俺まで死ぬんだよな……)

一瞬、伴内の頭を不安がよぎる。ラズワールドが本当に空いろのくれよんであるかどうかは、現時点では確固たる証拠がある訳ではない。そして、空いろのくれよんが身体に塗るだけで空を飛べるという事も、伴内はドドンパなどの猫人から、話として聞いただけなので、確証は無いのだ。

不安感が心の中で、急激な勢いで膨張し始め、伴内は怯みそうになる。

「ペンチッ！」

子分の身を案じるハジキの悲痛な叫び声が、伴内の耳に届く。敵対していた相手とはいえ、親しい者の命の案じる者の声が、伴内の怯みかけた心を揺さぶる。

(——怯えてる場合じゃねえ！ 助けられるかもしれない連中を、見殺しにするつもりかっ！)

怯みそうになる心を奮い立たせようと、伴内は心の中で叫び続ける。

(そんな真似して、この先の人生、気分良く生きていける筈が無い！ そんな人生、死んでいるのも同じじゃねえのさ！)

伴内は覚悟を決め、リュックの肩ベルトに両腕を通して、背負わずに身体の正面で抱えると、頭の上にはずらしてはいたが、装着したままだったゴーグルを下げて目を保護しつつ、立ち上がる。そして、先程よりは勢いが衰えつつある風に背中を押されながら、開ききったハッチに向かって、全力で駆け出す。

「助ける義理はねえけど、ドドンパのついでにペンチってのも助けてやるから、感謝しやがれっ！」

ハジキに声をかけながら、ダッシュする伴内は、すぐにハッチの所まで辿り着くと、そのまま勢い良く夜空に向かってダイブした。

「な、何を？ アンタ何やってんのよ？」

いきなり夜空にダイブした伴内を見て、ハジキは驚き、狼狽する。そんなハジキの視界から、あっという間に伴内は消え去る。ドドンパやペンチ同様に地球の引力に引かれ、夜空を墜落して行ったのである。

冷たい夜空の空気が肌に突き刺さるが、そんな事は今の伴内にとっては、些細な事でしか無い。ドドンパとペンチを助ける為に、大空を自由落下している最中の伴内には、他に気にしなければならない事があるのだ。

(あいつら、どの辺にいるんだ?)

ゴーグルのグラス越しに眼下を見下ろしながら、伴内はドドンパとペンチを探す。墜落しているというよりも、風を受けて体が吹き上げられている様な錯覚を受ける程に、強い空気抵抗を受けている伴内は、ゴーグルを着けっぱなしにしている、良かったなと思う。

伴内にとって運が良かった事に、辺りに雲は無い。ドドンパとペンチが落下した空域が雲に満たされていたのなら、伴内には二人を発見する事は不可能だっただろうからだ。

遙か下方には、真っ黒な夜の海が広がっている。その黒い海を背景とした夜空で、黒い影と赤い影を、伴内は目を凝らしながら探し続ける。

伴内は左手にパチンコの柄を握り締め、左手には握力で砕いた、四本の空いろのくれよんの破片が握られている。伴内は空いろのくれよんをパチンコの弾として撃ち出して、ドドンパとパンチに当てるつもりなのだ。

空いろのくれよんが当たれば、掠るにせよ直撃するにせよ、空いろのくれよんの色が、確実にドドンパとペンチに付着する。そうすれば、ドドンパもペンチも飛行能力を得るので、助かる事になる。

自ら落下しながらドドンパ達を追いかけつつ、得意とするパチンコで空いろのくれよんの弾を撃ち込んで、ドドンパ達に飛行能力を与えるというのが、伴内の頭に閃いた、ドドンパ達を助ける方法だったのだ。ドドンパ達を助けた後に、伴内が空いろのくれよんを自分の身体に塗って、自分自身の落下も止めるつもりである事は、言うまでも無い。

ちなみに、伴内自身が空いろのくれよんを使って飛行能力を得ず、自由落下しながらドドンパ達を追いかけているのは、空いろのくれよんによって得られる飛行能力での最高速度が、ドドンパから時速百キロだと聞いていたからだ。中学の理系科目で、自由落下時の速度は時速二百キロから三百キロ程だと習った事を、伴内は記憶していたので、時速百キロでは、自由落下するドドンパ達から距離が離されるだけだと、伴内は考えたのである。

自由落下状態に入った数秒後、伴内は早くも目標の一人を視界に捉えた。最初に見付かったのは、黒い影よりは見つけ易い赤い影の方だった。大雑把な目測で、五百メートル程下方を落下して行く赤

い小さな人影を、伴内の目は捉えたのだ。

(ペンチか！ 黒いドドンパよりは赤いペンチの方が、見つけ易いな！)

空いろのくれよんの欠片を一つ、弾として装填した上で、伴内はゴムを伸ばして狙いを定める。しかし、幾ら何でも距離が遠過ぎる。

(もう少し近付かないと、当たらない！ でも、どうやって?)

自問する伴内の頭の中に、スカイダイビングを扱った番組を見た際の記憶が蘇る。うつ伏せの状態と比較的ゆっくりと落下していたスカイダイバーが、落下しながら姿勢を制御し、頭を真下にして空気抵抗を減らし、ミサイルのように高速で落下していた事を、伴内は思い出す。

(あんな感じで頭から落下して行けば、間合いを詰められるかも……)

伴内は早速、その考えを実行に移すべく、反動をつけて身体を前回りに回転させて、頭を真下にする。すると空気抵抗が一気に減った伴内は、落下速度が急激に上昇し、ミサイルの如き勢いで、夜空を落下し始める。

「だああああああああああああっ！」

叫び声を上げながら、高速で落下し続けた伴内の視界で、どんどんペンチの姿が大きくなって行く。パラシュートによる降下経験があるペンチは、伏せの姿勢（ベリーフライという降下姿勢）で落下速度を抑えながら墜落していたので、空気抵抗を減らして落下して来た伴内との間合いが、どんどん詰まっているのだ。

(こりゃ、すぐに迫り着いちまう！ 落下速度を抑えないと！)

伴内は必死で手足をバタつかせて、伏せの姿勢に戻ろうとする。しかし、スカイダイビング経験の無い伴内は、高速で落下しながらの姿勢制御に手間取る。

じたばたしながらも、何とか伴内がうつ伏せの姿勢に戻った時、既に伴内はペンチを追い抜き、数十メートル程、ペンチよりも下に移動していた。

「ガ、ガンマンの人？」

驚いたのは、ペンチの方である。いきなり右側をすり抜け、伴内が高速で落下して来たのだから、驚くのは当たり前だといえば、当たり前なのだが。

伴内は身体を回転させ、仰向けになってペンチを見上げる。ペンチは伴内の左上……七十メートル程の所にいた。

（もう少し、間合いを詰めた方がいいかも）

そう思いつつも、今の自分では細かい間合いや方向の調整など、不可能に近いだろうと思い、伴内は今の間合いのまま、ペンチを狙う事にする。

「ペンチとか言ったな？」

伴内は出せる限りの大声で、ペンチに語りかける。空気抵抗の風圧のせいで、声は著しく聞き取り難い状態なのだが、何とかペンチには伴内の声が届いたらしく、両手を使って頭上に丸を作るペンチの姿が、伴内の目に映る。

何かをペンチは叫んでいるらしいのだが、伴内に声は届かない。言わば風上である伴内からの声は、ペンチに届き易いのだが、風下にいるペンチの声は、風上である伴内に届き難いのだ。

「今から空いろのくれよんを撃つ！ 当たれば良し！ 当たらなくても弾をつかめたら、自分で自分に塗れ！ そうすれば、お前は空を飛べる！」

ペンチは再び、了解という意志を伴内に伝えるべく、両手で丸を作る。丸を作った後、ペンチは自分の右方向を指差す。

伴内はペンチが指差した方向に、目をやる。すると、その方向……ペンチと殆ど同じ高さなのだが、ペンチの右側百メートル程の辺りを、伏せの姿勢で落下している黒い影……ドドンパの姿が、伴内の目に映る。

「ドドンパ！」

もう一つの目標を発見した伴内は、嬉しそうに目標の名を叫ぶ。叫び声が届いたのだろう、伴内の存在に気付いたドドンパは、落下しながら伴内に手を振る。

「おめーは飛ばされてなかっただろ？ 何で落っこちて来てるんだよ？」

「お前とペンチってのを、助けに来てやったんだよ！ 後でお前にも、空いろのくれよんを撃ち込んでやる！ 少し待ってろ！」

「——りょーかいっ！ た、助かったぜ、伴内！」

囁き声程の大きさしかないドドンパの音が、伴内の耳元に届く。普通の猫人であるペンチに比べて、相当に大きな声を出せるドドンパの声は、ペンチより離れていても、伴内の耳元まで届いたのだ。

伴内は目線をペンチに移し、空いろのくれよんの欠片を弾としてパチンコに込めると、ペンチに狙いを定めてゴムを伸ばし、撃つ。月明かりを浴びて青白く輝きながら、空いろのくれよんの欠片はペンチに向かって、流星の様に飛んで行く。

しかし、高速で落下しつつ、激しい空気抵抗の邪魔を受けながらでは、如何に伴内のパチンコの技量が高くても、簡単に目標に当たるものではない。青白く輝く弾は、ペンチから大きく外れて、ペンチの後方に消え去って行く。

(想像以上に空気の流れて弾道が狂うし、弾の比重が石よりも軽いから、狙い難い！)

伴内は舌打ちしつつ、空気の流れや弾の重さを考慮し、次々と空いろのくれよんの欠片を、ペンチに向かって放ち続ける。しかし、空いろのくれよんの欠片は青白い光りの軌道を描くだけで、ペンチに当たる事は無い。

(一ケース使い切っちゃまったか……)

一ケース……つまり二本の空いろのくれよんを、伴内は使い切ってしまった。伴内はリュックの中に手を突っ込み、二つ目のケースを取り出すと、ケースから出した二本の空いろのくれよんを折り、六個の欠片を作り出す。

伴内は即座に、ペンチへの狙撃を再開する。次々と放たれる青い流星の如き空いろのくれよんの欠片は、次第にペンチの近くに届き始める。伴内は落下しながらの空いろのくれよんを使った狙撃に、対応し始めているのである。

二つ目のケースを投げ捨てた伴内は、三つ目のケースから取り出した空いろのくれよんを、六つの欠片に変える。

「当たれっ！」

伴内は続け様に、空いろのくれよんの欠片を撃ち出し続ける。青白い光の緩い軌道を夜空に描き、空いろのくれよんの欠片はペンチに迫る。今までの二ケース分よりも、更にペンチに近付いては、欠片はペンチを通り過ぎて虚空へと消える。

しかし、三ケース目の最後の一発は、虚空へ消え去る事は無かった。うつ伏せで落下し続けるペンチの胸の辺りを、直撃したのだ。

青白い光りの尾を曳きながら、ペンチの胸を直撃した空いろのくれよんの欠片は、ペンチの胸の上で弾けとんだ。青白い光りの粒子が身体中に飛び散り、ペンチを青白く染める。

すると、驚いた事にペンチの落下速度が、まるでパラシュートを開いたかのように、どんどん低下し始める。そして、ほんの数秒でペンチは空中で停止する。

「成功……したんだな！」

どんどん遠ざかって行く、青白い光を放っているペンチの姿を視認した伴内は、自分の目論見が成功した事を察する。落下する自分から、急速に遠ざかって行く様に見えるという事は、ペンチの落下が停止した事を示しているのだ。

「だったら、次はドドンパだ！」

伴内はドドンパがいた方向に目をやる。しかし、先程までいた辺りに、ドドンパの姿は無い。伴内は慌てて、ドドンパの名を叫ぶ。

「ドドンパ、何処に行った？」

「——此処だ、伴内！」

先程よりも、少しだけ大きな声が、伴内の耳元に届く。伴内は声がする方向……伴内から左上百メートル程の辺りを見て、ドドンパの姿を発見する。

「近付いた方が、狙い易いだろうと思ってなっ！ おめーがペンチを撃ってる間に、少しずつ移動して、距離を詰めておいたぜっ！」

ドドンパはスカイダイビングの経験を生かし、伴内との間合いを詰める事に、成功していたのだ。「でかした、ドドンパ！ そこから動かないでくれよ！」

伴内は四つ目のケースをリュックから取り出し、空いろのくれよんをパチンコの弾に変える。そして、ドドンパに狙いを定めると、次々と空いろのくれよんの弾を放ち始める。

青白い光の尾を曳き、弾は次々とドドンパに向かって飛んで行く。しかし、何れの弾もドドンパの左脇を掠めて、虚空へと消える。

「もーちょい右！」

ドドンパから見れば右であるが、伴内から見れば左である。伴内はリュックから五つ目のケースを取り出して、六発の空いろのくれよん製の弾を作り上げる。そして、先程よりは左側を狙って、伴内は次々と弾を放つが、全てドドンパの周囲を掠めるだけで、当たらない。

伴内は焦りながら、六つ目のケースに収納されていた空いろのくれよんを弾に変えて、ドドンパを狙撃し続ける。しかし、矢張り弾はドドンパに当たる事は無かった。

「早く当ててくれよ！ もう石林群島の島が見えるくらいの高さまで、落ちて来てるんだってばー！」

情け無い……怯えた感じのドドンパの声が、伴内の耳に届く。ドドンパは海を背にして夜空を見上げているが、ドドンパは夜空を背にして海を見下ろしている分、どの辺りまで自分達が落下しているかという事に関しては、伴内より敏感なのだ。

「——あと一ケース、これが最後か……」

伴内は焦りの表情を浮かべながら、七つ目のケースをリュックから取り出し、二本の空いろのくれよんを、六つの欠片に変える。そして一つの欠片をパチンコに込めると、ドドンパを狙い、ゴムを引き伸ばす。

（最後のケースなんだ！ 頼むから当たってくれ！）

祈りを込めながら、これまで以上に念入りに狙いを定め、伴内はドドンパを狙い撃つ。一際青白い光の尾を曳きながら、流星のように飛んで行った空いろのくれよんの弾は、黒装束に身を包んだドドンパの股間を直撃して、弾け飛ぶ。

「みぎゃあああああああああっ！」

ドドンパの絶叫が、夜空に響き渡る。他の猫人より遥かに頑丈なドドンパとはいえ、パチンコで男子の弱点である股間を撃たれたら、無事では済まない。

全身に空いろのくれよんの粒子を浴びて、全身を青白く輝かせながら、ドドンパは空中でのた打ち回る。空中でゴロゴロと転がりながら、苦しげに呻き続ける。

そんなドドンパの姿が、どんどん伴内の視界では小さくなっていく。落下し続けている伴内の視界の中で、姿が小さくなっているという事は、パンチの時と同様に、ドドンパも空中でブレーキをかけたかのように、落下を止めつつあるのだ。

「——よっしゃあ！」

ドドンパの狙撃に成功した事を確認した伴内は、即座に残された五つの欠片の中から一つを選び出すと、空いろのくれよんの欠片で、身体に出鱈目な線を引き始める。伴内の身体に引かれた青い線は、すぐに青白い光の粒子群となり、伴内の身体を包み込み始める。

全身が青白い光に包まれていくにつれ、空中でブレーキをかけたかのように、伴内の落下速度は急速に下がり始め、数秒後には空中で停止してしまう。伴内の身体は落下する事を止め、空中に浮き始めたのだ。

「凄い……本当に飛んでる」

伴内は空中で仰向けに浮きながら、驚いたように呟く。少しの間、そのまま呆然と浮き続けていた伴内の耳に、ドドンパの声が届く。

「——ばんない、大丈夫か？」

股間を両手で押さえながら、降下して来るドドンパの姿が、伴内の目に映る。空いろのくれよんの

欠片が直撃した痛みが、まだ残っているのだ。

「大丈夫だ！」

そう言いながら、伴内は上昇してドドンパに近付きたいと思う。すると、伴内の身体はふわりと浮き上がり、上昇し始める。

（そう言えば、白玉さんが言ってたな。思った通りに、空を自由に飛べるって）

思い通りに、自分の身体が空を飛ぶ事を経験した伴内は、白玉の言葉を思い出しながら、ドドンパの元に向かって急上昇して行く。

程無く、青白く輝く二つの光が、夜空で並んで飛び始める。間合いを詰め終えた伴内とドドンパが、並んで飛び始めたのだ。

「あぶねーところだったな！ あと少しで、海に叩き付けられて死んでたぜ！」

眼下に広がる、夜空を映した黒い海を眺めながら、ドドンパは続ける。

「おめーのお陰で助かったぜ、ありがとな！ キンタマが潰れるかと思ったけどよ！」

「お前だったら、潰れたって治るんじゃないのか？」

「治るかもしれねーけど、凄く痛えんだってば！ オイラの身体は確かに頑丈だし、傷とかも治り易いけど、痛さは他の猫人と変わらないんだって！」

夜空を舞い上がりながら、二人は軽口を叩き合う。

「それにしても、ずいぶんと景気良く空いろのくれよんの弾を撃ってたけど、空いろのくれよん……まだ残ってる？」

伴内は右掌に載せた、四つの欠片をドドンパに見せる。

「これだけ。一本と三分の一だけしか残ってない」

「——これだけじゃ、猫街には戻れないよなあ。まあ、死ななかつただけ、マシなんだろうけど……」

ドドンパは、がっくりと肩を落す。

「ガンマン……じゃなくてパチンコの旦那、御無事ですか？」

突如、上空からペンチの声が響いて来る。伴内とドドンパが夜空を見上げると、降下して来る青白い光に包まれた、ペンチの姿が目映る。

自分を助けてくれた伴内の身を案じ、ペンチは降下して来たのだ。自分と同じ、青白い光りを放つ飛行物体を目指して。

「ペンチ！ おめーのせいで、オイラ達は大損だっ！」

伴内がペンチに返事を返す前に、ドドンパが激怒しながら、ペンチに向かって飛んで行く。

「おめーが吹っ飛ばされたせいで、オイラまで巻き添え食らって落っこちて、伴内が助けに来なけりゃ、死んでたんだぞ！」

怒鳴り続けながら、ドドンパはペンチの元に辿り着く。

「しかも、おめーを助ける為に、空いろのくれよんを何本分使っちゃったと思ってるんだよ？ おめーのせいで数億円分の空いろのくれよんが、吹っ飛ばされたんだ！」

「ご、ごめんなさーいっ！」

ドドンパの勢いに気圧され、ペンチはしどろもどろになりながら、頭を下げる。

「まあ、金の事は取らぬ狸の何とやら……だけど、猫街に帰れなくなったのは痛いな」

ペンチは、ドドンパに遅れて自分の元に辿り着いた、困り顔で頭を搔いている伴内の言葉を聞いて、不思議そうに首を傾げる。

「猫街に帰れないって、どういう事？」

「ドドンパが空鯨への着陸に失敗して、バットサン壊しちゃったんだよ。だから俺達は空いろのくれよん使って、猫街まで飛んで戻るつもりだったんだが……」

伴内は残された空いろのくれよんの欠片を、ペンチに見せる。

「これだけじゃ、帰るの無理なんだよ。どう考えても」

「そうでしたか……。だったら、あっしがハジキの姐さんに頼んで、旦那とドドンパを紅鷗に乗せて帰って貰えるように、頼んでみます！ 紅鷗なら、四人くらいは無理すれば乗れますから！」

「そいつは助かる、有難う！」

旦那と呼ばれる事には、少し違和感を感じたのだが、些細な事を気にしても仕方が無いと思い、伴内はペンチに礼を言う。

「いえ、そんな……命を助けて頂いたお礼です、気になさらないで下さいっ！」

上空を飛ぶ空鯨を目指して飛び続けながら、三人は会話続ける。空鯨の移動速度は、空いろのくれよんで得られる飛行能力の最高速度の半分以下なので、三人は数分で、空鯨の近くまで辿り着いてしまう。

青白く輝く三つの光が、空鯨の右側を飛び始める。伴内達が空鯨と並んで、飛び始めたのだ。

「ペンチッ！ 無事だったんだな！」

ハッチが開いたままになっている、空鯨の格納庫の中から発せられた叫び声が、伴内達の耳元に届く。夜空を飛ぶペンチの姿を確認したハジキは、子分の無事を喜び、声を上げたのだ。

「姐さーんっ！」

ペンチも嬉しそうに、格納庫に向かって飛び始める。伴内とドドンパもペンチの後を追ひ、格納庫に向かおうとする。

直後、プロペラの音とレシプロエンジンの音が、夜空に響き始める。レシプロ機が夜空を、空鯨に向かって飛んで来ているのだ。

伴内とドドンパだけでなく、ペンチやハジキ達も、飛行機の音がする方向に目をやる。いきなりの乱入者が、何者であるかを見極める為に。

飛行機は、空鯨の右側……格納庫がある辺りに向かって、一直線に飛んで来る。照明に照らされて明るい格納庫が露出している空鯨の右側は、暗い夜空の中では、矢鱈に目立つ。

それ故、空鯨を目指して飛んでいるだろう飛行機は、外灯に誘われる蛾の様に、伴内達がいる辺りに誘われる事になるのだ。程無く、伴内達が確認出来る程の距離まで、飛行機は近付いて来る。

「あれは……バットツーじゃんか！」

ドドンパは驚いたように、飛行機の名を口にする。空鯨に近付いて来た飛行機は、バットツーだったのだ。

「バットツーって、白玉さんがバットサンの前に作った飛行機か！ だったら、白玉さんの関係者が乗っているかも……」

伴内の言葉に、ドドンパは頷く。

「最近、殆ど千風の専用機になってるんだ、バットツー！」

千風という名前を聞いて、伴内の心が躍る。バットツーに千風が乗っているのかもしれないと知った伴内の心は、バットツーに向く。そして空いろのくれよんの効果で、心が向いた方向に、伴内の身体は飛ぶ。

伴内は、迫り来るバットツーの進行方向を目指して飛ぶ。速度を落としているとはいえ、伴内より速いバットツーに伴内が追いつく事は不可能。それ故、バットツーの進路を先読みして、伴内は進路上でバットツーを待つ事にしたのだ。

目論見通りに、バットツーの進路上を先行して飛んでいた伴内は、背後から迫るバットツーに追いつかれる形でバットツーに近付く。そして、プロペラに巻き込まれないように気をつけながら、バットサンよりは大型であるバットツーの左側の主翼にしがみ付く。

「ば、伴内！」

驚き半分、喜び半分といった感じの口調で、千風が伴内に声をかける。

「千風！」

嬉しそうに千風に声をかけつつ、風圧に飛ばされない様に翼に必死で掴まりながら、伴内はコックピットの方に近づいて行く。

「空……飛んでたって事は、空いろのくれよんを手に入れたのか？」

「ああ、殆ど使っちゃった上に、バットサンまで壊しちゃったけどね」

「バットサンを、壊した？」

「その事に関しては、あいつに聞いてくれ。あいつが着陸失敗したのが、原因なんだ」

伴内は右側の主翼の方を指差す。伴内の指先には、伴内の真似をして右側の主翼にしがみ付いた、ドドンパがいた。

「ドドンパ！ お前……また着陸失敗して、バットサン壊したのか！」

「はははは……なんつーか、空鯨の上は気流が乱れててね」

バツが悪そうに言い訳をしながら、ドドンパもコックピットの方に近付いて来る。

「そんな訳で、バットサンが壊れて帰れないんだ！ このまま猫街まで、オイラ達を乗せて帰ってくれ そうすれば、紅鬮團なんかの世話にならないで済むんだ！」

そう言いながら、ドドンパはコックピットに乗り込み、操縦席の後ろにある後部座席に座る。ドドンパの巨体で、後部座席は完全に埋まってしまう。

「お前、白玉さんへの借金、いくら増やせば気が済むんだよ？」

千風は憤るが、ドドンパは涼しい顔で言い返す。

「今回は、少しだけだけど空いろのくれよんが手に入ったんだぜ！ バットサン弁償しても、お釣りがくるくらいだから大丈夫だもんねーっと！」

身体を輝かせながら飛んでいた、伴内とドドンパの姿を思い出し、千風は伴内達が空いろのくれよんを入手した事を思い出す。

「——弁償するとか、そういう次元の問題だけじゃないんだ！ とにかく、戻ったら白玉さんには、ちゃんと謝るんだよ！ 謝らないなら、乗せて帰ってやらないっ！」

「分ったって、ちゃんと謝るっつーの！」

ドドンパと千風の口論を聞きながら、コックピットに辿り着いた伴内は、後部座席を覗き込むが、巨体のドドンパに埋め尽くされて、後部座席には伴内が乗るスペースは無い。

「伴内は、こっち来て！ 後部座席はドドンパー一人で一杯だろうから」

「こっちって……操縦席？」

不思議そうに問いかける伴内に、千風は頷く。

「俺の……膝の上に座りなよ」

「——ひ、膝の上？」

伴内は驚き、聞き返す。

「他に……座る所無いんだから、仕方が無いだろ。それとも、猫街まで機体にしがみついたまま帰るつもり？」

「いや、それは流石に無理……」

(千風の言う通りにするしか、無いみたいだな。恥ずかしいけど……)

そう考えた伴内は、遠慮がちにコックピットの中に乗り込むと、操縦桿やラダーペダルなどに触れないように気を付けながら、慎重に千風の上に座る。引き締まってはいるが、柔らかい部分は柔らかい身体の感触と、温かな体温が、身体の背後から伴内に伝わって来る。自分よりもかなり大柄な、猫人とはいえ魅力的な女性と身体を密着させ、伴内は胸を時めかせてしまう。

伴内は頬を染めているのだが、夜の闇の中では、その事に誰も気付きはしない。そして抱き抱えているかの様に、伴内を膝の上に座らせている千風も、頬を染めて胸を時めかせているのだが、その事にも、誰も気付きはしない。

「——じゃあ、帰ろうか……猫街へ」

千風は伴内を抱き締める様に、後ろから手を回して、操縦桿を握り締める。操縦桿とラダーペダルを操作して、バットツーを猫街がある方向に向けて、旋回させる。

バットツーは夜風に乗り、猫街に向かって飛び始める。空鯨で経験した冒険話に、話の花を咲かせる伴内達を乗せて……。

伴内達が空鯨から帰って来て、七日が過ぎた四月十日の朝、白玉に呼び出された伴内は、千風と共に白玉研究所を訪れた。朝日に照らされた研究所の前では、ドドンパが木槌を手にして、ガレージを

修理している最中だった。

空鯨から帰った後、伴内は手に入れた空いろのくれよんをドドンパと山分けにして、それぞれ二つずつの欠片を手に入れた。伴内はドドンパと同行した自分も、バットサンを壊した責任を取ると、ドドンパと共にバットサンを弁償すると申し出たのだが、盗み出したのも着陸に失敗したのもドドンパだから、その必要は無いと、白玉は断ったのだ。

結局、ドドンパは二つの欠片を即座に猫街の資産家に売り飛ばし、一億円近い金を手に入れる事に成功した。だが、手に入れた金はバットサンの弁償とガレージその他の修理代、そして白玉への借金の返済の使われてしまったので、ドドンパの手許には、一円も残らなかったのである。

一億円近かった白玉への借金は半分程に減ったのだが、それでも数千万の借金が残されているので、ドドンパは少しでも借金を減らす為に、自分が壊したガレージを、自分で修理し続けているのだ。

ちなみに、伴内は二つの空いろのくれよんの欠片を、二つとも白玉に研究素材として貸し出していた。代わりに、猫神荘の部屋を二部屋、借り受ける条件で。

一つの部屋を住居とし、もう一部屋を開業した何でも屋の事務所として、伴内は使い始めたのだ。伴内は猫又学園の高等部に通いつつ、放課後は頼まれ事なら何でも引き受ける何でも屋として働き、金を稼ぐ事にしたのである。無論、仕事や学校が無い時は、これまで通り、白玉や千風の手伝いも続ける事になっている。

空いろのくれよんを大金に換える事も出来たのだが、この先、何かあった場合の事を考えて、伴内はそうしなかったのだ。

「よお！ 随分と早いけど……何の用だ？」

伴内達が近付いて来る事に気付いたドドンパは、修理の手を休め、伴内達に声をかける。

「ミケの洗礼が終わるから、洗礼室に来てくれって、さっき白玉さんから電話があったんだ」

「あー、伯母ちゃんが言ってた、伴内が元の時空で飼ってた猫か。後でオイラにも紹介してくれよ」

「ドドンパは存在自体が、教育に悪いから駄目！」

「——千風、おめえは本当に、性格キツイよなあ……」
ドドンパと千風のやりとりを聞いて、伴内は楽しげに笑う。

既に自宅の様に、勝手に知り始めた白玉研究所の中に、伴内は千風と共に足を踏み入れる。事務室を通り抜けて地下に下り、伴内達は洗礼室に向かう。

「来たか、伴内……それに千風も。丁度良いタイミングだったね」

ドアを開けて洗礼室の中に入った伴内達に、白玉が声をかける。白玉は洗礼槽前にある、伴内には古臭く見えるパーソナルコンピューター風のコントロールパネルを、操作している最中だった。

「これから洗礼槽の中の聖水を抜いて、ミケを外に出す所だったんだ」

伴内は白玉の話聞きながら、洗礼室の中央にある球形の洗礼槽に目をやる。仄かに青白く光る液体の中では、頭の上から生えている猫耳と、お尻の上から生えている尻尾以外は、どうみても人間の少女にしか見えない猫人と化したミケが、立った姿勢のまま漂っている。

少し膨らみかけた胸と、露出している股間などが目に入り、伴内は妙に恥ずかしくなってしまう、頬を染める。

(何照れてるんだよ、俺は！ あれはミケなんだぞ！)

猫だった頃のミケの姿を努めて思い出し、伴内は心を落ち着けようとする。

「猫の時のミケは、猫人でいえば十二歳相当になると、洗礼槽は判断した様だ。ミケには十二歳相当の教育プログラムが、施されているよ」

教育プログラムとは、猫人として生きて行く為に必要な、大量の知識の事である。猫から変化している最中の猫人の脳に、強制的に刷り込むような形で、教育プログラムは洗礼槽によって施されるのだ。

ちなみに、年齢や性別に合わせた様々な種類の教育プログラムが準備されているので、洗礼を受ける前の猫の年齢や性別に合わせて、洗礼槽が自動的に教育プログラムを選択するのである。

「既にミケは、猫街の公用語……日本語を扱える筈だし、猫街で十二歳の女の子として暮らす為に必要な知識も、得ている筈だ」

そう言いながら、白玉はコントロールパネルを操作し続ける。

「ミケは、白玉さんが預かるんですよね？」

千風の問いに、白玉は頷く。白玉から猫神荘の部屋を二部屋借りている伴内は、既に住処という意味では一人立ちしているのだが、まだ猫街に慣れたという訳では無い。猫街に慣れていない伴内に、猫街に慣れていないどころか、猫人になったばかりのミケを任せるのは不安だと考え、ミケは白玉が預かる事にしたのだ。

ミケを白玉が預かる事を確認し、千風は安堵の表情を浮かべるのだが、伴内は気付かない。

「聖水を抜くよ」

そう白玉が言った直後、ゴポゴポと音を立てながら、洗礼槽から青白く光る液体……聖水が抜けて行く。栓が抜けた風呂桶のように、洗礼槽の底にある栓が開き、聖水が洗礼槽から抜け始めたのだ。聖水はチューブを通して、洗礼室の下の部屋に流れ落ちて行く。

三十秒程かかって、洗礼槽の中から聖水は完全に抜け落ちた。洗礼槽の中に残されたのは、身長が百四十センチ程の、茶色と黒の二色の髪の毛が腰の辺りまで伸びている、人形の様に整った顔立ちをした、猫人の少女だった。

頭髪から顔を出している猫耳も、お尻から伸びている尻尾も、髪の毛と同じ色をしているのだが、ミケの肌の色は雪のように白い。

(髪の毛とかが黒と茶色で、肌が白……全体で、三毛猫と同じ配色になってるんだな)

洗礼槽の床に座り込んでいる、目を閉じたままのミケを眺めながら、伴内は心の中で呟く。

「意識はある筈なんだが……伴内、呼びかけてみてくれないか？」

コントロールパネルを操作しつつ、白玉は伴内に依頼する。白玉の操作に応じ、洗礼槽の正面……伴内達がいる方向にあるドアが、ガチャリと音を立てて開く。

「ミケ！ お兄ちゃんだよ！ 俺の声、聞こえてるか？」

猫だった時と同じ様な口調で、伴内は目を閉じているミケに声をかける。

「——ん？ お兄ちゃん？」

ミケは右手で猫の様に目を擦った後、少し眩しそうに目を開き、声が聞こえて来た方向に目をやる。そして、伴内の姿を確認したミケの顔が、ぱあっと明るくなる。

「お兄ちゃんだっ！」

嬉しそうな声で伴内に呼びかけながら、ミケは洗礼槽の中から飛び出して、伴内の元に駆け寄る。まだ二足歩行に慣れていないが故に、不確かな足取りで。

そして、伴内に甘える様に抱き着いたミケは、顔を伴内の顔に近付け始めると、そのまま伴内と唇を重ねる。嬉しそうに唇を重ねたミケは、舌を出して伴内の口元を嘗め回す。

ミケからすれば、猫が甘えながら、飼い主の口元を嘗め回す感覚での行為だったのだろう。しかし、猫人とはいえ裸の可愛らしい少女に抱きつかれながら、唇を重ねられる伴内の方は、以前のミケが甘えながら口元を舐めて来た際とは、受ける感覚が違い過ぎる。

伴内は驚きのあまり、硬直してしまい、ミケの為すがままとってしまう。

「——猫の時と違って、猫人は恋人以上の関係でなければ、異性と唇を重ねたり、嘗め回したりはしないという常識は、教育プログラムに入ってる筈ですけど……」

千風は眉間を震わせ、怒りを押し殺しながら、白玉を詰問する。

「これは、どういう事なんですかね、白玉さん？」

「いや、ちゃんと教育プログラムには入ってる筈なんだが……。洗礼終了直後に、猫だった時の飼い主に会わせてしまったから、つい猫だった時の癖というか行動パターンが、表に出てきてしまったのかな？」

白玉は千風が怒っている事にも、怒っている理由にも気付いていたので、少し狼狽しながら、弁解を続ける。

「何せ洗礼直後の猫人が、元々の飼い主に洗礼後に会うケースなんてのは、初めてなんでね。こんな風になるなんて、予想も出来なかったんだ」

「——そうなんですか。とにかく、止めないと」

不機嫌そうにミケと伴内の元に歩み寄ると、千風はミケの肩を掴んで、伴内から少し強引に引き離す。

「そういう事は元々の飼い主相手でも、猫人になったら、やっちゃ駄目なんだよ」

怒りを押し殺して、千風は優しい口調でミケを諭す。

「やだー！ ミケはお兄ちゃんと、ちゅーするのーっ！」

千風に後ろから羽交い絞めにされ、伴内から引き離されたミケは、手足をじたばたさせながら、駄々をこねる。

「ちゅーしちゃ駄目ですっ！」

千風も子供っぽい口調で、ミケに言い返す。既に優しく諭す余裕が無くなり、千風は子供の様に、ミケと言い合いを続ける。

そんな二人の事を、伴内は呆然とした顔で眺めている。初心な風に顔を赤らめ、胸を時めかせながら。

(——キス……しちゃった。しかも、ミケ相手に……)

実は伴内にとって、今のミケとのキスが、ファーストキスだったのだ。あくまで、異性を意識する様になった、思春期に入ってからのお話ではあるのだが。

伴内は意外と、初心なタイプの男の子なのである。

以上、「猫街ろまん」体験版でした。

本編は全七章、この百五十ページ弱(四百字詰め原稿用紙換算、約二百九十枚)の体験版と同じ体裁で、三百四十ページ程(四百字詰め原稿用紙換算、六百九十枚強)の分量があります。

終わらない梅雨……果無梅雨を終わらせて猫街に夏を迎える為に、迷いの森に入ったり、猫街の夏祭り……風祭りで、風集めに参加したりと、空鯨から戻った後、伴内が猫街で経験する様々なエピソードが綴られた本編に興味がありましたら、ご購入の上お楽しみ下さい。

さくらじんた / Persona Non Grata

(C) さくらじんた